

研修の評価指標開発のための先行研究調査

岡田佳子 (2015)「ソーシャルスキル教育実践のための導入的な教員研修プログラムの実施とテキストマイニングによる評価の試み」『日本教育工学会論文誌』39(Suppl.), pp.133-136.	
【目的】	ソーシャルスキル教育実践のための教員研修プログラムを実施し、プログラムの評価を行う。
【手法】	受講者の感想をテキストマイニングの手法を用いて分析。
【結果】	プログラムの目標を達成するためには身近な具体例や実際の体験を通じた理解が重要であることが示唆された。また、多くの内容を短時間に凝縮したり、大人数で実施したりすると十分なプログラムの効果が得られないことも分かった。1回の研修で全てを広く浅く網羅するのではなく、対象者と目標を絞ってプログラムをいくつかのユニットに分けて準備する必要がある。研修の効果検証のためには、質問紙による調査や、意欲が実際の行動の変化につながったかを行動指標によって追跡調査することなどが必要。
田中一孝ら (2014)「プレFD を通じた大学教員になるための意識の変化と能力の獲得」『京都大学高等教育研究』20, pp.81-88.	
【目的】	プレFD を修了した大学院生・オーバードクター (OD)・PD がプログラムを通じてどのような意識の変容を被り、またどのような能力を獲得するかを定性的に明らかにする。
【手法】	京都大学文学研究科プレFD プロジェクトに参加したOD 53 名を対象にアンケート調査を実施。プログラム全体について、リレー講義における講義、授業後検討会、事後検討会、グループ・全体ディスカッション、ミニ講義、ワークシートを用いた振り返りについて満足度とその理由を回答。自由記述調査で得られた記述から「～できるようになった」「～の意識が高まった」「～ということに気づいた」という記述を抽出し、類似している記述を分類し、カテゴリ名を付与。最後に得られたカテゴリをその特徴によって上位・下位に分類。
【結果】	「教育技術の向上」「知識の獲得」「教育者としての意識の向上」「研究者としての成長」の4つの大カテゴリーが得られた。
大山牧子ら (2013)「カード構造化法を用いた大学初任教員の授業省察」『日本教育工学会論文誌』37(Suppl.), pp.173-176.	
【目的】	カード構造化法を用いることで可視化される大学初任教員の授業省察の特徴と利用の限界を明らかにする。
【手法】	哲学と歴史学を専門とする大学初任教員2名を対象とし、カード構造化法を用いて、授業省察を可視化。
【結果】	カード構造化法によって促された授業省察は、大学初任教員にとって授業デザインへの意識の高まり、授業改善のための多様な短/長期的な課題を発見し、フィードフォワード情報へとつながることが確認された。カード構造化法は、大学初任教員の授業省察の可視化を促すツールとして機能する可能性を持つことが示された。同時に、効率的な実施方法の開発の必要性が明らかになった。
林素子ら (2012)「立命館大学における新任教員対象『実践的FDプログラム』の成果と展開」『教育情報研究』29(3-4), pp.25-36.	
【目的】	実践的FDプログラムの妥当性と有効性を検証する。
【手法】	各ワークショップ(全10件)終了時に受講生に対して事後アンケートを実施。15項目。加えて、受講が比較的良好(WS受講率50%以上かつオンデマンド講義受講率平均45%以上)な受講生20名を対象に「教授・学習支援能力」の6観点25項目の修得度を4件法で回答、10名から回答を得る。さらにプログラム未修了者22名に対して受講困難の理由等をアンケート調査(5名22.7%から回答を得る)。外部評価委員による評価も実施(口頭および書面)。
【結果】	修了生からの評価は概ね高い。特に「授業の質保証」「自己の専門性の継続的な発展」の項目で平均3.0以上。未修了生は主に時間調整のカテゴリを受講困難の主要因としていることがわかった。
木村優 (2015)「中学校の担任教師はスクールカウンセラーの活動をどのように生かしているのか」『教育心理学研究』63, pp.279-294.	
【目的】	中学校の担任教師が、生徒・保護者への対応において、スクールカウンセラーの活動をどのように生かし、その結果どのような体験をしているのかを担任教師の視点からボトムアップ的に把握する。
【手法】	半構造化面接によって16名の中学校教師にインタビューを実施。1～1時間半程度のインタビュー。「学級担任の立場で、1人または複数の生徒の問題に、スクールカウンセラーとやり取りしながら対応した経験について教えて下さい」と教示して質問項目に回答を求める。グラウンデッド・セオリー・アプローチ(GTA)を援用して分析。
【結果】	「担任のしづらい動きを担ってもらうことでゆとりを得る」「カウンセラーの情報や発言から生徒・保護者への理解を深める」「対応にあたってのガイドを得て判断の参考にする」「気持ちや考えへの保証を得て精神面の回復に役立てる」の4つに整理されることが示唆された。
香川秀太 (2012)「看護学生の越境と葛藤に伴う教科書の「第三の意味」」『教育心理学研究』60, pp.167-185.	
【目的】	学内から学外への状況間移動に伴い、学習者が両者間のいかなる緊張関係に置かれ、どんな社会的相互作用行為に関わり、何がどう変化していくか、学習過程を調査する。
【手法】	基礎看護実習に参加した看護学生2年生12名を対象に、実習期間終了後に半構造化面接を実施。一人当たり2回、各計2～3時間、全34項目。GTAを使用して分析。文字データを検討し、概念の作成→概念間の関係づけ→カテゴリ構成を実施。
【結果】	学内学習では教員の指導にかかわらず、ほぼ教科書通りの実践にとどまる。臨地実習では教科書知識を「現場の実践を批判的に見せるが柔軟に変更もすべき道具」とみなすように変化。これらの結果より、省察やリアリティ豊かな学習を促進する「越境知探究型の学習」を提案。

木村優 (2010) 「共同学習授業における高校教師の感情経験と認知・行動・動機づけとの関連」『教育心理学研究』58, pp.464-479.

【目的】	授業における教師の感情経験と、教職の専門性として説明されてきた認知や行動、動機づけとの関連を検討する。
【手法】	高校教師 10 名を対象とした面接調査を実施。授業観察から教師の実践の特徴や生徒が示す行為を把握した上で、面接により授業中の感情経験を教師に尋ねる段階的な方法を用いた。半構造化面接を約 1 時間実施。質問は 6 項目。GTA を用いて分析。
【結果】	喜びや楽しさなどの快感情は教師の活力・動機づけを高めることで実践の改善に寄与し、さらに授業中では教師の集中を高めることで瞬間的な意識決定と創造的思考の展開を促進していた。一方、いらだちなどの不快感情は教師の身体的消耗や認知能力の低下を導くが、苦しみや悔しさなどの自己意識感情は授業後の反省と授業中の省察に結びつき、教師が実践を改善し、即興的に授業を展開するのを可能にしていることが明らかになった。

徳舛克幸 (2007) 「若手小学校教師の実践共同体への参加の軌跡」『教育心理学研究』55, pp.34-47.

【目的】	若手教師が自らの教師としての実践、学習をどのように捉え、どのように学習していくのかという過程を検討する。得られた結果に基づき、教師の学習に関する若手小学校教師の認知に基づいた学習過程のモデルを作成する。
【手法】	教師歴 1 年目から 3 年目の若手小学校教員 11 名を対象に半構造化面接を実施。1 人当たり 45～90 分。教師になろうと思った動機は何か、自分は教師に向いていると思うか、自分にとっての理想の教師像とはどうであるか、職場での人間関係はどうか、どのようなことに困難や苦痛、もしくは良好であると感じているか、について回答を求める。得られたデータを修正版 GTA で分析。
【結果】	若手小学校教師は、教師として身につけるべきスキルや知識があると語る一方で、他の教師や児童、保護者、地域との相互交渉によって教師としての学習がなされると考えていることがわかった。そのため、「教師になる」とは、個人主義的に達成されるものではなく、社会的相互交渉によって社会的に達成されることが示唆された。さらに、学習の概念とは、従来の個人主義的な達成に加え、社会的達成物であることも示された。

全国プログラムユーズ会議

2016.12.26 MON - 27 TUE

宮城蔵王ロイヤルホテル



1. スケジュール

【1日目】 12/26 (月)	
11:00	東北大学 川内北キャンパス 川北合同研究棟 101 集合 顔合わせ
11:10	川内出発 (チャーターバスにて宮城蔵王ロイヤルホテルへ)
12:10	ホテル到着 (各自昼食をお取りください。3階ロビーが使用できます)
13:00	開会の挨拶 (羽田貴史 大学教育支援センター長)
13:05	PFFP/NFP の歴史
13:20	ユーズ会議の目的
13:25	話題提供 (各 15分 + 質疑 5分) ①PFFP2011 修了生 木内敬太さん ②PFFP2015 修了生 熊谷摩耶さん ③NFP2012 修了生 佐俣紀仁さん ④NFP2013 修了生 野地智法さん
14:45	休憩 (15分)
15:00	全体討論
16:00	まとめコメント
16:30	歴代開発・運営者からのコメント
16:50	閉会の挨拶 (大森不二雄 大学教育支援センター副センター長)
16:55	記念写真撮影
17:00	日帰り参加者帰宅, 宿泊者チェックイン, 休憩

2. 施設

1階: 温泉, ショッピングプラザ

**2階: 1日目 夕食会場 宴会場 "烏帽子"
2日目 朝食・昼食会場 ダイニングルーム "四季"**

***温泉大浴場・カットデック調露天風呂**
入浴可能時間: 5:00-10:00 & 12:00-25:00(1:00am)

***ショッピングプラザ**
営業時間: 7:00-21:00

17:15	インタビューセッション	桜の間 (岡田)	桃の間 (今野)	3F 桜の間 3F 桃の間
		野地さん 佐保さん	熊谷さん	
18:30	夕食会	* インタビューのない方は自由にお過ごしください		2F 烏帽子
20:30	乾杯の挨拶 (杉本和弘 教授)			3F 広瀬・鳴瀬
	懇談会 ~22:00 ごろまで			

【2日目】 12/27 (火)				
7:00-	朝食 (各自)	2F 四季		
9:00	インタビューセッション	桜の間 (岡田)	桃の間 (今野)	3F 桜の間 3F 桃の間
		陳さん	田村さん	
		星野さん	中川さん	
		10:00	休憩	
		10:10 10:40	土田さん 木内さん	森さん 吉良さん
* インタビューの時間になったらディスプレイカクソンを抜けてください				
9:30	ディスプレイカクソン	3F 広瀬・鳴瀬		
	1日目にお寄せいただいたトピックに基づき議論します			
11:30	2日間の総括〜まとめ			
11:45	撤収準備			
12:00	昼食	2F 四季		
13:30	ホテル出発			
14:30	仙台駅到着→その後川内キャンパスへ			

3. 参加者

No.	氏名	所属	職位	Rm#
1	吉良 洋輔 PFFP2011 (UC(パ-フルー))	会津大学 文化研究センター	准教授	713
2	中川 恵 PFFP2011 (UC(パ-フルー))	米沢女子短期大学	講師	715
3	笹野 裕介 PFFP2011 (UC(パ-フルー))	東北大学薬学研究所	助教	
4	韓 放 PFFP2011 (UC(パ-フルー))	東北大学工学部国際交流室	助手	
5	森 新之介 PFFP2011 (UC(パ-フルー))	早稲田大学 高等研究所	助教	713
6	木内 敬太 PFFP2011 (UC(パ-フルー))	高崎商科大学 埼玉県教育局	講師(非常勤) スクールカウンセラー	714
7	佐俣 紀仁 NFP2012 (X(ルポシン大))	東北医科薬科大学	講師	711
8	田村 洋 NFP2012 (X(ルポシン大))	東京工業大学 土木・環境工学科	助教	711
9	土田 久美子 PFFP2013 (UC(パ-フルー))	東京外国語大学 世界言語社会教育センター	特任講師	715
10	野地 智法 NFP2013 (蔵王合宿)	東北大学大学院 農学研究所	准教授	712
11	星野 由美 NFP2013 (蔵王合宿)	広島大学大学院 生物圏科学研究科	助教	716
12	熊谷 摩耶 PFFP2014 (UC(パ-フルー))	湘北短期大学	専任講師	716
13	陳 思聡 NFP2014 (蔵王合宿)	東北大学大学院 教育学研究所	特任講師	712

3階: ユーザ会議会場 “広瀬・成瀬”



7階: 客室 (7th Floor: WiFi 有 *電源が弱い可能性あり)



4. 大学教育支援センタースタッフ

No.	氏名	所属	職位	Rm#
1	羽田 貴史	高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター	教授 センター長	701
2	大森 不二雄	高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター	教授 副センター長	702
3	杉本 和弘	高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター 教育評価分析センター	教授 センター長	703
4	岡田 有司	高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター	准教授	704
5	今野 文子	高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター	講師	705
6	佐藤 万知	広島大学高等教育研究開発センター (2010-2012年度プログラム担当)	准教授	706
7	稲田 ゆき乃	高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター	支援スタッフ (コーディネーター)	710
8	金子 未来	高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター	支援スタッフ (記録担当)	710

参加者プロフィール

氏名 菅野 裕介 (ささの ゆうすけ)		PFFP2011 (UCバークレー)	
所属	東北大学 大学院薬学研究科	職階・職名等	助教
出身地	神奈川県 相模原市	趣味	野球観戦, 娘と散歩
専門	有機合成化学		
メッセージ	<p>近況報告 (最近の研究/担当授業 etc.) 大学院時代より、一貫して医薬品の合成に適用可能な触媒的アルコール酸化反応の開発について研究を行っています。2012 年の助手着任以降、研究室の大学院生の指導と学生実習を主に担当してきました。2014 年 10 月に助教になり、有機化学に関する講義も担当するようになりました。</p>		
メッセージ	<p>切磋琢磨した同期の PFFP のメンバーと話をできるのがとても楽しみです。また、先輩や後輩がどのようなレニングを受け、どのような学びを得たのか是非情報交換をしたいと考えています。 (今野先生：今までの PFFP と NFP で何をやったのか、まとめたものを作っていたらいいと思います。特に変更点に関してハイライトしていただけるとありがたいです。)</p>		

氏名 韓 放		PFFP2011 (UCバークレー)	
所属	東北大学工学研究科	職階・職名等	助手
出身地	中国	趣味	グルメ, 映画
専門	情報教育, メディアリテラシー		
メッセージ	<p>近況報告 (最近の研究/担当授業 etc.) 現在、国際交流の業務を担当しています。主に、留学生研修プログラムを企画し、コーディネーターとして様々な活動を取り組んでいます。授業を担当してないが、普段チャーター活動などの学生活動を指導しています。それとともに、メディア教育について研究しており、論文の執筆を頑張っています。</p>		
メッセージ	<p>PFFP で学んでいたことを生かしているのを実感しています。一方、教育現場の限界を感じつつ、どのように授業あるいはキャンパス活動を通して、学生のモチベーションを高め、生き生きとした学習生活ができるか教育国際化に応じた提案を日々の課題としています。</p>		

氏名 吉良 洋輔		PFFP2011 (UCバークレー)	
所属	会津大学コンピュータ工学部 文化研究センター	職階・職名等	准教授
出身地	大分	趣味	料理、サイクリング、山菜・きのこ狩り、オーディオ、証券投資
専門	教理社会学、ゲーム理論		
メッセージ	<p>近況報告 (最近の研究/担当授業 etc.) これまでゲーム理論を使って協力行動や社会規範の研究をしてきましたが、せつかくコンピューター専門大に来たので、これからはシミュレーションやオンライン実験を使いたいと考えています。授業では、一般教養の「社会学」上、来年度より「社会シミュレーション」を担当します。研究も教育もコンピューター漬けですが、自分の性にあっているようで楽しいです。</p>		
メッセージ	<p>会津大学に就職できたのは、30%くらい PFFPのおかげだと思っています。会議では、他の皆さんがどのような面白い授業をされているか、教えてもらいたいです。</p>		

氏名 中川 恵		PFFP2011 (UCバークレー)	
所属	山形県立米沢女子短期大学	職階・職名等	講師
出身地	秋田県	趣味	ここ数ヶ月できていませんが・・・ギターと卓野球
専門	食と農の社会学 (食をめぐる生・消費の現状と課題)		
メッセージ	<p>近況報告 (最近の研究/担当授業 etc.) 担当授業 「社会学」「地域社会学」「社会調査演習」「社会情報論」「社会ネットワーク論」「情報処理演習 I」「教養ゼミ I」「基礎ゼミ I」「専門ゼミ I」(以上、所属校) 「社会学」(看護学校での非常勤)</p>		
メッセージ	<p>PFFP-2012 年度修了の中川恵と申します。雪かき当番に怯える日々を過ごしています。皆様にお会いできるのを楽しみにしています。</p>		

氏名 森 新之介		PFPP2011 (UCパークレー)	
所属	早稲田大学高等研究所	職階・職名等	助教 (任期3年、延長なし)
出身地	神奈川県	趣味	飲酒、海外ドラマ (推理もの) 鑑賞、無料ネット麻雀
専門	日本思想史		
近況報告 (最近の研究/担当授業 etc.)	<p>3年前に博論を出版したら、業界の大物教授から学術的に殴り付けられました。仕方がないので学術的に殴り返し血祭りに上げてやったりと、業界で名が知られるようになりました。その教授には感謝しています。運よく助教 (任期3年、延長なし) として拾われたものの、まだ授業を担当する機会に恵まれていません。その代わり、早稲田ではFD関係の研修会などに人一倍参加するようにしています。来年度やと教歴を付けられることになり、人心地が付きました。</p> <p>つい先日、職場で30分の研究紹介を同僚相手に英語でしました。用意しておいた原稿を読み上げるだけで精一杯で、これでは90分の英語授業など遠い夢です。とはいえ、多少は度胸が付いたのでやってよかったです。</p>		
メッセージ	このPFPPだけでなく、利活用できるものや挑戦できるものまでさるうちにおいておいた方がよいと思います。		



2011_PFFP@UCパークレー

氏名 木内 敬太		PFPP2011 (UCパークレー)	
所属	高崎商科大学	職階・職名等	非常勤講師
出身地	千葉県	趣味	ドラマ、アニメ、映画など
専門	産業組織心理学 (メンタルヘルス、組織開発)、臨床心理学 (認知行動療法)、コーチング心理学、学校カウンセリング		
近況報告 (最近の研究/担当授業 etc.)	<p>最近企業のスプレッドシートに携わり、メンタルヘルスに関する研究を行っています。本来ストレスチェックの結果は、働きやすい職場づくりに活用されるべきものですが、実践も研究もそこに至るのはなかなか難しいのが現状です。授業は産業組織心理学、ホスピタリティ心理学、生涯学習論を担当しています。特にホスピタリティ心理学は、東京オリンピックに向けて観光産業に力を入れている我が国において、重要な分野の一つだと思います。しかし、日本では、心理学の観点から行われたホスピタリティに関する研究や実践はほとんどなく、学界でも課題となっています。そのため、授業も手探りで進めています。</p> <p>9月に実践サイロロジ-研究所という合同会社を設立しました。心理学研究を金もついでに利用する。逆に言えば、金になる心理学研究を行うことが、私の目標です。研究者兼実業家として、日本の心理学の研究と実践の間にある大きな溝を埋めたいと考えています。</p>		
メッセージ	<p>今回は皆様ながら、大学教員としての私の活動について発表させていただきました。一流大学というわけではありませんが、全く実績もコネクションもない状態から、私が今の大学に採用されたことは、奇跡としか言いようがありません。その高嶺には、東北大学大学教員準備プログラムの存在が少なからず貢献していたはずです。また、実際に教員としての活動を行う中で、PFPPでの学びが活かされ、さらに、これまで気づかなかかった大学教員の難しさや、大学に求められる支援体制が見えてきた部分もあります。今回はこれらの点について、皆様とダイアログを深めたいと思っております。</p> <p>特に一緒にPFPPに参加したメンバーに久しぶりに会えることを楽しみにしています。このような機会をいただけるのも、長年本プログラムの運営に携わってくださった方々や、貢献された参加者の皆様のおかげだと思います。心より感謝申し上げます。</p>		



2011_PFFP 成果報告会

氏名 佐俣 紀仁		NFP2012 (メルボルン)	
所属	東北医科薬科大学教養教育センター	職階・職名等	講師
出身地	群馬県高岡市	趣味	自転車通勤が良いストレス解消です。最近「ラート」なる新スポーツも始めました。独特の身体感覚が楽しいです。
専門	国際公法 (特に海洋法、国際組織法)		
近況報告 (最近の研究/担当授業 etc.)	研究：国連で条約作りが始まった「国家管轄権区域外の生物多様性」について研究をしています。海洋科学者の方々とも話しながら、学際的にやっています。 担当授業：法学入門、憲法、政治学、国際法		
メッセージ	この春、薬学部と医学部しかない医療系大学に着任しました。受講生は国家試験に情熱を燃やす学生連です。そんな環境ですが、私の仕事は、国家試験から目を離させるように誘惑することです。「余計なこと」に思いを巡らせるよるこびを伝えたいと考えています。時に理想と現実のギャップに驚きつつも、一筋縄ではいかない大学教員の仕事を楽しんでいます。皆さんとお話できるのを楽しみにしています。		



2012 PFFP/NFP 成果報告会

氏名 田村 洋		NFP2012 (メルボルン)	
所属	東京工業大学	職階・職名等	助教
出身地	埼玉県	趣味	スキューバダイビング?
専門	土木工学, 橋梁工学		
近況報告 (最近の研究/担当授業 etc.)	演習や実験の授業を担当しています。シラバスの作成する際、NFP で得た知識が大変役立っておりま す。いまは、授業で行っている独自の実験の手法と教育効果を論文にして発表しようと執筆を進めていま す。		
メッセージ	仙台を離れて約3年になります。櫻加しの仙台で (といっても出張で結構行きますが)、NFP の同窓生 にお会いできることを楽しみにしています。特に、実践を重ねて授業が上達しているであろう同期生と熱く語り 合っことが楽しみです!		

氏名 土田 久美子		PFFP2013 (UCパークレー)	
所属	東京外国語大学	職階・職名等	特任講師
出身地	青森県青森市	趣味	読書・散歩・料理・エスニック・コミュニケーションづくり
専門	社会学 (国際社会学・移民論・社会運動論)		
近況報告 (最近の研究/担当授業 etc.)	授業：多文化社会・国際移動に関わる授業を行なっています (学部・大学院)。授業の中には、英語で教えることが求められているものもあり、毎回苦労しています。		
研究：	海外ではロサンゼルスの日系・その他アジア系コミュニケーションと都市再開発をテーマに継続的調査研究を行なっており、国内では外国出身者のネットワーク形成と経済的自立を目指す活動に関心があり、(予備)調査をしています。		
メッセージ	3月まで東北大学文学研究科社会学研究室に所属していました。院生・ポスドクとして比較的自由気ままに過ごしていたせいなのか (その時は自由だとは思っていませんでした)が、または出身大学と今の大学の「文化」が違ふからなのか、いざ教員として働くとなると色々なことかと思っていたのと異なり、多くの戸惑いを抱えながら過ごしています。		
	今回集まったみなさんと経験を共有し、また貴重なお話やアドバイスをいただけたとありがたいです。		



2013_PFFP@UCパークレー

氏名 野地 智法		NFP2013 (蔵王)	
所属	東北大学大学院農学研究所	職階・職名等	准教授
出身地	静岡県浜松市	趣味	息子と釣り
専門	粘膜免疫学		
近況報告 (最近の研究/担当授業 etc.)	○研究：授乳中の乳腺に到達する免疫機能の解明と乳腺炎/乳房炎予防・治療技術開発 ～乳腺炎に苦しむお母さん、乳房炎に苦しむお乳を救いたい！～		
○授業：動物機能形態学 (対象：農学部3年生、15回、2単位)、組織細胞機能学特論 (対象：大学院修士1年、2単位；教授と半分ずつ、計7回担当)、動物生命科学合同講義 (対象：大学院修士1年、オムニバス1回)、細胞生物学合同講義 (対象：大学院修士1年、オムニバス1回)、Food & Agricultural Immunology Joint Lecture (対象：大学院修士1年、オムニバス1回)、Applied Animal And Dairy Science (対象：学部留学生、オムニバス2回)、アドバンスIV (対象：歯学部5年生、オムニバス2回)			
メッセージ	大学院員になって早いわで3年半が過ぎました。教育経験ゼロで赴任しましたが、赴任の年にNFPに参加できたことで、教員としてのいろはを習得することができました。現在は、教育と研究活動に追われながら、日々を必死に過ごしております。最近では、東北大学農学研究所に新たに設置した「食と農免疫国際教育研究センター (CFAI)」の活動にも力を注いでいます。CFAIの運営に携わる運営委員会のメンバーに選出されたこともあり、組織の中でのリーダーシップの発揮の仕方にも興味を持ち、現在、アガリック・リーター育成プログラム (LAD) を受講中です。将来の夢は、「科学の世界で一目おかれる研究室を作ること」です。		

氏名 星野 由美		NFP2013 (蔵王)	
所属	広島大学 大学院生物圏科学研究所	職階・職名等	助教
出身地	群馬県前橋市	趣味	アウトドア、温泉めぐり、着物
専門	生殖生物学、家畜繁殖学		
近況報告 (最近の研究/担当授業 etc.)	昨年11月に広島大学に異動しました。一年が経過し、これまでの仕事には慣れてきたところです。研究指導をする学生数や担当する授業・実習数は以前より少ないので、研究活動に専念できる状況にあります。講義や研究指導では、NFPでの学びを活かすべく意識しながら取り組んでいます。異動後こちらでも、受講必須の新任教員プログラムを受けているのですが、細やかな指導の下、体系的に学ぶことができたNFPは素晴らしいプログラムだったと改めて実感しています。大学での教育に携わっている限り、適切で効果的な指導ができるように、学習・実践・省察、のサイクルを継続していきたいと思っています。		
メッセージ	お世話になった先生方や修了生のみなさんとお会いし、情報交換できることを楽しみにしています。		



2013_NFP@藏王合宿セミナー



2013_PFFP/NFP/NFP 成果報告会

氏名 熊谷 摩耶		PFFP2014 (UCパーラー)	
所属	湘北短期大学 総合ビジネス・情報学科	職階・職名等	講師
出身地	宮城県 大崎市古川	趣味	映画鑑賞、旅行、水墨画 (予定)
専門	比較文化学 (18-19 世紀の英中交渉史)		
近況報告 (最近の研究/担当授業 etc.)	<p>昨年 4 月より現職に就きました。昨年は引越もあり忙しすぎ、今年は指導教官らのご指導の傍で博士号を取得しました。担当授業は主に英語で、基礎英語から、オールイングリッシュで行うアジア文化を教えるなどの授業を行っています。また、ゼミナールでは 18 名の学生に対して「世界の映画にみる異文化理解」をテーマに、様々な映画を題材に学生たちとディスカッション・発表、そして卒論指導を行っています。</p>		
メッセージ	<p>3 年前から PFFP にとても興味を持っていたので、一昨年参加することが出来てとても幸運でした。また、PFFP で得ることのできた体験、知識、先生方や同期たちをはじめとする人々との出会いは、ややもすれば孤独になりがちな現職でも大いに支えとなっております。実際にまだ自分の力が及ばず活用しきれていないところもありますが、このプログラムに参加したことを後悔した日はありません。この場を借りて、改めて御礼を申し上げます。本日はどうぞよろしくお願いたします。</p>		



2014_PFFP@UCパーラー

氏名 陳 思 聡		NFP2014 (蔵王)	
所屬	東北大学 教育学研究科	職階・職名等	特任講師 (教育)
出身地	中国・広東省	趣味	ビール
専門	Citizenship Education		
近況報告 (最近の研究/担当授業 etc.)	<ul style="list-style-type: none"> ● 進行中研究プロジェクト: Asian citizenship and international joint education ● 担当授業: Researching Education in English; Global citizenship education; Alternative schools in East Asia; Education and Global Citizenship 		
メッセージ	NFP2014 年度のユーザーです。よろしくお願ひします。		



2014_NFP@蔵王合宿セミナー



2014_PFFP/NFP 成果報告会



2015_PFFP/NFP 成果報告会

プログラムのあゆみ

プログラムのコンセプト

Tohoku U. PFFP と Tohoku U. NFP は、大学教員に求められる能力を実践的に学ぶ機会を提供することで、参加者のスムーズかつ充実した初期キャリアの遂行を実現するためのプログラムです。



Tohoku U. PFFP と Tohoku U. NFP のコンセプト

2010年度 派遣先現地調査と試験的派遣
 PFPの試験的実施として、札幌大学（オーストラリア）およびUC（アメリカ）に院生13名を派遣し、PFPの試験的実施は現地でのTAリサーチに参加するから1日間、札幌大学に現地の新任教員研修をカヌーで行って10日間を実施。
 【参考】PFP-01：佐藤万知、芳賀潤、刈田和久、今野文子、Todd Enslin（「東北大学 高等教育開発推進センター」教員当時）
 【その他】最終課題論文

2011年度 NFPを試験的に開始、国内実施セミナーを開始
 PFP15名、NFP3名、若手教員からの要望に基づきNFP（海外研修の派遣先は札幌大学）を開始。参加者に助言をうけて、国内で実施できるセミナーを開発し5件実施。
 PFPの海外研修の先行は札幌大学とPFP-02の2グループ、国内で実施できるセミナーを開発し5件実施。
 【参考】PFP-02：佐藤万知、芳賀潤、刈田和久、今野文子、Todd Enslin（「東北大学 高等教育開発推進センター」教員当時）
 【その他】PFP1の作成（派遣先からリサーチ）
 【その他】最終課題論文

2012年度 派遣先の切り分け、国内実施セミナーの拡充
 PFP6名、NFP6名、PFP海外研修は「グループ」、NFPは札幌大学に切り分け、差別化、授業参観の試験的導入（学内3件）「セミナー」に加え、先輩教員を「先達」（8名）と位置づけ個人リサーチ（NFP対象）を実施。
 京大・京大共催で研究会「大学教員を育てる」と入職前と入職後の能力開発を開催。
 【参考】PFP-03：今野文子、芳賀潤、刈田和久、今野文子、Todd Enslin（「東北大学 高等教育開発推進センター」教員当時）
 【その他】最終課題論文

2013年度 NFP：職王合宿に切り替、授業参観の拡充
 PFP9名、NFP2名、NFPの札幌大学研修を廃止、札幌大学からの講師招聘による職王合宿に（2泊3日）授業参観の拡充（学内10件）、模擬授業を全参加者対象、先達リサーチをPFPにも導入。
 広大・京大・立命館・一橋・北大共催で研究会「大学教員を目指す大学院生への全国交流会」を開催。
 【参考】PFP-04：今野文子、Todd Enslin、職王合宿：今野文子、川井一枝（2011年度修了生）、佐紀紀仁（NFP2012修了生）
 【その他】最終課題論文

2014年度 教材（ガイド・冊子・動画）の拡充、OB/OG通信の配信開始
 PFP5名、NFP3名、先輩教員9名に拡充、PFPの配布、CM作成など広報に注力。
 修了生の積極的参画を推進、PFP-05の理論と実践（動画）「などの教材を拡充」
 修了生の積極的参画を推進、PFP-05の理論と実践（動画）「などの教材を拡充」
 【参考】PFP-05：今野文子、杉本和弘、職王合宿：今野文子、杉本和弘、川井一枝（2011年度修了生）、野地隆弘（2013年度修了生）
 【その他】最終課題論文

2015年度 ユーザー入設、海外研修をオンライン化
 ユーザー入設、NFP6名、ユーザー（*）PFP4名、NFP6名、7月から開始。
 授業参観の拡充（学内14件、海外・国内他大学調査訪問をオンラインとして設置）
 院生指導セミナーの導入、全グループの全国公開（13・14年度はNFP職王合宿のみ全国公開）
 【参考】海外他大学訪問調査：今野文子、川井一枝（PFP2011修了生）、国内他大学訪問調査：岡田有司、今野文子、NFP2014修了生）
 【その他】最終課題論文

2016年度 ユーザー入設の拡充、修了生追跡調査の実施
 ユーザー入設、NFP3名、ユーザー（*）PFP4名、NFP18名、計28名。
 授業参観の拡充（学内25件、他大5件）、修了生の授業参観対象にユーザー入設に院生指導セミナーとリサーチリサーチの執筆を導入。
 【参考】海外他大学訪問調査：岡田有司、今野文子、国内他大学訪問調査：岡田有司、今野文子、NFP2016修了生）
 【その他】最終課題論文

PFPF 内容一覧 (2010～2016年度)

	2010		2011		2012		2013		2014		2015		2016	
	S	F	S	F	S	F	S	F	S	F	S	F	S	F
1 プログラム説明会														
2 オリエンテーション														
3 プログラム・イベントロケーション														
4 学習と教授の心理学														
5 高等教育機関としての大学の役割														
6 大学教員のキャリア														
7 大学教員の役割														
8 リフレクションについて														
9 先達とのランチ懇話会														
10 大学教員を考えるWS														
11 比較の目を育てるWS														
12 シラバス作成セミナー														
13 マイロケーション														
14 指導教員の授業内で1コマ実践														
15 模擬授業「授業を見る聞く学ぶ」														
16 授業参観														
17 授業づくり、準備と運営														
18 教授＝学習に関するセミナー														
19 院生指導セミナー														
20 英語の授業を														
21 諸外国の高等教育を知る														
22 大学教育制度と役割について考える														
23 危機管理について														
24 海外集中コース（バーレーンまたはベルリン）														
25 バーレーン集中コース														
26 海外他大学訪問調査														
27 国内他大学訪問調査														
28 ポートフォリオ														
30 リフレクティブ・ジャーナル														
31 先達によるジャーナルへのコメント														
32 運営担当によるジャーナルへのコメント														
33 先達コンファレンション														
34 最終課題論文														

S : ショートコース
 F : フルコース
 e : 動画化/e-learning を提供
 op : オプション（選択）
 : 実施
 (O) : 一部実施
 Δ : 試行導入/選択セミナー
 : 2016年度実施項目

NFP 内容一覧 (2010~2016年度)

	2011	2012	2013	2014		2015		2016	
				S	F	S	F	S	F
1 プログラム説明会									
2 オリエンテーション									
3 プログラム・イベントプログラム									
4 高等教育機関としての大学の役割	(O)								
5 一大学教員のキャリア									
6 一大学教員の役割									
7 リフレクションについて	△			e	e	e	e	e	e
8 一先達のランチ懇話会									
9 一大学教育を考えるWS									
10 一比較の目を育てるWS									
11 シラバス作成セミナー									
12 マイクロティーチング									
13 授業参観「授業を見る聞く学ぶ」									
14 模擬授業									
15 英語で授業を									
16 授業づくり：準備と運営									
17 教授＝学習に関するセミナー									
18 院生指導セミナー									
19 諸外国の高等教育を知る									
20 大学教育制度と役割について考える									op
21 危機管理について									op
22 メール集中コース									
23 国内合宿セミナー（メルボルン大講師による）									
24 海外他大学訪問調査（パース）									
25 国内他大学会訪問調査									op
26 ポートフォリオ									op
27 リフレクティブ・ジャーナル									
28 先達によるジャーナルへのコメント		△							
29 運営担当によるジャーナルへのコメント									
30 先達コンサルテーション									
31 最終課題論文									

S : ショートコース
 F : フルコース
 e : 動画化し e-learning で提供
 O : オプション (選択)
 O : 実施
 (O) : 一部実施
 △ : 試行導入 / 選択セミナー
 : 2016年度実施項目

2016年度プログラムの内容

活動名	内容	時間/頻度	フル	ショート
事前学習 (e-learning)	プログラムの目的、内容について事前に web 上で各自動画を視聴し理解を深める	約 1 時間		
オリエンテーション	参加者顔合わせ、プログラムの目的、大学教育の課題と教員の役割に関する講義、比較教育学の視点を組み入れたワークショップ	1 日		
リフレクションとは (e-learning)	リフレクションの理論と実践方法について web 上で動画を視聴して理解を深める	約 1 時間		
授業デザインとシラバス作成	大学の授業における目標・活動・評価について、事前に参加者が作成したシラバスを改善することを通して考える	4 時間		
教授＝学習に関するセミナー	認知科学の側面から、人間の情報処理や理解に関する理論やモデルを学び、授業や学習のデザインに活かせる知見を得る	3 時間×2 回		
授業参観	授業経験豊かな教員の授業を参観し、授業後のディスカッションを通して、教育活動について考えるヒントを得る	1 人当たり最低 3 件		
マイクロティーチング	一人 7 分間のティーチングの実践とフィードバック、および授業リフレクションの実施	半日		
模擬授業	一人 17 分間の模擬授業の実践と先達教員からのフィードバック、および授業リフレクションの実施	半日		
院生指導法に関するセミナー	研究室運営、学生を対象とした研究指導に関する手法や留意点を学び、海外他大学訪問調査に向けて準備をする。参加者同士のディスカッションにより日本の高等教育と比較する	半日		
大学教育制度と役割について考える	アメリカの高等教育について学び、海外他大学訪問調査に向けて準備をする。参加者同士のディスカッションにより日本の高等教育と比較する	半日	op	
国内他大学訪問調査	国内の他大学（主に私立大学）を訪問し、キャンパスや授業参観を行い、学生の学びを促進するために大学がどのような教育環境を整えているのかについてフィールドワークを行う	3 日間	op	
海外他大学訪問調査	カリフォルニア大学バークレー校にて、キャンパスや授業参観を行い、学生の学びを促進するために大学がどのような教育環境を整えているのかについてフィールドワークを行う	5 日間	op	
先達教員による個人コンサルテーション	先達教員（経験豊富な先達教員）による個人コンサルテーションとグループディスカッション	半日		
リフレクティブ・ジャーナルの作成	各セミナー後に自身の学びを振り返り、これまでの自身の経験や価値観と結び付けながら教育観を言語化する	各セミナー後、毎回		
課題論文	「学生について、大学でのよい学習経験とはどのようなものかと考えますか。また、そういった学習経験を表明するために、大学や大学教員は何をするべきだと考えますか。というテーマで執筆する	4,000 字		
成果発表	プログラムで学んだことを発表し、OB/OG や先達らとの質疑応答を行い、総括する	3 時間		
受講証明書				
修了証				

PFFP/NFPの参加者の所属

	2010		2011		2012		2013		2014		2015		2016		計
	PFFP	NFP													
学内															
文学研究科		3	1	1		5					2	1	1	1	15
教育学研究科				1		1		1					1	1	5
法学研究科			1	1		1		1				1		1	6
経済学研究科	1			1		1					1				4
理学研究科			1				1						1		3
医学系研究科	6	2							1					1	10
歯学研究科														6	6
薬学研究科		1													1
工学研究科		3		3					1						7
農学研究科			1			2									3
国際文化研究科	5	4	1	1			1					1	2		14
情報科学研究科		2	1									1			4
環境科学研究科	1						1	1				1			4
医工学研究科								1							1
学際科学フロンティア研究所									1			2			5
東北アジア研究センター						1									1
原子分子材料科学高等研究機構											1	1			2
マイクロ・ラジオアイソトープセンター													1		1
大学院院														1	1
高度教養教育・学生支援機構						2								1	3
(学内合計)	13	15	3	6	6	9	2	5	3	4	2	5	3	3	111
学外															
理化学研究所											1				1
東北工業大学										1					1
岩手大学											1			4	5
いわき明星大学											1			1	2
東日本国際大学												1			1
熊本大学											1				1
仙台白百合大学													1		1
東北学院大学														2	2
鶴岡大学														1	1
学外合計										0	2	1	3	0	15
合計	13	15	3	6	6	9	2	5	3	4	4	6	6	3	111



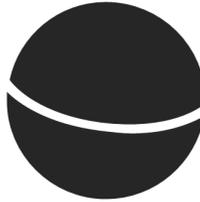
教育関係共同利用拠点
「知識基盤社会を担う専門教育指導力育成拠点」
東北大学 高度教養教育・学生支援機構
大学教育支援センター





**全国プログラム
ユーザ会議**
@宮城蔵王ロイヤルホテル

東北大学 高度教養教育・学生支援機構
2016.12.26 (月) -27 (火)



**2010~2017
7年間の軌跡**

プログラムのあゆみ

プログラムの立ち上げの経緯

- 2つの予算
 1. 特別経費
 2. 教育関係共同利用拠点
- 世界水準で大学教育を実施する能力の育成
 - 日本の大学院教育は研究能力の訓練が中心
 - 大学教授職に必要な教養・知識・技能を育成する必要あり

➡ 大学院生向けのプログラム開発をしよう！

開発のプロセス

海外の先行事例調査
海外の大学における研修への院生派遣
プログラムの国内化
他大学への公開
プログラム評価・改善

参加者からの声, CPDスタッフからの声
共同利用運営委員会, 文科省の審査結果
外部評価の結果

プログラムの変遷

1. プログラムのコンセプト p.19
2. プログラムのあゆみ p.20
3. PFFPの内容一覧 p.21
4. NFPの内容一覧 p.22
5. 2016年度プログラムの内容 p.23
6. PFFP/NFPの参加者の所属 p.24

開発のプロセス p.20

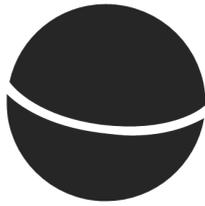
- 2010 1 派遣先実地調査
試験的派遣 (パークレー/メルボルン)
- 2011 2 NFPを試験的に開始
国内実施セミナーを開発
- 2012 3 派遣先の切り分け
国内実施セミナーの拡充
- 2013 4 NFP:蔵王合宿に切替
授業参観の拡充
- 2014 5 教材の拡充
OB/OG通信配信開始

開発のプロセス

- 2015 6 ショートコース設立 (つまみ食いコース)
海外派遣をオプション化
プログラムの全国公開 (他大学参加者の受入)
- 2016 7 ショートコースの拡充
国内他大学訪問調査の拡充
授業参観の拡充

プログラムのコンセプト





この2日間で
何をしたいのか

ユーザ会議の目的



ユーザ会議の概要

- 2016年度機能強化経費を獲得
 - 学内の競争的資金を得て実施
 - 長期的視点でのプログラムの有効性評価
 - 単なるプログラム終了直後のアンケートでは明らかにできないような遅効性
 - プログラムに対する認識・意味付けの変容
 - プログラムの経験が現在どう影響しているか
- ➡ 専門性開発プログラムの評価指標を開発



2日目の流れ

- インタビュー
 - 1人30分
 - 時間になったら桜／桃の間においでください
- ディスカッション
 - 議論したいトピックをシンポジウム後に聴取



拠点事業における評価計画

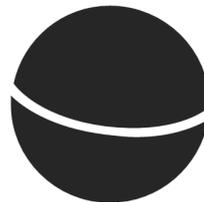
	【成果指標】	【焦点・対象】	【測定方法】
レベル 5	組織変容度 Systemic Impact	組織への影響, 効果 (組織・学生による評価, 波及効果)	ココ!
レベル 4	行動変容度 Behavior	職場での実践 (知識・スキルの転移, 実践, 応用)	
レベル 3	学習到達度 Learning	獲得した知識, スキル (参加者の学びの状況)	リレクティブ・ジャーナル 課題論文
レベル 2	満足度 Satisfaction	参加者の知見 (参加者の満足度)	質問紙調査 インタビュー
レベル 1	参加状況 Participation	プログラム実施状況 (参加者数・属性, 割合等)	記録, 観測

Kirkpatrick, D. L. (2006) Evaluating Training Programs: The Four Levels. Barrett-Koehler.
Guskey, T. R. (2000) Evaluating Professional Development. Corwin Press.



1日目の流れ

- 話題提供
 - PFFP2011修了生 木内敬太さん
 - PFFP2015修了生 熊谷摩耶さん
 - NFP2012修了生 佐俣紀仁さん
 - NFP2013修了生 野地智法さん
- 全体討論
 - 参加者全員からの声を!
- 懇談会
 - 参加者同士の交流, 情報交換



どうぞ
よろしく!

話題提供

PFFP

大学教員準備プログラム 長期経過と効果

木内敬太 高崎商科大学 非常勤講師
(産業心理学、ホスピタリティ心理学、生涯学習論)

2011年度PFFP修了

keitak517@gmail.com

私の考えるPFFPの長期的効果

成績
評価

授業中
居眠り

自信をもって働けること



課題
提出率
の低さ

教科書が
網羅
できない

Page 2

本日の内容

1. 発表者の紹介
2. PFFPでの経験
3. 自身の採用試験への影響
4. 現在の教育活動
5. 今後の課題

Page 3

発表者の紹介

- 1984年生まれ (32歳)
- 専門：産業組織心理学、臨床心理学
- 2011年PFFP参加 (博士課程1年時)
- 心理学の専門家が大学教員を目指す理由
 - 研究や科学的根拠に基づく実践
 - 経済的安定
 - 専門家の養成

- プログラム開発と評価に関する事前知識
- 実践家 (教育寄り)

PFFPでの経験

個人的な留学経験
シドニー大学 (学部)

1. セミナーおよびマイクロティーチング
 - 高等教育、大学教員の現状とあり方
 - シラバスの書き方、授業の構成
 - 授業のマネージメント、教授法
 - 測定と評価
2. 海外研修
 - カリフォルニア大学 (バークレー)
 - 学習・学生支援システムの視察
 - グループ発表 (就職との関連)

Page 5

採用試験への影響

- 高崎商科大学の場合
 - シラバスの提出 (4科目分)
 - 面接および模擬授業
- その他の大学でも...
 - 研究1割、教育9割
 - 教務も教職員力を合わせて
 - アクティブ・ラーニングを売りに

Page 6

現在の教育活動

- 授業構成
 - 復習・予習テスト
 - 個人ワーク
 - ディスカッション
- 成績評価
 - 積極的な授業参加 (テスト、発表)
 - 振り返り (ディスカッションを踏まえて)
 - ポートフォリオの作成
 - グループ発表
 - 期末試験 (記述の内容は事前に発表)

Page 7

今後の課題

- 学生による評価と学問との葛藤
- 成績評価の配分
 - 経験重視 (課題) vs 到達度重視 (試験)
- 時間管理：今のところ1コマ6時間
- ICT設備
 - 成績の即時フィードバック
 - 録音・録画

Page 8

まとめ

- PFFPの長期的効果について、教育を重視した教員の立場から考えた
- 高等教育や大学教員に関する信念に基づいて、自信をもって働けることが、一番の効果だと思われる
- 経験と達成度、学生の評価と学問の葛藤、時間管理等、課題は尽きない



ご静聴ありがとうございました。

Page 8

PFFPを受講して

湘北短期大学 総合ビジネス・情報学科
熊谷摩耶

本日の流れ

- I 受講理由
- II プログラム参加の効果
- III 現場と実践
- IV プログラムを受講して

I. PFFP受講理由

- ① 大学教員の仕事内容は膨大で漠然としており、一人では把握しきれず、不安であった
- ② 学生として研究者としてのキャリアはあるものの、大学の教員としての意識や基礎的な知識等の素地が欲しかった
- ③ 海外の大学事情を知ることのできるパークレー校への研修に興味があった
- ④ プログラムを担当している教員の方々が魅力的だった

II. PFFP参加への効果②

- 【現職での効果】
- ④ 採用試験での積極的な姿勢
→ 先達の先生方との懇談会、マイクロティーチング等実施による不安の払拭
- ⑤ 授業プランを立てる際、迷いが生じた際の参考
→ なかなか他の先生方の授業を受講することはできない。また、かつては学生であったときの自分の目線を忘れがちになり、初心に帰ることができる。
- ⑥ 海外の大学事情を実見した経験、知識、教育観への影響
→ パークレー校への参観

II. PFFP参加の効果①

- ① 大学教員に必要な問題意識、基礎知識、ツールなどを学べた
→ パークレー校への研修、ルーブリック評価法、先生方による講義等
- ② 女性研究者としての今後のキャリアを考えることができた
→ 先達の教員との懇談会、交流
- ③ 他分野の研究者との出会い、繋がりをはじめ新たな発見があった

III. プログラムとその実践①

- 【教育現場とその調整】
- ① シラバス作成時の注意点を把握できるようになってきた
→ 同科目の担当教員と内容をすりあわせる必要がある、という組織の中で働く認識
- ② 授業への創意工夫への意欲を持つべきであるという意識を保持
- ③ 大学教育そのものへの理解の素地が活用されている
→ 教授会等の議題に対しておおまかなイメージは沸く（本来であれば自分でもっと行うべきでしょうが・・・）

III. プログラムとその実践②

- ④ 短期大学の学生とこれまで担当してきた学生との学力の差、生活スタイルの違いの調整
→ 自主学習時間の負担時間の調整、授業の進度、既知情報、嗜好等。
⇒ 「現実の学生」との差異を確認（リフレクティブ・ジャーナル、および担当教員からの返信等の活用）
- ⑤ 教育観の変化
・ 学生の成績が正しく評価されること
・ 学生が積極的に授業に参加したという実感を持たせることで、自主学習の姿勢を促す
⇒ より、**実生活に繋がった「実践的」な講義と実践を意識的に行う**

IV. PFFPを受講して (総括及び今後の課題)

- ① リフレクティブ・ジャーナルにて記した「今後の課題」へのフォローアップがまだ行い切れていない。
- ② 「よい教育」とは何か、と自身の教育観を常に考え、柔軟に対応する習慣を持ち続けること。
- ③ その他
・ 他にも多くの先達の女性教員がいるとより様々なロールモデルをお伺いできるのでは。
・ 可能であれば、様々なキャリア(or現職)の先生との懇談も行える多様なキャリアプランを聞けるのでは。
・ 国内の大学や授業への見学。(実施済み)

話題提供

2012年NFP修了

佐俣 紀仁

話題

- I. プログラムの影響・効果
- II. どのように役立っている？
- III. 今だからこそその評価の視点

はじめに:今の教育環境

- 医学部・薬学部の教養教育
 - 法学、政治学系科目を担当
 - 初年次教育も

- 着任一年目

I. プログラムの影響・効果



I. プログラムの影響・効果



I. プログラムの影響・効果

パンフに写真を掲載していただく
⇒各所で格好のツカミに

I. プログラムの影響・効果

- セルフ・リフレクションの習慣化
 - 自分・学生双方の原因を整理

- ⇒授業を常に微調整

II. どのように役に立ってる？

授業設計：
授業の**目的**に沿った合理化
「あれもこれも教えねば」との決別

II. どのように役に立ってる？

「普通の」法学教育

一定の内容を教えることが目的に

例：憲法であれば人権条項全て

表現の自由

信教の自由

経済的自由

生存権etc..

法学系の各種試験では必須

III. どのように役に立ってる？

私立医・薬学部生のリアクション

「医師・薬剤師国試に出ますか？」

II. どのように役に立ってる？

医師・薬剤師をめざす学生

法学を専門とする学生

⇒授業の目的・内容も当然異なる

III. どのように役に立ってる？

法学教育の常識から自由に

到達目標を自分で工夫・調整

目標の為に必要な素材を選択

youtube, ブログ記事etc.

学生の声から

「意外に法学も面白い」

「国家試験だけが人生ではない」

今だからこそその評価の視点

大学教育における多様性

大学の力点

学生のレベル/専門分野

今の所属大学の特殊性

「それ国家試験に出ますか？」

70分×15回×3クラス

出席率「だけ」は良い

落第させずらい

今だからこそその評価の視点

研究大学出身者にこそ

大学教育の多様な実情を

NFP受講後の自分

全国プログラムユーザー会議

野地 智法
東北大学大学院農学研究科

自己紹介 野地智法



1976年 浜松市生まれ (40歳)
1995年 静岡県立浜松西高等学校卒業
2000年 東北大学農学部卒業
2002年 東北大学大学院農学研究科修士課程修了
2005年 東北大学大学院農学研究科博士課程修了 博士(農学)取得

2005年-2009年 東京大学医科学研究所 博士研究員
2009年-2013年 ノースカロライナ大学 博士研究員
2013年-現在 東北大学大学院農学研究科 准教授
2013年度 NFP受講
2015年-現在 東北大学食と農免疫国際教育センター 感染免疫ユニットリーダー
2015年-現在 東京大学医科学研究所 客員准教授
2015-2016年度 LAD受講

今日お話する内容 (NFPから学んだもの)

- アクティブラーニング
- オムニバス
- PBL (Problem-based learning)

私が担当する講義

- 動物機能形態学 (対象:農学部3年生、15回、2単位)
- 組織細胞機能学特論 (対象:大学院修士1年、2単位:教授と半分ずつ、計7回担当)
- 動物生命科学合同講義 (対象:大学院修士1年、オムニバス1回)
- 細胞生物学合同講義 (対象:大学院修士1年、オムニバス1回)
- Food & Agricultural Immunology Joint Lecture (対象:大学院修士1年、オムニバス1回)
- Applied Animal And Dairy Science (対象:学部留学生、オムニバス2回)
- アドバンスIV (対象:歯学部5年生、オムニバス2回)

私が考えるNFPから学んだ理想的な講義の時間配分



アクティブラーニングは学生の理解度を確認する上で効果的手法である。

ブレイク

- 最先端のサイエンスの魅力
- 学生のキャリアパス
- 留学
- 東進予備校
- あなたが畜産農家になるとしたら
- どうでもいい話 などなど

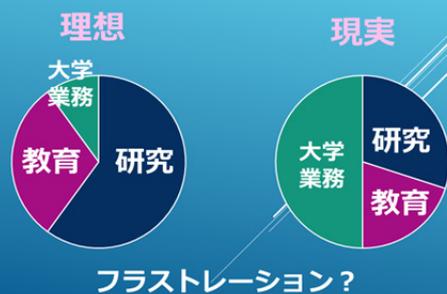


私が担当する講義

- 動物機能形態学 (対象:農学部3年生、15回、2単位)
- 組織細胞機能学特論 (対象:大学院修士1年、2単位:教授と半分ずつ、計7回担当)
- 動物生命科学合同講義 (対象:大学院修士1年、オムニバス1回)
- 細胞生物学合同講義 (対象:大学院修士1年、オムニバス1回)
- Food & Agricultural Immunology Joint Lecture (対象:大学院修士1年、オムニバス1回)
- Applied Animal And Dairy Science (対象:学部留学生、オムニバス2回)
- アドバンスIV (対象:歯学部5年生、オムニバス2回)

オムニバスは、自分の研究の魅力伝え、自分と一緒に研究したいと学生に思わせる最高の場

大学教員としてのエフォート率



PBL (Problem-based learning)の活用

- 学生自身が研究課題を構築できるステージに揚げるための教育
- 学生が研究する楽しさを覚える
- 学生が出してくる結果を、自分の出した結果のように楽しめる
- 研究の時間配分が少なくても、気持ちが楽になる

今野先生、NFPスタッフの皆さま

ありがとうございました。

ディスカッションセッション

1.2 昨日の議論から

- 職場での葛藤の理由2:
- 組織文化の相違: 研究大学としての東北大学と所属大学の目標・使命「学生志向」という理念を共有しても、「学問志向で専門分野の学問を究めたい学生」の集まる大学、「就職をはじめとする実用性を求める学生」の集まる大学、「選抜性がなく学習意欲がないが、とりえず進学してきた学生」の集まる大学...
- 大学・短大の多様性を理解しつつ、共通性を追求するにはどうしたらよいか
- 大学教員の矜持を失わず、学生たちに接するにはどうしたらよいか(大学教員のプライドの根源は何か)

2.1 対応の方策

◆大学教育の目的と役割, 学ぶことの意味についての講義:
 学問は目的であるとともに人間形成の手段であるという面がある。この両者の比重は、研究者のための大学と社会人・職業人のための大学では異なりがちだが、学問中心主義以上に大学の共通項である(難点)現代科学は、価値自由の立場に立つので、(研究大学ほど)教員や院生は、人間形成のための学問のように価値観のかかわる事項は忌避する傾向が強い。どのような内容がふさわしいか

2.3 対応の方策

◆学生論の講義:
 学生とはどうい存在か、どう発達するのか、授業における理解は認知心理学(呂本)を組み入れてかなり構造化したが、学生の成長をどう見るのか、知的専門的発達のみか人格的なものも含むのか、欧米の大学と日本の大学はここが一番違う。人間を育成するという視点の弱さ。それを支えているのは、学生発達理論。この導入と普及が弱い。
 ◆教員論も再検討する必要がある:
 どこまで教員がかかわるかは微妙な問題。ここは教員以外の専門職化が進んでおらず、教員のステータスが非常に高い、かつ職員の数が学生数に比して増加しなかった日本の特性がある。ハラスメントは重要だが、所属大学の中で本来取り組み受講すべきこと、どこまで各論に至り得るか。

6-2 研究倫理に関するキャリア・ステージ別学習参照基準

役割	対象	課題
レベル0	博士研究員に就く、進出するか、責任ある研究職を先導する・指導	専門分野における倫理的問題、特に「研究不正」の発生を防止することが出来る
レベル1	研究倫理及び共同研究で責任ある研究の実施を指導	①学生指導において責任ある研究不正の発生を防止することが出来る ②共同研究において責任ある研究不正の発生を防止することが出来る ③研究倫理に関する倫理的問題を認識し、適切な対応が出来る
レベル2	研究倫理及び共同研究で責任ある研究の実施を指導	①研究不正の発生を防止する ②共同研究において責任ある研究不正の発生を防止することが出来る ③研究倫理に関する倫理的問題を認識し、適切な対応が出来る
レベル3	研究倫理及び共同研究で責任ある研究の実施	①研究不正の発生を防止する ②共同研究において責任ある研究不正の発生を防止することが出来る ③研究倫理に関する倫理的問題を認識し、適切な対応が出来る
レベル4	研究倫理及び共同研究で責任ある研究の実施	①研究不正の発生を防止する ②共同研究において責任ある研究不正の発生を防止することが出来る ③研究倫理に関する倫理的問題を認識し、適切な対応が出来る
レベル5	研究倫理及び共同研究で責任ある研究の実施	①研究不正の発生を防止する ②共同研究において責任ある研究不正の発生を防止することが出来る ③研究倫理に関する倫理的問題を認識し、適切な対応が出来る

1.1 昨日の議論から

- 職場での葛藤の理由1:
- 専門職は、①「職業的社会化」(専門職に必要な知識・技能と価値観を身につけ、一人前として認められ、自覚すること)と②「組織的社会化」(職場の文化を身につけ、期待される役割を果たし認められ、自覚すること)が必要で、そのための③「予期的社会化」(教育機関での訓練)が準備されているが、大学教員の場合、この3つが整合していない
- 特に、「予期的社会化」(大学院教育)の目標が専門分野での研究能力(学位)の獲得であり、一般教育(教養教育)は通過する前段階でしかないのに、着任するとその担当が主な役割になる場合のずれをどう克服するか
- リベラルアーツが学士課程教育全体で完結しているアメリカとの違い

1.3 昨日の議論から

- 職場での葛藤の理由3:
- 所属大学におけるポジションの相違: 研究指導を担当するポジションか一般教育など特定の授業責任のみ担うポジションか
 - 前者は研究室運営や学生指導のために学生に対する強いコミットメントが不可欠であるが、後者は余りメリットがない。しかし、後者のポジションの方が、大学への適応を重視する初年次教育を担当する地位にあるため、大学の側では、強いコミットメントを求めがち。しかし、当該の学生自身が研究室やゼミ配属に関心があるため、後者のポジションの教員の関与にあまり期待しない
 - 後者のポジションの教員は、4年間にわたる学生の変化を観察できないため、扱う学生の発達課題と現状を認識しにくい

2.2 対応の方策

◆大学の多様性とそれぞれの使命に関する講義:
 アメリカのPFPPやFDでは不可欠な部分。総合大学・複合大学・単科大学などの組織形態、国公私立などの設置形態、学部教育・大学院教育・専門職大学院などの理解は重要
 (難点)多様性を論じると教育困難を抱える大学の課題も視野に入るが、そのことでかえって教育困難大学への就職を回避したり、始めから型にはまって学生や大学を見ることにならないか

2.4 対応の方策

◆大学院では研究は教えるが研究者は育てていないという指摘:
 研究の側面をどうするか、大学院でしっかり指導されているという前提。ただし研究倫理、責任ある研究活動はどの研究科も完備できていない。PFPP/NFPがスタートした以後の課題。東北大学は、学部1年生からシニア教員まで6つのステージに区分した研究倫理教育体系を決定しており、その一部はPFPP/NFPに導入可能
 また、学んでいる学問分野の特性が、教員研究者の行動様式や価値観も決めるということは教員論の中に組み込めるかもしれない。ただし、その種の調査研究では日本ではなかった。

義務付け

レベル0	①研究倫理の具体的な事例に関するワークショップを3年以上参加すること ②3年以上1度以上、研究倫理審査など研究倫理に関する実務や具体的なケースの処理を経験すること
レベル1	①研究指導やメンターシップに関する認定されたセミナー/ワークショップを5年以上1度以上参加すること ②5年以上一度以上4年以内の学習回数に基づき最低3時間程度の学習を行うこと
レベル2	①5年以上1度、最低3時間程度の学習機会を設けること ②学習機会にはケーススタディを含み、実践的側面を養い機会を設けること ③人権や生命倫理、工学倫理など、より広い理解が必要な分野においては、さらに必要な学習内容を追加、実施すること
レベル3	①最低3時間程度の学習機会を設けること ②学習機会にはケーススタディを含み、実践的側面を養い機会を設けること ③人権や生命倫理など、より広い理解が必要な分野においては、さらに必要な学習内容を追加、実施すること
レベル4	①各学部において3-4年生に於いて、研究指導等の機会などに3時間程度の学習機会を設けること ②各研究科において大学院前期課程の学生に於いて、研究指導等の機会などに最低3時間程度の学習機会を設けること ③学習機会には研究倫理の機会を含めること ④人権や生命倫理など、より広い理解が必要な分野においては、さらに必要な学習内容を追加、実施すること
レベル5	①各学部において前期2年間のうちに3時間程度の学習機会を設けること ②学習機会には質疑応答の機会を含めること

3 アンケートからの課題

- ◆個人として抱える最大の課題:ワークバランス(7名)
→背景には人件費の削減, 解決はまず個人的ノウハウか
- ◆所属組織をどう変えるか(1名)
- ◆授業方法論, 学生をどう議論させるか(1名)
- ◆共同研究での同僚との付き合い方(1名)
- ◆思いつきでなんでも変える上司とどう付き合って継続的に仕事をするか(1名)



CPDとは

PDセミナー

PFFP

NFP

LAD

SDP

DTP



「全国プログラムユーザ会議」の実施報告

2016年12月27-28日、2010年度から続いてきたPFFP/NFPの修了生が集い、

「全国プログラムユーザ会議」が開催されました。

「プログラムユーザ」とは、PFFP/NFPのプログラム参加者、つまり同窓生を指します。

全国プログラムユーザ会議の目的は、長期的視点でのプログラムの有効性評価です。
プログラム終了直後のアンケートのみではわからない運行性の効果を検証しました。

- 現在から振り返ってプログラムをどのように認識・意味付けているのか
- プログラムでの経験が現在の仕事にどのように活かされているのか

これらについて、プログラム修了後数年が経過した今、それぞれの就職先でどのように感じているかについて、率直に語っていただきました。

当日は、13名のプログラム修了生が全国から集まりました。
その中から4名に、話題提供として「今、PFFP/NFPをふり返る」と題して講演をいただきました。



PFFP/NFP

高等教育や大学教員に関する 信念に基づいて、 自信を持って働けること

高崎商科大学 非常勤講師
木内敬太さん

2011年度のPFFP修了生である木内敬太さんからは、「高等教育や大学教員に関する信念に基づいて、自信を持って働けること」がプログラムの一番の効果であったとお話しいただきました。木内さんは、現職の就職活動における採用試験においても、シラバスの提出が求められたこと、面接や模擬授業においてPFFPで実施したマイクロティーチングが役立ったことなどを実体験を交えて紹介してくれました。また、「経験と達成度、学生の評価と学問の葛藤、時間管理等、課題は尽きない」といった現状も報告されました。

PFFP
2011
修了生



私の考えるPFFPの長期的効果

成績評価

授業中居眠り

自信をもって働けること

課題提出率の低さ

教科書が網羅できない

Page 2

01:53 10:58



大学の教員としての意識や 基礎的な知識等の素地が 欲しかった

湘北短期大学 専任講師
熊谷摩耶さん

2014年度のPFFP修了生である熊谷摩耶さんからは、当時のPFFPの受講理由として「大学教員の仕事内容は膨大で漠然としており、一人では把握しきれず、不安であった」「学生として研究者としてのキャリアはあるものの、大学の教員としての意識や基礎的な知識等の素地が欲しかった」「海外の大学事情を知ることのできるパークレー校への研修に興味があった」「プログラムを担当している教員の方々が魅力的だった」ことが挙げられました。また、プログラムの効果としては①大学教員に必要な問題意識、基礎知識、ツールなどを学べた、②女性研究者としての今後のキャリアを考えることができた、③他分野の研究者との出会い、つながりをはじめ新たな発見があった、④採用試験での積極的な姿勢、⑤授業プランを立てる際、迷いが生じた際の参考、⑥海外の大学事情を実見した経験、知識、教育観への影響を報告いただきました。

PFFP
2014
修了生



Ⅱ. PFFP参加の効果①

- ①大学教員に必要な問題意識、基礎知識、ツールなどを学べた
→パークレー校への研修、ルーブリック評価法、先生方による講義等
- ②女性研究者としての今後のキャリアを考えることができた
→先達の教員との懇談会、交流
- ③他分野の研究者との出会い、繋がりをはじめ新たな発見があった



01:53 10:58

大学教育の多様性を理解し リフレクションしながら 実情に寄り添った授業を設計できること

東北医科薬科大学 講師 佐俣紀仁さん

2012年度のNFP修了生である佐俣紀仁さんは、プログラムの影響・効果として「セルフ・リフレクションの習慣化」「授業の目的に沿った合理化」を挙げてくださいました。これにより、問題が発生した時に、自身と学生の双方における原因の整理とそれに基づく微調整が可能になったとの報告がありました。また、資格試験合格がミッションである教育メインの大学において教養教育を担う現職の実態、難しさ、それに対してどのようなモチベーションと姿勢で臨んでいるのかについて語っていただきました。「研究大学出身者にこそ、大学教育の多様な実情を知る」機会が提供されることの重要性について、ご自身の経験を交えてご指摘いただきました。

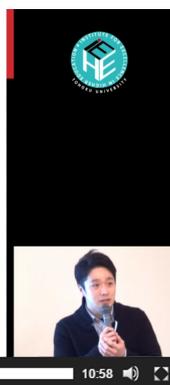


NFP
2012
修了生



I. プログラムの影響・効果

- ・ セルフ・リフレクションの習慣化
 - ・ 自分・学生双方の原因を整理
 - ⇒ 授業を常に微調整



NFP
2013
修了生

学生に興味を持ってもらい 共に研究に取り組む関係性を育むために 授業設計において工夫できることは

東北大学大学院農学研究科 准教授 野地智法さん

2013年度のNFP修了生である野地智法さんからは、NFPで学んだこととして①アクティブラーニング、②オムニバス授業の活用方法、③PBLの3点が挙げられました。優秀な学生に大学院に進学してもらい、研究者として育てもらうための有効なきっかけとして、授業に注力することの重要性をご自身の日々の授業設計上の工夫を事例としてお話しいただきました。学生と困難を様々な乗り越えながら研究を遂行していくためには、関係性作りが大切であり、そのためにはまずお互いに関心を持ってもらうことが必要であると力説いただきました。



私が考えるNFPから学んだ理想的な 講義の時間配分



A-21 全国プログラムユーザ会議・ウェブページ

ユーザ会議では、これら話題提供に引き続いて参加者全員でのディスカッション、個別インタビューを行いました。この様子は現在分析中です。今後はこれらの分析結果をもとにプログラムの有効性評価のための評価指標を開発することを予定しています。

さらなるプログラムの発展にご期待ください。

お忙しい中全国からお集まりいただきました参加者のみなさまに心から感謝いたします。ありがとうございました！



本ユーザ会議は「平成28年度機能強化経費（部局ビジョン）事業：専門性開発プログラムの有効性に関するユーザベース評価指標の開発」の一環として開催されました。

【海外他大学訪問調査前メールマガジン】

①【PFFP/NFP】パークレー研修に向けて(1) 2017年1月5日 10:13

パークレー研修 参加者のみなさま

大学教育支援センターの今野です。今年もどうぞよろしくお願いたします！

さて、本日からパークレー研修参加者に向けての情報提供のメール配信を開始します。過去の参加者からの声で最も多いのが「もっとちゃんと準備してからパークレーに行ければよかった」という後悔です。

もちろん完璧な準備はできませんし、パークレーに行って初めて「こうしたことを知っておくべきだった」と気づくのは、学習の成果の一つつだと考えるので必ずしもネガティブな意見ではないと我々は考えています。ですが、何にも知らずに行くことできるはずのこと、なんだよかわからぬ、ということになってしまいう可能性があるのも事実です。実際そうしたケースが毎年発生しています。

このメール配信を開始して今年で3年目ですが、毎年「もっとあのメールをちゃんと読んでおけば良かった」という声が寄せられています。また、例年は2月に配信を開始して1月から配信を開始してきます。

パークレー研修はまだまだだと思っているかもしれませんが、日々の研究や業務と同時並行で遠航の準備をすることは、結構大変です。意識的に時間をみつけて作業を進めてもらえたら嬉しいです。

また、パークレー研修では、事前の準備や工夫次第で、普通にパークレーを訪問した場合には見せてもらえないようなところ、聞けないことにも触れられるチャンスがたくさんあります。それらを充分に活かすためにも、今できることを少しずつ始めておきましょう。

さて、今回の研修は、2016年度 PFFP/NFP フルコースから5名、2015年度参加者から1名(大橋さん)が参加します。大橋さんは、12月のセミナー時にみなさんと種あわせをしましたが、2月の選考授業にもフィードバック担当として参加していただく予定です。よろしくお願いたします。

さて、本日はまず基本的な情報提供からお送りします。

 【パークレーのウェブページ】 <http://www.berkeley.edu/>
 すでにフィードワークの訪問先調査の時点で一通りみているかと思いますが、パークレーの雰囲気や基本情報を把握するために一度時間をとって眺めてみてください。
 研究や教育だけでなく、キャンパスライフとして、様々なアクティビティの紹介もあります。

【GSI Teaching & Resource Center】 <http://gsi.berkeley.edu/>
 GSIとは、Graduate Student Instructor の略で、パークレーのいわゆるTAのことです。今回プログラムを提供してくれるのは、このセンターのスタッフたちです。ウェブページでは、GSIに関する様々な情報や研修プログラムの案内について公開されています。TAとして働くうえでこういった要件があり、どんなトレーニングを受けているのかについて知っておくと、実際にGSIに会った時に理解が深まるでしょう。

特に、センター長のLinda 先生には教養・学習に関するレクチャーをしていただきます。とっても優しい素敵な方です。

 それでは、渡航まで体調を整えつつお過ごしください。
 次回のメール配信もお楽しみに！

今野

 (署名省略)

②【PFFP/NFP】パークレー研修に向けて(2) 2017年2月7日 8:58

パークレー研修参加者のみなさま

大学教育支援センターの今野です。「パークレー研修に向けて」メールマガジンはやいもので既に2月…。前回の「パークレー研修に向けて」メールマガジンから1か月が経ってしまいました。

みなさん、いかがお過ごしでしょうか？
 中には、先週報道にあったパークレーでの暴動を知って心配されている方もいるかもしれませんが、私も、よく見慣れた場所が壊されていたり、火を付けられたりしている映像を見て、ショックを受けたのですが、現地スタッフは驚くほど落ち着いておりキャンパスも既に通常に戻っているようです。なので、みなさんも過度な心配はせず着々と準備を進めてもらえればと思います。

パークレーといえば、フリスビーやピッチャーの地。
 興味がある人はぜひ調べてください。研修中のキャンパスツアーでも、これを知っていると、倍楽しめる解説もありますので、ご期待ください！
 また、今回の暴動化したのは、実は学生ではなく、外部の団体のメンバーだということもあります。冷静に受け止めて判断したいと私も思っています。

この報道を受けて、アポ取り連絡をストップしていましたが、今週から随時進めて行きたいと思っています。よろしくお願いたします！

さて、今回のメールでは、現地でのプログラムスケジュールを解説します。添付ファイルは、現時点でのスケジュールのドラフトです。印刷して手元に置きながら、下読を確認するとわかりやすいと思います。

- 【1日目(27日)】
- ・Welcome and Introduction to the Program
プログラムの全体を紹介するイントロダクションと現地スタッフとの顔合わせです
 - ・Teaching and Learning at Berkeley
パークレーでの教育、学習についてのレクチャーを受けます。
レクチャーを担当するのは GSI センター長のリンダ先生です。
 - ・The Basics of Teaching
ティーチングの基本について、現地で GSI が学んでいる内容をもとにレクチャーをしていただきます
 - ・Lunch
各自キャンパス内、あるいは周辺で自由に昼食をとります。
 - ・Campus tour
パークレーのキャンパスツアーをします。
 - ・フィードワーク
15:00～フィードワークの時間です。
この時間にアポを入れてもよいですし、図書館や校内施設の見学をするなどして有意義に過ごしましょう

【2日目(28日)】

- ・Observation: The Politics of Educational Inequality (調整中)
全員で講義を参観します。
- ・Workshop: Fostering Student Participation/フィードワーク
パークレーの教員向けのワークショップに参加するが、自分でフィードワークをして週ごころを選択できます。
- ・Lunch
各自キャンパス内、あるいは周辺で自由に昼食をとります。
- ・フィードワーク
～15:00 までフィードワークの時間です。
- ・Observation: Brain, Mind, and Behavior
全員で講義を参観します。

【3日目(1日)】

- ・Observation of GSI session (The Politics of Educational Inequality)
前日に見学した講義の GSI セッションを見学します。
「GSI セッション」とは、陸生 TA による授業を指します。
ディスカッションや課題の解説などが主な内容になることが多いです。
現地の大学院生がどのようにこのセッションを運営しているのか

実際に見ることが出来る貴重な機会です。
ただし、GSIセッションは少人数で行われるため、一度に参加できる人数が限られています。2つの時間帯がありますので、2グループに分かれて見学します。
9時または14時開始のセッションから、どれかひとつを見学してください。
また、それ以外の時間は、フィールドワークの時間に充ててください。
どのセッションで参加するかは、アポの状況と希望順で決めます。
すでにアポが取れていて、どのセッションに参加すべきかわかっている人は今野まで連絡をください。基本的に早い者勝ちです。
後ほどセッションわけをします。

- Briefing of Day 2
本日の内容の確認と、昨日の内容のリフレクションを行います
- Observation of GSI session (Brain, Mind, and Behavior)
前日に見学した講義のGSIセッションを見学します
- 11時から16時開始のらる、どれかひとつを見学してください。
また、それ以外の時間は、フィールドワークの時間に充ててください。
Graduate Student Social Event
現地のGSIらとディナーに行きます。みんなで割り勘するので、その心づもりをお願いします。

【4日目 (2日)】

- Briefing of Day 3
本日の内容の確認と、昨日の内容のリフレクションを行います
- Student Learning Center
学生の学習支援を担うセンターを見学します
- Lunch with GSIs
現地GSIと昼食をとりながらディスカッションをします
- フィールドワーク (13時以降)
各自フィールドワークの時間に充ててください

【5日目 (3日)】

- Overview of Day's Program
本日の内容の確認と、昨日の内容のリフレクションを行います
- Professional Standards and Ethics Workshop
倫理についてのワークショップを行います
- Presentations
本研修のまとめとして、みなさんが成果発表をします。
内容は本研修の成果を基ずるものであれば自由です。
使用言語は英語で10分間とします。
発表スタイルは自由ですが、例年PPTを作成して発表する例が多いです。

詳細や補足情報は22日のセミナー時にお伝えします。
何か気になることや不明な点があればお問い合わせください。

今野...
(署名省略)

③【PF/FANFP】パークレー研修に向けて (3) 2017年2月17日 18:58

パークレー研修 参加者のみなさま

研修授業お疲れ様でした。いや〜長丁場でしたね。
ささっとリフレクテリブジャーナルを提出して
なるべく早く、意識をパークレー研修モードにしていくことをおすすすめします。

来週がフィールドワークのアポを固める勝負(最後)の一週間です。
1件でもアポが取れている人は、それに向けて準備をしておいてください。
2件目、3件目も取りたいという方は、現地スタッフと相談しますその
その旨、ご連絡ください。

複数アポが取れ始めている人は、ダブルブッキングにならないよう
気をつけてスケジュールを整理しておいてください。

スケジュールが確定し始めたら、前回のメールでご案内した通り

3日目のGSIセッションの希望の時間をメールでお寄せ下さい。早い者勝ちです。
(既に連絡済で、私の方から「予約確定」の連絡をもらった人は必登ありません。)

【現時点で予約済みの方々】

Observation of GSI session (The Politics of Educational Inequality)

9時～: 田中さん、吉田さん、王さん
14時～:

Observation of GSI session (Brain, Mind, and Behavior)

11時～: 田中さん、
16時～:

必ずしも、全てのフィールドワークの時間をアポで埋める必要はありません。
現地に行つてからとれるアポもあるかもしれませんし、キャンパスの各種設備、
図書館や博物館を見学するということもありません。

例年、参加者は現地に入ってからGSIや現地スタッフから情報を得たり
新たな授業参観、ディスカッションの機会を得ており、フィールドワークの
時間が足りないと感じる人もいます。(出発前の1件のアポが参観して、ゼミに出席したり
その先生の授業を見学したり、ホームパーティーに呼ばれたり...。ただしこれは、入念に
準備をして臨み、議論が盛り上がったケースに限ります。準備不足で臨んだ場合には
後でお叱りのメールが届くこともありますので、十分気を付けてください。)
ということなので、パララスタスを考えてスケジュールをたててもらえればと思います。

また、充実した活動にするには、積極的に自分からコミュニケーションをとって
行動を起こすことが大事です。

なお、本メールには、パークレーのキャンパスマップを添付します。
自分がフィールドワークに行く場所の確認にお役立てください。

それでは、本日分の参考ウェブページのご案内です。

【The Politics of Education Inequality の授業情報】

<https://schedulebuilder.berkeley.edu/explore/courses/SP/2012/6178>
見学に行く授業のうち、教育学分野の講義に関する情報です。
過去にこの授業をとった学生の成績分布や、授業の受講者数などの
データが参照できます。

また、下記のサイトでは上記の授業を受講した学生による授業評価コメントを
みるができます。いろいろと面白い指摘がなされていますので
ぜひ目を通して見てみてください。
<https://minjiaocourses.com/ratings/view/course/19381/>

【Brain, Mind, and Behavior の授業情報】

<https://schedulebuilder.berkeley.edu/explore/courses/SP/2016/17718>
2日目の午後に見学に行く授業の情報です。

下記からは、シラバスをダウンロードすることができます。
かなり詳細にわたって情報提供がなされていますね。

<http://mcb.berkeley.edu/labs2/prestifiles/mcb.berkeley.edu/labs2.prestifiles/u3/Syllabus%20BMB%202016.pdf>

また、下記のサイトでは上記の授業を受講した学生による授業評価コメントを
みるができます。

<https://minjiaocourses.com/ratings/view/course/6520/>

【宿泊先の情報】

<http://www.berkeleyabquesthouse.org/>

宿泊先となるパークレーゲラゲスハウスのウェブページです。
宿泊先は、パークレーの山の上にあります。

イメージとしては青葉山の中に位置している感じです。

皆さんはスタンダンチームを2名でシェアします。

アメニティの情報も載っていますので、確認してみてください。

バスタオルとボディースーツ、シャワーなどはあります。

蘭プランシバジャマはありませんで、お忘れなく。

平日は無料で乗車できるシャトルバスが運行しています。

毎日のバスを利用してキャンパスに通うことになりました。

【シャトルバスの情報】

http://www2.libi.gov/Workplace/Facilities/Support/Busses/off-site_blue.html
グスタフバス最寄りのバス停は、「54」です。
キャンパスに行くには「Euclid」のバス停で下車することが多いです。
6:30~20:00の間は10分おきに出ています。
19時を過ぎると、グスタフバスまで行かず山の中腹でサービス終了と
なってしまうバスもあるので、各自時刻表を確認してください。
グスタフバスに到着したら、このバス用の pass をお渡しします。
たった一枚の紙なのですが、これを持っていないとシャトルバスには乗れません。
シャトルバスのサービス終了後は、例年、タクシーなどを利用しています。
また、到着日である26日は日曜日であるため、このシャトルバスは利用できません。
タクシーを使います。

(署名省略)

それでは、渡航まで体調を整えつつお過ごしください！
特にこの週末は冷え込むとのことですので、十分気を付けてくださいわね。

今野
..
(署名省略)

④ 【PPFPNFP】パークレー研修に向けて (4) 2017年2月21日 11:09

パークレー研修参加者のみなさま

来週の間頃は、すでにパークレーのアプローチもいよいよ佳境を迎えているかと思えます。
フィールドワークのアクティビティもいよいよ佳境を迎えているかと思えます。

フィールドワークでお世話になる先生方に、ちょっとしたものでよいので
細心の気持ちは示せるような「お土産」を持参することを強くおすすめします。
東北グッズでもよいですし、仙台のものでも喜ばれるでしょう。
過去には「こけし」をしょっていった参加者もいましたが、そこまでなくとも
多忙な中、時間を割いてくれる先生方への感謝の気持ちを表すものとして
何がよいかが、この週末の時間を充てて考えてみてください。

これまで3回にわたってお届けしてきましたが「パークレー研修に向けて」
はチェックしていただいているでしょうか？
みなさんそれぞれに忙しく過ごしていることかと思いますが、少しでも
時間を有効に使って、目を通してもらったり、紹介しているウェブサイト
アクセスしてもらえたら嬉しいです。

例年、研修前に「もっと英語を頑張っておくと尻を叩いてほしかった」という
意見が寄せられます。今日は、英語への耳ならしの意味を込めて、動画を2本、
記事を1本、ウェブサイトを1件紹介します。

【The Science of Learning: An Overview for Graduate Student Instructors (GSI)】
<https://youtu.be/8KfP-wlF5>

この動画は2016年にパークレーで開催された Teaching Conference for First-Time GSIsに
おける講演の様子です。初めてGSIを担当する学生のためのオリエンテーション的性質づけの
カンファレンスです。30分程度の動画です。オプションで設定すれば字幕も表示できるので
Teachingについて語るボキャブラリーの確認や英語に慣れるという意味でも役に立つと思います。
また、GSIたちがどのようなトレーニング、知識提供を受けているのかがについて
知ることができている内容になっています。

動画の冒頭に登場するのが、私たちが現地でお世話になるリンダ先生です。
現地スタッフにフィールドワークのアクティビティのアシストをお願いした人は
このリンダ先生が煙々にコーディネートして下さっています。

【Berkeley's 2016 Distinguished Teaching Award】
<https://youtu.be/KZssFaVsJ60>

2016年のパークレーの教育賞受賞者のビデオです。
授業の様子や学生の様子、それぞれの教師がどのように教育を考えているかが
垣間見られる内容になっています。
6分弱と短い動画なので、ちょっとした休憩時間にぜひ見てみてください。
パークレーの教員、学生のタイハーンティンも出てきます。
東北大でもこんなビデオが作れたらいいな~とつい思っています。
2015年 Ver.などもあるので、興味があったらぜひ見てみてください。

【GSI Teaching & Recourse Center の Linda von Hoene 先生関連の記事】

<http://grad.berkeley.edu/news/egrad/how-students-learn/>
我々がお世話になるGSIセンターのセンター長関連の記事です。
記事の内容からは、「学び」についての研究や、Linda先生がそれに対して
どのように取り組んできたかが、Berkeleyで起きていることとして
理解できるかと思えます。

【Student Learning Center のウェブページ】
<http://slc.berkeley.edu/>
3日木曜日の午前中に開学に行く予定の、Student Learning Centerのウェブページです。
東北大学のSLAのお手本、見本となった取組みがなされている場所です。
他にも学生の様々な側面へのサポートが展開されています。
国内調査に参加した人は、東北大学だけではなく、立命や同窓社のサービスクラスとの
比較ができると思えます。

(署名省略)

直前の一週間、ぜひ計画的に準備を進めていってください。
応援しています！

今野
..
(署名省略)

⑤ 【PPFPNFP】パークレー研修に向けて (5) 2017年2月23日 12:35

パークレー研修参加者のみなさま

大学教育支援センターの今野です。
昨日の事前研修、お疲れ様でした。

いよいよ出発が3日後に迫りました。
体調と心の準備を万全にして、先発組のみなさんは羽田空港、
後発組のみなさんは、パークレーで会いましょう。

こそっと、お伝えしておきますと、昨日の事前研修も
リフレクティブジャーナルの対象です。ほんの5分くらいいいので
気づいたこと、感じたこと、パークレーで自分は何に焦点を当てて
学びたいかについて、ちやちやと書いて提出してしましましょう。
提出期限は2/27(月)としますが、どうしても時間が取れない場合には
パークレー研修後でもOKです。

また、明日、2月24日15時締切で、以下をメールで私宛に送ってください。
(田中さんは、もうお送りいただいたいでいるので不要です。)

★フィールドワークのスケージュール
面会相手の名前、日時、場所
今野の方でも控えています。念のためダブルチェックしておきたいと思えます。

まだ出発前ですが、帰国後のスケジュールをおさらいしておきます。
3月5日に帰国してからは、いるいると忙しい日が続きます！
どうか計画的にこなしていきましょう。

3月8日(水) 海外研修リフレクティブジャーナル提出締切
3月14日(火) 先達コンサルテーション
3月17日(金) 先達コンサルテーション
3月17日(金) 最終レポート提出締切

3月23日(木) 成果報告会

パークレー研修のリフレクティブ・ジャーナルは研修全体をまとめて1本でかまいません。もし毎日提出したいという場合には、拒みませんが負担が大きくなると思うので、自分で考慮してください。

3月14日の先進コンサルテーションでは、先進の先生方と30分程度個別にお話しできます。プログラムを通して明らかになった疑問や課題「先生はこんな点についてどうしているんだろう？」という素朴な質問をぶつけてみます。もし、「この先生とお話ししてみたい！」という希望があればメールでお知らせください。組合せを既定するときに配慮します。

また、23日の成果報告会では、プログラム全体を総括する成果報告のプレゼンテーション(一人当たり10分程度)をしていただきます。パークレー研修だけが発表内容になるとは限りませんが、滞在中から写真や資料集めなどを心がけておくと、スムーズに進むと思います。

最終レポートの締め切りは、3月オリエンテーション時にお渡ししたプログラムに掲載していた期日に限りがありましたので訂正いたします。正しくは3月17日です。この締切におくると修了証が発行できない事態になる場合があります。かならず締め切りを守るようにしてください。

そのためにも、パークレー滞在中から、意識して文章化を進めておくことをおすすめします。

「パークレー研修に向けて」は、本メールを含めてこれまでに5通お送りしましたが目を通してもらえたでしょうか。またの方は、ぜひ渡航前に紹介しているウェブサイトにアクセスしてみてください。

さて、今日はもう直前ですので最後の情報提供のみです。

【パークレーの天気】

<http://www.accuweather.com/us/berkeley-ca/94704/february-weather/332044>

昨日お伝えした時よりも、日・月の天気が悪いようですね！

せめて、キャンパスツアーの時には晴れるといいですね！

【パークレーのレストラン情報】

<http://hatchstudioinc.com/archives/3559>

レストラン情報はネット上にいろいろあるので、興味があれば調べてください。

過去には、上記のページで紹介されているお店のうち、ベトナムと中華料理、

タイ料理のお店、そしてAu Coquetlet Cafe Restaurantに行きました。

初日のお昼にAu Coquetlet Cafe Restaurantでバーガーやハンケージを食べるのが

ここ数年の恒例になっています。当日のお腹のコンディションと相談して

どこで食事をとるか相談しましょう。

ちなみに、3年前の最終日は何故か「チベット料理」、2年前は「残った食料処理の会」

でした。

※現地でお酒を飲む時、買うときは、日本人の場合、必ず年齢確認をされます。

バスポートを持って買い物に行くようにしましょう。

それでは、まずはみなさん、心身ともに健康で時間通りにお会いできるようお願いいたします！忘れ物のないように！

今野

--

(署名省略)

◎【PFPPNP】パークレー研修に向けて(6) 2017年2月24日 16:18

パークレー研修参加者のみなさん

大学教育支援センターの岡田です。

現地の交通機関とパークレーの街についてのガイドブックを

以下のアドレスにアップしました。パソコンにダウンロードするなど

して参考にしてみてください

それではまた空港・パークレーでお会いしましょう

--

(署名省略)

PFFP

石原雅文

受講前

大学での講義経験がない

アドバイスをしていた高校生が全国大会に出場

動機

- 学生教育の方法を専門的な知識、方法とともに身に着けたい。
- 研究者でもあり教育者でもある大学教員という仕事についていろんな視点から知っていききたい。
- この講座を通じて、自分なりの大学教員像を形作っていききたい。

大学教員とは「組織に雇用された総合的専門家」 羽田先生

心理面 感情知性(箱田先生)
授業づくり・準備と運営(邑本先生)

実践面 シラバス作成(串本先生)
院生指導・コーチング(出江先生(実はご近所)、倉重先生)
授業参観

実践 模擬授業・マイクロティーチング

心理面

感情知性: EIの測定及び向上の可能性。一般化知性と線分弁別検査

授業準備と授業運営: 既有知識を刺激、3つの「そう」、
具体と抽象の往復

実践面

シラバス作成: 初の作成、授業目標は可を基準に
ルーブリック(レポート作成の基準)

コーチング: 聴くことの難しさと重要性 未来解決型のコーチング

授業参観 フィードバックの重要性、具体的な授業配分
耳に残るフレーズ、板書だけでなくプリントの活用
グループワーク

模擬授業・マイクロティーチング

緊張しました。

板書形式(力学:慣性の法則 深く考えすぎると自分もよく分からなくなるトピック)

改善点: 字の大きさとスピード、書くタイミングと話すタイミング、
声の大きさ、図の丁寧さ、問いかけの仕方 etc..

良かった点: 背筋が伸びてた。

異分野交流

学生と教員の関係 (フラット型 垂直型)

学び方 (積み上げ式 幅広く学ぶ式、グループワーク、講義形式)

専門的な知識に基づいた実践的な方法が身に着いた
理系の授業参観では、現場ならではの授業運営を具体的に知ることできた。
文系など異分野の授業参観では、相対的な視点で理系の授業を見ることができた。
大学教育の面白さを再確認
模擬授業を通じて(少し)自信がいった。
パークレーに行きたかった。

2016年度PFFP成果報告会

2016年PFFPフルコース 王偉
国際文化研究科 専門研究員

プログラム参加する前に

大学教員の仕事

教育

研究

サポート

授業の流れ



学んだこと・変わったこと

- (1) 知識
- (2) スキル
- (3) 教育観

(1) 知識

- ① 箱田裕司教授の「学習意欲とEQ」
- ② 出江紳一教授の「ティーチングとコーチングの違い」

(2) スキル

- ① 授業デザイン (シラバス作成)
- ② 授業の難しい部分を実演する (邑本俊亮教授のセミナー)
- ③ 質問を提示するタイミング

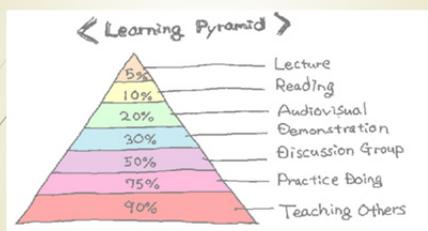
(3) 教育観

- ① 教育者の視点から学習者の視点へ
- ② 専門以外の知識に触れる
- ③ 常に内省する

まとめ

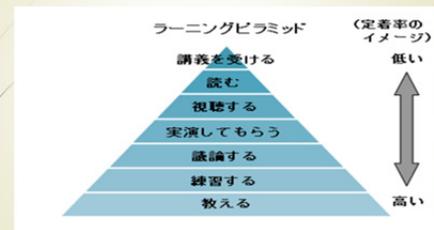
- 人を教えてからこそ自分自身の不足が分かってくる (マイクロティーチングや模擬授業など)

Learning Pyramid



図出典 : <http://pettomo.azurewebsites.net/?p=3401>

ラーニングピラミッド



図出典 : <https://allabout.co.jp/gm/gc/449536/>

まとめ

人を教えるからこそ自分自身の不足が分かってくる



教える前に教える知識やコツを学ぶべき

このプログラム (PFFP) が教える基礎・コツを学ぶ貴重な場

PFFP

Preparing Future Faculty Program

成果報告

東北大学大学院教育学研究科博士課程後期
林 慎吾

2016年度 PFFPスケジュール

1. 「オリエンテーション」
2. 「授業デザインとシラバス作成」
3. 「授業づくり：準備と運営」
4. 「本当のかしこさとは何か－感情知性と大学教育－」
5. 「国内他大学訪問調査」
6. 「マイクロティーチングセミナー」
7. 「コーチング技能を活用した院生指導」
8. 「模擬授業」
9. 「海外他大学訪問調査 事前研修」
10. 「海外他大学訪問調査」
11. 「先達コンサルテーション」

※随時
授業参観
に参加

POWERPOINT DESIGN 2

PFFPで得られた5つの成果

- シラバスの書き方について理解する。
-
-
-
-

POWERPOINT DESIGN 3

1. シラバスの書き方を理解する

PFFP研修を受講する前は、シラバスの役割について考える機会ではなかった。

Before	After
<ul style="list-style-type: none"> ☐ 「教員が授業で何をやるか」示すもの ☐ 学生が授業内容を参考にしているもの 	<ul style="list-style-type: none"> ☐ 「学生との関係づくり」に必要なもの ☐ 「授業設計」を具体化するもの

シラバスは大学教員と学生との架け橋となるツールである！

POWERPOINT DESIGN 4

PFFPで得られた5つの成果

- シラバスの書き方について理解する。
- 授業準備の重要性を理解する。
-
-
-

POWERPOINT DESIGN 5

2. 授業準備の重要性を理解する

PFFP研修を受講する前は、「授業の準備にどのくらいかけるものか」、「魅力的な授業とは何か」分からなかった。

Before	After
<ul style="list-style-type: none"> ☐ 先達教員のように魅力的な授業を展開したいと考えていた ☐ 学生時代に受講した授業の中でしか、考えることができなかった 	<ul style="list-style-type: none"> ☐ 実際に先達教員の授業を参観することが必要 ☐ 質の高い授業を行うために、日々チャレンジする ☐ 経験も必要

魅力的な授業は一朝一夕で出来るものではない！

POWERPOINT DESIGN 6

PFFPで得られた5つの成果

- シラバスの書き方について理解する。
- 授業準備の重要性を理解する。
- マイクロティーチング（模擬授業）の重要性を理解する。
-
-

POWERPOINT DESIGN 7

仙台市には盲導犬は何頭いるでしょうか。

- A. 0頭
- B. 1頭～10頭
- C. 100頭

POWERPOINT DESIGN 8

仙台市には盲導犬は何頭いるでしょうか。

A. 0頭

B. 1頭～10頭

C. 100頭

POWERPOINT DESIGN 9

3. マイクロティーチング(模擬授業)の重要性を理解する

PFFP研修を受講する前は、先生方を目の前に授業をすることは不安でした。

Before	After
<ul style="list-style-type: none"> 自身の授業を見られるのは恥ずかしいな、不安だなと思っていた 他の人から指摘されるのは少し苦手だなと思っていた 	<ul style="list-style-type: none"> 先達教員(第三者)からのアドバイスは重要である 自分の授業している姿を見ることは重要である 褒められるとうれしい

客観的に授業を見ることは重要!

POWERPOINT DESIGN 10

PFFPで得られた5つの成果

- シラバスの書き方について理解する。
- 授業準備の重要性を理解する。
- マイクロティーチング(模擬授業)の重要性を理解する。
- 比較する目を持つことの重要性を理解する。
-

POWERPOINT DESIGN 11

3. 比較する目を持つことの重要性を理解する

障害者に対する制度等の日本と米国の比較

	日本	米国
基本法	障害者基本法	ADA
福祉サービス	自治体によるサポート充実 ・障害者手帳発行 ・障害者総合支援法	民間団体によるサポート充実 ・個人で障害者申請できる ・自立支援活動活発
差別された時	まずは自治体に相談をする	法的には個人で訴えるのみ

米国が日本の好事例を取り入れていることもある!

POWERPOINT DESIGN 12

4. 比較の目を持つことの重要性を理解する

PFFP研修を受講する前は、米国の先進事例を学び、日本でも活用することが重要だと考えていた。

Before	After
<ul style="list-style-type: none"> 米国は日本よりも進歩しているイメージを持っていた 米国の事例を参考にするのが重要だと思っていた 	<ul style="list-style-type: none"> 米国での事例を参考することも重要 日本の好事例を発信していくことも重要

比較することは重要!

POWERPOINT DESIGN 13

PFFPで得られた5つの成果

- シラバスの書き方について理解する。
- 授業準備の重要性を理解する。
- マイクロティーチング(模擬授業)の重要性を理解する。
- 比較する目を持つことの重要性を理解する。
- 複数でリフレクションを行う重要性を理解する。

POWERPOINT DESIGN 14

5. 複数でリフレクションを行う重要性を理解する

PFFP研修を受講する前は、過去の研修資料などを見てリフレクションすることが重要だと考えていた。

Before	After
<ul style="list-style-type: none"> PFFP研修のキーポイントの一つとしてリフレクティブジャーナルがあると考えていた。 	<ul style="list-style-type: none"> 「一人で」のリフレクション、「対話で」のリフレクション、「集団で」のリフレクションを行うことが重要であると理解。

複数でリフレクションを行うことは重要!

POWERPOINT DESIGN 15

ありがとうございました!!

POWERPOINT DESIGN 16

東北大学 PFFP・NFP 成果報告会

東北大学サイクロトロン・ラジオアイソトープセンター
田中 香津生

大学のシステム

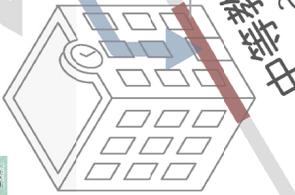


高大連携
QuarkNet
オープンキャンパス
中高を対象とした施設見学



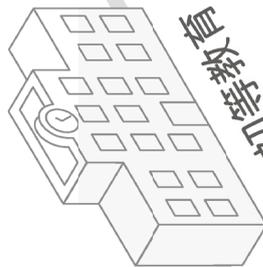
学での転換2

高等教育



中等教育

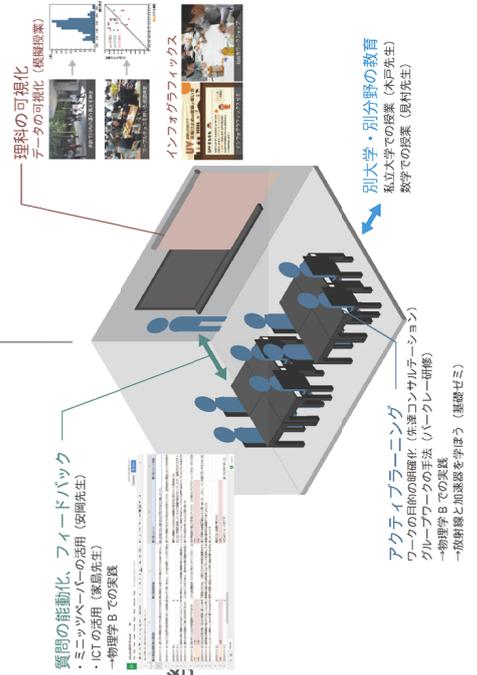
2012年～2014年
お家実験レポート
物理(高1～2)
科学と人間生活
課外研究活動、研究発表の啓発



初等教育

2008年～2012年
作文教室
天文教室

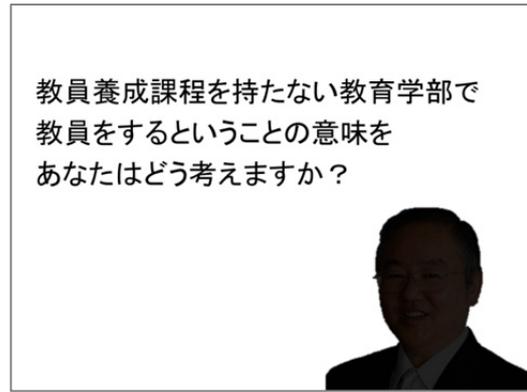
2016年～
放射線と加速器を学ぼう(基礎ゼミ)
可視化の時代(基礎ゼミ)
物理学B
インフォグラフィックスゼミ(自主ゼミ)





NFPプログラムを終えて

2017.3.23
吉田沙蘭



教員養成課程を持たない教育学部で
教員をすることの意味を
あなたはどのように考えますか？

グループワークを活用する	学生同士が学び合える場を作る	学生の将来展望と結びつける	優先順位を明確化する	目標と評価を一貫させる
インタラクションを活用する	見えてるものは人によって違う	互いの強みを認める・ほめる	手段としての選択肢を増やす	提供する情報に重み付けする
配布資料を活用する	異なる強みをもつ人と出会う	自分の常識は他人の非常識	評価・更新を継続する	学生の準備状態を知る
ISTUを活用する				学生に合わせて授業を変える
メディアを活用する	他者の視点を受け入れる	自分の強みを知る・活かす	目的から手段へ	既知知識を活性化
ループバックを活用する				全体像や現在地を示す
フィードバックを活用する	学生と双方向的に学び合う	結果ではなく過程としての一貫性を保つ	学んだものを受身的に取り入れれない	成功体験を積ませる
提出物を活用する				試行錯誤を繰り返す
グループ分けに配慮する	学生の目標から授業を見直す	自身の態度を振り返る	経験者から学ぶ	学生の自主性に甘えない
驚きを引き出す	主体性を導く質問を活用する	学生自身に問いかける	時間的展望をもって指導する	規模に関わらず授業は授業

グループワークを活用する	学生同士が学び合える場を作る	学生の将来展望と結びつける	優先順位を明確化する	目標と評価を一貫させる
インタラクションを活用する	見えてるものは人によって違う	互いの強みを認める・ほめる	手段としての選択肢を増やす	提供する情報に重み付けする
配布資料を活用する	異なる強みをもつ人と出会う	自分の常識は他人の非常識	評価・更新を継続する	学生の準備状態を知る
ISTUを活用する				学生に合わせて授業を変える
メディアを活用する	他者の視点を受け入れる	自分の強みを知る・活かす	目的から手段へ	既知知識を活性化
ループバックを活用する				全体像や現在地を示す
フィードバックを活用する	学生と双方向的に学び合う	結果ではなく過程としての一貫性を保つ	学んだものを受身的に取り入れれない	成功体験を積ませる
提出物を活用する				試行錯誤を繰り返す
グループ分けに配慮する	学生の目標から授業を見直す	自身の態度を振り返る	経験者から学ぶ	学生の自主性に甘えない
驚きを引き出す	主体性を導く質問を活用する	学生自身に問いかける	時間的展望をもって指導する	規模に関わらず授業は授業

グループワークを活用する	学生同士が学び合える場を作る	学生の将来展望と結びつける	優先順位を明確化する	目標と評価を一貫させる
インタラクションを活用する	見えてるものは人によって違う	互いの強みを認める・ほめる	手段としての選択肢を増やす	提供する情報に重み付けする
配布資料を活用する	異なる強みをもつ人と出会う	自分の常識は他人の非常識	評価・更新を継続する	学生の準備状態を知る
ISTUを活用する				学生に合わせて授業を変える
メディアを活用する	他者の視点を受け入れる	自分の強みを知る・活かす	目的から手段へ	既知知識を活性化
ループバックを活用する				全体像や現在地を示す
フィードバックを活用する	学生と双方向的に学び合う	結果ではなく過程としての一貫性を保つ	学んだものを受身的に取り入れれない	成功体験を積ませる
提出物を活用する				試行錯誤を繰り返す
グループ分けに配慮する	学生の目標から授業を見直す	自身の態度を振り返る	経験者から学ぶ	学生の自主性に甘えない
驚きを引き出す	主体性を導く質問を活用する	学生自身に問いかける	時間的展望をもって指導する	規模に関わらず授業は授業

自分で見つける



「自分で見つける」を支援する

- 明確な目的
- 適切な素材
- 継続的なフィードバック

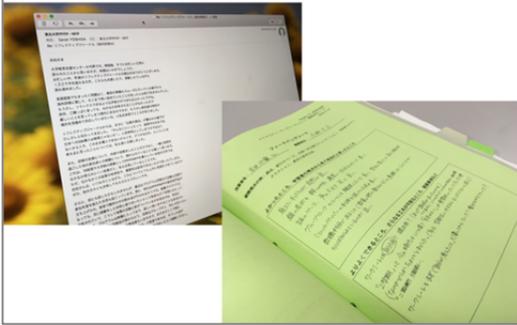


明確な目的



適切な素材

継続的なフィードバック



教員養成課程を持たない教育学部で
教員をするということの意味を
あなたはどのように考えますか？



2016 年度 東北大学 大学教員準備プログラム

Tohoku University Preparing Future Faculty Program



最終課題：あなたが考える学生にとって大学でのよい学習経験とはどのようなものだと考えますか。また、そういった学習経験を実現するために、大学や大学教員は何をするべきだと考えますか。

私は、体系的に大学教員としての指導方法を哲学を身に着けた上で、将来、学生教育及び指導に臨みたいと思ひ、この PFPNPFP プロگرامを受講しました。

まず、7月のオリエンテーションでは、今後ともに学ぶフルコースのメンバーとの初顔合わせとなりまりました。同じ物理学の方について心強く思うとともに、心理学や法学、社会問題の先生など、普段知り合うことが難しい様々な分野の方々との相違点や共通点など、興味深い話をすることができました。大きな相違点としては「学び方の違い」が印象的で、具体的な、物理学などの理系科目では割とかつちりとしたカリキュラムの元で積み上げ方式で学んでいくのに対して、心理学などの人文系では、学生はまずはいろいろなることを幅広く学んでいく方法がとられていました。一方、共通点としては「教員と学生との関係」があり、物理学、心理学ともに、学生と教員との関係が割とフラットな関係になっているということが分かりました。このような相違点と共通点を認識することで、自分の専門分野の物理学の学び方を相対化することができ、今後につながる新たな視点を得ることができました。

また、このような分野間の細かな情報は、実際にその分野に携わっている方と交流しないと分からないので大変有意義な初顔合わせでした。オリエンテーションでの羽田先生の講演で言われた「組織に雇用された総合的専門家」という、大学教員の定義は非常に印象深く、受講前まで漠然としていた大学教員という職業に対して、明確な職業観を得ることができました。

8月の串本先生の「授業デザインとシラバス作成」という講義では、シラバスの作成の仕事、及び成績評価の方法を実践的に学ぶことができました。「目標→成績評価方法→内容という順番で書き、目標には最低限の意図する学習成果を記述する」というシラバスの書き方を知ることができたのは大変有意義でした。とくに、受講前はシラバスの授業目標に対して「授業を完全に習得した状態の理想の学生が達成している目標」と認識していたが、それは間違いで、シラバスの授業目標とは「単位を取った水準の学生が最低限習得しておくべき授業目標」ということが分かり、非常に勉強になりました。ただし、教員の考える「最低限の目標」が、学生にとって「高度な目標」になる危険性もあるので、この調整は、授業の実践を通して身に付けていく必要があると思います。

成績評価においては、習得すべき知識や技能だけでなく、態度も評価対象として点数を配分するということを学びました。実際問題として、物理学の講義では、どうしても知識や技能に大きく偏った点数配分になってしまいがちですが、ゼミなどの学生の自主性が問われる授業では、学生のゼミに対する積極性などの態度も明確に評価する必要があると改めて思いました。また、レポートの評価に対して評価の客観性を担保するために、あらかじめ評価基準を明確にする「ルーブリック」という手法を学ぶことができたのは有意義でした。今後、「物理学概論」など文系向けの全額教育でレポート課題を出す機会もあり得る

ので、「ルーブリック」を作ることで、学生に対する公平な評価を心がけていこうと思ひます。

9月の邑本先生の「授業づくり：準備と運営」では、学生が授業を理解することに、既知知識を持つていること、及びそれを活性化することがいかに重要であるかを、具体例を通して学ぶことができました。たしかに、私も既知知識がある物理学の分野の本よりも、あまりない分野の本の方が難しく感じます。講義では、学生に単に授業内容を伝えるだけでなく、学生が既知知識をしっかりと保持し、それを授業時に活性化させるために手助けをすることが重要であると実感しました。また、授業外の予習復習等も、学生が既知知識を自身で活性化させるという明確な目的があるということが知られることができ、今後授業で宿題を課す上での重要な指針を得ることができました。また、学生が授業での新情報を既知情報に関連付けて、「発見」、「共感」、「自己関連付け」の3つの「そう」を体験することで授業内容の理解が深まることも学びました。ただし、学生がこの関連付けをしている間に、授業が進んでしまひ、学生が置いて行かれてしまひ状況になる危険性もあるので、授業スピードと、学生の理解する速度のバランスには気を配らなければならぬと感じました。また、具体と抽象の往復により「理解」をゆきぶり、3つの「そう」により、感情を揺さぶることで、学生の授業にたいする意欲を引き出す話も、私自身が学生時代に経験していたことなので、大変興味深く、非常に納得できる話でした。

10月の箱田先生の「本当のかしこさとは何か 感情知性と大学教育」では、知能因子である IQ 及び、情動的知性である EI を学ぶことができました。まず知能因子に関して驚きだったのが、様々な「頭の良さ」の奥底には、一般知能因子が存在する可能性があり、線分の知能別検査の処理速度によって測定可能であるということでした。知性とは何かというのは、かなり大きなテーマなので、今後どのように研究が進んでいくのか大変楽しみです。

また、情動的知性の EI テストに関しては、人物情報処理のない表情認知検査との間に有意な相関があることで、客観的に情動的知性を測定ができ得ることを知り、また、SEL によって、EI の向上もでき得ることを知り、非常に興味深く思ひました。ただし、感情面での成長は重要だが、学生の個性との兼ね合いも考慮する必要があるとも思ひました。

12月の出江先生、倉重先生の「院生指導法セミナー」では、コーチングに関して初めて具体的に学ぶことができました。大学院生は、学部生と異なり、主体的に研究を進め、独力で論文を書いたり発表をしたりする能力を身に付けられるようになる必要があります。そのためにも、ティーチングだけでなく、院生が主体的に目標を達成できるようにするためのコーチングが非常に重要であることを、学ぶことができました。とくに出江先生により教わった、問いを共有するという未来解決型のコーチング(問いかけ)は、院生が前向きに日々の課題に向き合う上で、大変有益な方法であると感じました。また、院生に対してしっかりととしたコーチングをするために、意識的に適切なコミュニケーションスキルを身に

着ける必要も実感しました。今後相継のレバートリーを増やすなどして、意識的に改善していきたいと思っています。また、倉重先生の「聴く技術」に関するワークショップでは、実践的な話を聴くことは予想以上に難しいことだと実感するとともに、有益な「聴く技術」を学ぶことができました。この経験を生かして今後意識的に院生の話を聴くように努めていきたいと思っています。

PPFP/NFP では、授業参観を通じて、先生方の具体的な授業方法及び授業に対する哲学を学ぶことができました。数学の見村先生の「まず授業で何を伝えたいかを1つか2つか決め、それを基に授業の幹となる流れを作り、そして肉付けをしていく」と具体的に授業方法を学べたことは非常に有意義でした。この方法は、今後授業だけでなく、研究会などに物事を分かりやすく伝える上での指針となりました。また、中間試験などにより、学生の理解度を教員が把握する重要性も学ぶことができました。早川先生の応用数学の授業では、グラフを見せることによりスターリングの公式の精度を学生に実感させたり、所ジョージのセリフ「だいたい良いから正確に教えてください」を引用して近似の極意を教えたりと、学生に興味を持たせる工夫をいくつも拝見することができました。また、演習の時間を、学生の集中力が途切れがちな授業の中ほどにとり、学生に90分間授業についてこさせるためのヒントを得ることができました。また、普段なかなか受講する機会が少くない文系の授業も参観できたことは、理系科目を相対的に見る上でも大変参考になりました。とくに、佐藤先生の授業では、難しい課題に対して、各グループそれぞれが興味深いアイデアを出し、それに対して佐藤先生からの的確なコメントとそれに対する学生の発言でさらに内容が深まっていくという見ごたえのある授業を見ることができ、このような授業形態は、理系のゼミなどでもぜひ取り入れていきたいと思っています。

私は大学での授業経験がないので、マイクロラーニング及び模擬授業を通じて、講義方法を実践形式で学ぶことができたのは大変良い経験となりました。とくに、私の講義を見たPPFP/NFPの仲間や先達の先生方からのアドバイスやコメントにより、黒板に字を書くスピードを上げること、字を大きく書くこと、話すときと書く時を分けること、だるま落としの練習をすることなど、具体的に改善点を学べたことは、今後講義を実際に行っていく上で、大変参考になりました。また、模擬授業のDVDで自分自身の授業風景を改めて見て直すことで、図の水平線をきちんと描かれていなかったことなどが判明し、今後注意すべき点として客観的に把握することができました。また、PPFP/NFPの方々による、パワーポイントやレジェムを用いて工夫された講義を聴けたことは、それ自身が大変面白かっただけでなく、板書中心に行った自身の授業をより客観的に把握する上で大変役に立ちました。

PPFP/NFPフルコースにより、専門家の先生方から具体的な教育方法を体系的に勉強し、マイクロラーニング及び模擬授業を通じて実践的な授業スキルを学べたことは、将来教員として学生に指導をするうえで大いに役立つとともに、大きな財産となりました。この講義で得た知識、スキルを礎にして、今後は講義の実践や学生指導によってさらに研鑽を積むことにより、教育の質の向上に努めていきたいと思っています。

最終課題レポート

自分の授業や学生指導を質のよいものにするために、何が課題だと思いますか。また、教員個人の立場から、自大学の教育はどうあるべきだと思いますか。

東北大学大学院教育学研究科博士課程後期3年の課程
林 慎吾

PPFPの研修を受講し、自身の授業の質を上げていくために、必要な課題は大きく3つあると考える。それは、「授業デザインとシラバス設計」、「授業づくりの準備と運営」、「マイクロラーニング（模擬授業）」であると考える。それぞれについて、具体的に記述する。まず、はじめの課題であるが、「授業デザインとシラバス設計」である。なぜ課題になるかというと、シラバスの書き方が統一されていないことが挙げられる。自大学においては、統一したシラバス設計を行うことが急務と考える。まず、授業やシラバスを構築する前に、ディプロマ・ポリシーを確認する必要がある。なぜかという点、シラバスを作成する上で、最も重要な点として、「知識の習得に偏らない目標を設定する」ことが挙げられるからである。東北大学の場合、ディプロマ・ポリシーは、①専門分野に関する知識及び学問全体への興味関心と幅広い知識に基づく複眼的視野を有している、②教養ある社会人としての素養を備え、専門分野特有の技能を生かして社会に貢献できる、③グローバル社会において、指導的・中核的役割を果たす自覚と展望を持ち、基礎能力を備えている、である。上記の3つのディプロマ・ポリシーを鑑み、授業の目標をシラバスに記述していくことが必要になる。

具体的には、学修成果の領域を、知識・理解、能力・技能、関心・態度、に分けて目標を記述していくことが求められる。私自身が、実際にシラバスを作成した際には、上記のディプロマ・ポリシーの③のとおりわけ、グローバル社会というところについては、到達目標に反映することが難しく、自身の授業を通して、学生がどのようなグローバル人材としての素養を身につけていくのか、というところを考えなければならぬと感じた。つまり、より質の高い授業を展開していくためには、シラバスがディプロマ・ポリシーを反映しているかをもう一度、振り返る必要がある。目標の妥当性を検証する必要があると考える。さらに、授業の到達目標については、授業修了時の最低基準、つまり、授業判定ではC(可)となるが、それが達成できないければ単位を与えることができない規準を考える必要がある。また、成績評価方法については、漠然とシラバスに記載するのではなく、また、漠然と考えるのではなく、学生へのフィードバックを考慮することや、評価の規準・基準 (rubric) を明示することが必要であると考える。具体的には、PPFPの研修時では、東北大学の串本先生に用意いただいたルーブリック作成ワークシートを使うことで、合理的に評価基準等を決定したが、このような基準を基に算定していく必要があると考える。また、ルーブリッ

クのワークシートから算出した評価だけを鵜呑みにするのではなく、あくまでも目安にし、実際に授業を行う際には、柔軟に対応していく必要もあると考える。私自身、シラバスの役割は、あくまでも、学生と教員の架け橋になるツールだと考える。そのため、シラバスは教員が何をするか、記載するだけでなく、学生の目線で、授業内容の確認ができ、学修計画の参考になることを記載する必要があると考える。

次に、「授業づくりの準備と運営」の課題についてである。授業づくりについては、教員が伝えたいメッセージを伝える方法を独自に考えることが多い。専門ごとに教え方などは異なってくると考えられるため、独自に伝える方法を考えることは、誤ったことではなく、当然に必要なだと考える。しかしながら、大学教員が、効果的に学生にメッセージを伝える方法が学ぶことは重要だと考える。私自身、PFPF の研修時に東北大学の邑本先生から「授業づくり：準備と運営」と題して講義いただいた際に、印象に残っていることがある。それは、「ほとんどの教員は、学生に自分の講義内容を効果的に伝えたいと考えているにも関わらず、なかなかうまく伝わらないのか。」という問いかけから講義が始まったことである。私自身も大学で講義を受ける中で、授業内容の難易度に関わらず、講義している先生が伝えたいメッセージを理解することができている場合と理解できない場合があり、それは何故かという疑問を持っており、そのため、邑本先生の講義は非常に興味深いものであった。学生にうまく伝わらない理由として、「情報発信の不備」「知識のギャップ」「主題や要点の明確化の不備」「言語だけでは不十分」ということが挙げられる。特に印象に残っているのは、「知識のギャップ」であり、教員と学生の知識レベルに差異がある場合には、言いたいことがうまく学生に伝わらないということである。具体的には、コミュニケーションにおいては、情報の送り手と受け手の間に知識ギャップがあると、メッセージはうまく伝わらず、誤解が生じたり、受け手が理解不能になったりするということである。つまり、授業というコミュニケーションの中では、教員側の知識レベルが高く、学生側は低い状態にあり、教員が自分の知識レベルで話をすると、同じレベルの知識をもたない学生が理解できないということである。質の高い授業を展開していくためには、学生の知識レベルに合わせてメッセージを送っていくかなければならず、そのためには、学生の知識レベルをしっかり把握する必要があると考える。さらにメッセージについても、簡潔なものでなければならず、1回の授業をまとまりのあるものにし、その中で、何を伝えたいのか、要するに何が言いたいのかを明確にすべきだと考える。さらに、言語は決して完全なコミュニケーションツールではないと邑本先生も講義していたことから、質の高い授業を行う際には、言葉では伝わらないもの、伝わりにくいものがある場合、視覚的な資料等を活用して学習者の理解を促進する必要があると考える。

また、学生の意欲を維持することも重要である。邑本先生からは、「理解と意欲の関係」、「短期的学習意欲と長期的学習意欲」の2つから説明いただいたが、邑本先生の授業こそ、意欲を維持させる授業展開をされていた。私自身、大学の授業は90分間であるため、その間、意欲を維持するというのは難しいと考えていた。しかしながら、邑本先生が絶妙な

タイミングで小道具や効果音を使われることで、90分間があっというまに感じられ、授業に惹きつけられるような感覚を感じた。PFPF の研修中に邑本先生にお話を聞いたところ、邑本先生は、教員になってから、試行錯誤しながら、身につけたと話していた。学生の学習意欲を維持させる授業をすることはもちろんであるが、邑本先生のように、学生がどうやったら、理解できるのかを常に考えている姿勢こそが、非常に重要であり、質の高い授業を展開していくためには必要不可欠だと考える。そのためには、下準備には時間がかかるといふことや経験が必要だということも頭の中に入れておく必要があると考える。

次に、「マイクロティーチング（模擬授業）」の課題である。マイクロティーチングとは、授業1回分(90分)の授業計画をたて、そのうちの10分程度を実際に行うことである。マイクロティーチングを終えた後は、他の参加者からのコメントを基に、自分の授業計画の振り返りを行う。私自身もPFPF の研修際にマイクロティーチングと20分程度の模擬授業を行った。私自身、大学の講義を実際に行うのは初めてで、大変緊張したことを覚えており、また、マイクロティーチング後は自身の講義をしている様子の録画を見て振り返ると、自分自身で録画を見て振り返るという経験は非常に重要だと考える。具体的には、自身の経験で大変恐縮であるが、先達の大学教員の方々から、「導入として東北大学の写真を用いている点が良い」「驚きを与える工夫もよい」「話し方がハキハキしていてよい」など、良いところを多く、挙げていただいたことは、自信を持つことができた。大学教員を採用する際には、模擬授業を実施するケースもあるため、今回のマイクロティーチングは非常に良い経験になったと考える。一方で、録画を見て思ったことは、緊張しているせいもあり、まず無駄な動きが少しあるなと感じ、そのため、自信がないように見えた。また、声の大きさについては、ほとんどは聞き取れるのですが、途中スピードが速くなるせいか、正確に話していることが伝わっていない部分があるなどの気づきがあった。録画を見て、自信の授業を客観的に評価することは重要だと考える。このようにマイクロティーチングでは、気づきが多く、専門を異なると他の先生方からアドバイスをいただくことは非常に良い機会である。しかしながら、このような機会はほとんどの場合無いのが、現実であり、課題と考える。同一の研究科であっても、先生同士がどのような授業を行っているのかは、分からないのが現状である。おそらく、他の先生の授業を参観できるとは、PFPF などの研修に参加しなければならぬが、難しいと考えられるが、今後の質の高い教育を実施していくためには、オープンな雰囲気づくりを実施していくことが重要だと考える。実際に、様々な研究科が連携して研究を行うことも増えている。高校などでは、アクティブラーニングが実践されている。大学においても、授業方法について転換する時期を迎えているのではないだろうか。時代の変化に応じて大学での授業方法も変わってくるのではないかと考える。東北大学では、他の大学に先行して、PFPF・NFP などの研修を行っている。今後も時代の変化に耐えうる人材育成(教員養成)を行っていくことが、大学が生き残っていくために、重要だと考える。

2017年3月17日
王偉

最終レポート

7か月も続くプログラムで学んだことや気が付いたことをまとめます。最初にこのプログラムに参加するのは、いつか自分が大学教壇に立つ日がくるかもしれないので、その日が来るまでしっかりとスキルやノウハウを見つけておきたいと思っていました。実際この日のセミナーに参加できなかつたが、事前説明会でもらった「大学教員の役割」という資料や映像をベースに、自分の目標を以下の図の左側のように設定しました。

	教育	その他
予想	① シラバス作成 ② 授業運営 ③ 教授法 ④ 採点・成績管理 ⑤ 院生指導 ⑥ 学生からの相談への対応	① ランニングセンター、図書館、コモンズなどの施設の活用 ② TA 制度 ③ 研究との両立 ④ 精神面のケア
実践でき た・見学 できた	① ② ③ ⑤	① ② ③
実践でき ない・見学 できない	④ ⑥	④

大学教員の六つの役割があるが、わたしにとって大事なものは教育と学生指導だと思い、「教育」と「学生指導」、この二つを学習目標に設定した。このプログラムが最後となる時点で、当時の予想した目標と達成した目標を上表のように提示している。

(一) セミナー

最初のセミナーは大学教員の役割に関するものだった。「大学教員の役割は何ですか」と自問自答した。自分の理解は浅かつた。レフレクティブ・ジャーナルでも書いたが、

わたしは「大学教員」という職業は「多様な仕事の価値を理解し活動する統合的専門職」といった定義に「専門職」に新鮮感を覚えた。「専門職」と定義した以上、なぜ大学教員は「大学運営」に関わらなければならないのか。これは、当時の私にとっても理解できないことだった。このプログラムを通じて、自分の理解での「大学運営」という仕事とその本義にずれがあることが今は分かった。「大学運営」というのは「管理」だけでなく、学生指導や教学支援もその内容だ。今はもはや大学教員に多様な能力が求められている時代だ。当時学んだことだが、初期キャリアの教員はスムーズにキャリア構築を完結するのに大体5年から8年までの時間がかかる。初期キャリアの教員は、職務の重点は「教育」、「研究」と「学生指導」に置くべきだ。

8月25日の「授業デザインとシラバス作成」に関するセミナーは初めてのシラバス作成のセミナーだった。「授業デザイン」の3要素」というセッションで「逆引き設計」、すなわち、「目標→成績評価方法→授業の内容」という方法論を学んだ。その後、「ワークシート作成」に入り、授業の目標という欄を見て結構迷っていた。自分の授業は文系なので、学修成果の領域に、「知識・理解」と「関心・態度」を書いたが、「能力・技能」を書けなかつた。なぜなら、文系の場合は、おそらく能力・技能を身につけるとの目標を実現したい。しかし、セミナーを終えて、わたしの考え方は正しくないと感じた。文系でも、文系なりの能力や技能が授業を通して身につける場合があるのではないかと考え直した。後のマイクロテイナーや模擬授業でその正しさを証明した。ほかに印象に残ったのは、「授業の目標」に「最低限の意図する学習成果」を記述すべきという新しい考え方だ。文系の場合は、教員の思い込みがやりやすいため、設定した目標と学生の学習能力に差があるかも知れない。大事なのは、教員が何をやるのではなく、学生がどうなるかだ。

9月14日の「授業づくり」で具体的な知識やスキルを学んだ。この日に学んだ最も印象に残った部分は「授業内容を伝えるために」という部分だ。伝わらない理由情報発信の不備、知識のギャップ、主題や要点が不明確、言葉だけでは不十分。以上の4点は、私の修士時代の担当した授業には全部あると痛感していた。特に第2点、教師と生徒の間の知識のギャップ、邑本先生の授業を受けるまでに、わたしは気がついていなかった。したがって、第3部分の「理解を支援する方法」で紹介された知識は、自分の不足を補うための必要なことだ。そこで習った新しい知識は「メンタルモデル」だ。必要があれば、実践してもいいという考えは大変意味深い。これからは自分の授業にも取り入れたいと思っていた。模擬授業の時、とりわけ第四点を実践した。具体的な例をプリントで配り、生徒を読ませたと同時に、要点や説明を板書し、生徒の授業内容への理解は深まったと思う。

10月14日のセミナーは「EQと大学教育の関連性」を中心に展開した授業だった。EQ教育という言葉は非常に抽象的で、「感情」、「人間関係」、「空気を読む」と連想されやすい。しかし、この講演ではじめてわかつたことは、EQあるいはEIを様々な手

段で具体化できることだ。ビネー・シモン検査、知能検査の方法があり、IT の測定で知能指数がわかってくる。このような科学的な方法は授業や生徒に対する指導にもこういう研究が活用できている。語学授業の場合、会話やグループワークが多数あるため、EI の測定が大活躍するに違いない。学生管理の場合も、EI に関する知識が活用できるかもしれない。

12月9日に、「コーチング技能を活用した院生指導」では院生指導の特徴やそれに関する留意点やスキルを学んだ。わたしはよく「コーチング」を「ティーチング」と間違える。コーチングは決して一方的な行為ではない。教育界のみならず、人間社会の様々な領域でのコミュニケーションは、上下関係を無視して平等に相手のことを思うことが大事だ。例えば、大学教員の場合、自分が教員の立場で常に教える姿勢で学生と会話を癖がある。そうすれば真のコミュニケーションは不可能だ。一度学生の視点から、自分の授業内容を見直す必要がある。学生の一見未熟な考え方を批判するのではなく、まずは褒めるのだ。その後、いい問題解決の方法や視点を提供すべきではないか。逆に言う、この情報が毎日更新する時代では、学生の方が、最新の情報にアンテナを張っているのかもしれないので、教員は自分の狭い視界で生徒の見解を判断するのはむしろ検討すべきだと思う。わたしの場合、勉強だけでなく、生活や価値観において、おそらく学生を教えたい癖がある。このセミナーを参加して、自分の教育側だが、「コーチング」の能力は足りないということが分かった。

(二) 授業参観

3回の学内授業参観で学んだことを述べる。参観した三つ授業の共通点は語学授業であることだ。参観する前に設定した目標は主に二つある。授業の進め方とグループワーク(会話練習)だ。違いは、英語の授業の場合、ランダムでグループ分けした。日本語の授業は少人数だし、インタビュ形式で行った。中国語の授業は、グループは事前に決まった。三つの授業のグループ分けはそれぞれ違った。その理由は、おそらく学生数が違うや教員の設定目標が違うためだと思う。個人としては、事前にグループ分けするのがいいと思う。その理由は、1学期の授業を行う以上、安定したメンバーで会話練習したのが展開しやすい。それに、メンバーが慣れてきたため、会話する際緊張感が消えることが期待できる。特に恥ずかしそうな一年生にとって、自主的に会話するのはもっとも大事なことだ。

この三つの授業を参観して、今までの自分の授業を比較しながら、理解を深めたことは文法と会話練習のパララクスだ。ほとんどの外国語の授業の目標は、会話とほかの運用能力アップだが、日本語は中国語から借用することが多いため、文法を間違える人が多い。なので、初級を経た中級の中国語の学習者にとっては、上達するようになるまで、文法の説明が大変重要だと思う。もちろん、最終目標はおそらく会話能力を身に付けることだろう。しかし、学習者は一定のレベルに達したら、何かの見えない壁がある。その

壁を破れなければ、上級の学習者になれないだろう。なので、今回の授業を通して分かったのは、会話を中心に授業を展開すべきことだ。ただし、学生のレベルに合わせて文法の授業時間を調整する必要がある。

国内他大学や海外の大学の授業参観で感じたのは、専門分野以外の領域の知識や新しい方法を探ることの大事さだ。例えば藤本先生の授業は、障害教育の分野の話だった。心理テストを20分程度で行い、7割もの具体例が挙げられた。また、家島先生の授業はアイパッドやアプリを使い、学生が楽しんでる姿は身近で感じた。学力低下といわれる今は、いかに学生の学習意欲を引き出すか、大学教員らが真剣に考えなければならぬ課題なので、そういう意味で家島先生はいいモデルになっている。大学教師というのは、ほかの分野の知識を吸収してはならない。若者の間に流行っているもの、新しい理論、自分の分野の現状、どちらかをとおろそかにしたら、学生が自分から遠ざかっていくに違いないと危機感を感じた。

(三) 実践授業

マイクロティーチングと模擬授業を経験した。改善した部分は授業内容や材料の選び方がうまくいった。あと、マイクロティーチングで「つまらない授業」を連発したが、模擬授業でこれを辞めた。やはり、教師たるものはポジティブに考えるのは大事だ。これは学生の学習意欲を損なわないため、授業がつまらないか面白いかが自分で判断してもよいが、口に出すべきではない。

よくできていない部分は主に二つがある。スライド作成と授業のペースだ。前者の例としては、スライドの字の大きさが一致しないところと枚数の多すぎるところがある。これを解決方法は、自分で何回もチェックすることだ。授業のペースは二回の授業とも早すぎる気がする。実際、フィードバックで何名の観察者から同じ意見があった。早すぎになる原因は二つある。一つ目は自分が焦っていることだ。二つ目は専門用語が多いので、自分にとって簡単だが生徒にとっては難しい。つまり、生徒に対する配慮が足りない。この点は大阪大学の家島先生に授業参観でもう一回振り返ると分かってきた。家島先生の授業は一見心理学な理論知識が多いようだが、クイズや豊富な事例を説明したので、一年生の学生にとっても大変理解しやすい授業だった。家島先生並みの授業がすぐできないうが、今度専門用語を提示するとき事例で説明するのを忘れないのが今のできるところだと思っっている。

(四) まとめ

この長いプログラムを通して、大学教員になるために何が必要かと自分にもう一回開いたところ、いくつかのキーワードが頭の中に浮かんで来た。「事前準備」、「工夫」、「情熱」、「態姿勢」、「自省」、「自己進化」となる。授業をする前に細かいところまで工夫して、情熱的に授業をしながら、学生の様子を見て授業の進度を調整する。様々な手段

を通じて学生の声を聴くとともに、自分の授業内容や方法を反省して、その結果、時代に
応じて自己進化を遂げる。教師たるものはプロ専門職だが、様々な能力が求められる
職業にもなると感じた。

2016 年度 東北大学 新任教員プログラム

Tohoku University New Faculty Program



最終課題：自分の授業や学生指導を質の良いものにするためには、何が課題だと思いますか。また、教員個人の立場から、所属大学の教育はどうあるべきだと思いますか。

最終課題レポート

自分の授業や学生指導を質の良いものにするために、何が課題か

私は主に初年次教育を中心とした教養授業に関心を持ち、今年度も意識的に授業実践を行いながらNFPプログラムのぞんできた。そのうえで具体的な授業に対する方案としてフィードバックのとおりかた、グループワークの実践について、理科をどのように見える形に落とし込むかについて焦点をあてて本プログラムで得た気づきを記す。

1. フィードバック (アンケート)
教育活動におけるフィードバックの重要性は今まで意識していなかったがNFPプログラムを通して認識できたものの1つである。中等教育現場においても授業評価アンケートは標準的になっているが、多くの場合が定量的な教員評価にとどまり、そこから有機的なフィードバックをかけられていることが少ない印象があったが、本プログラムで見学した授業等で意識して授業アンケートを工夫している複数の先生方とお会いすることができた。

例えば、国内他大学訪問調査において大阪大学の家島先生のキャリア教育の授業では、各生徒のスマートフォンとロイノートを活用してリアルタイムのフィードバックを意識している授業を展開されていた。特に印象的だったのは、授業後のコメントをロイノートをを用いて即時に回収して、その場及びその次のコマにおいて一部を紹介・回答する等を行い、length関数を用いて生徒のコメントを再評価したり、その評価についても生徒に明示することでできるだけ生徒からのフィードバックの質を上げる努力をされていたことである。

また立命館大学の安岡先生の授業評価に関するセミナーにおいても、先生が授業内で積極的に日頃の疑問をアンケート形式で募り、次のコマで丁寧にコメントしていくというスタイルも同じような思想を感じることができた。いずれにおいても私が担当している物理学Bでも実際に試してみたが、日頃の疑問に答えることで少しずつ学生からのフィードバックが具体的にになり、結果として私が自分の授業を見直す上で必要な回答も多く集まるようになった。このように今まで軽視していたアンケート形式によるフィードバックも、複数回の授業においては継続的な工夫を行うことでより高い価値のあるものにする事ができると感じることがわかった。また、先述コンサルテーションにおいても呂本先生がアンケートについて強く言及しており、ペテランの先生にとってもアンケートによるフィードバックが高い価値をもつということが改めて理解することができた。

2. グループワーク

できるだけ学生の理解を授業内で深めるための方法としてアクティブラーニングは中等教育・高等教育いずれにおいててもよく取り上げられるテーマである。例えば国内他大学訪問調査においても関西の様々な大学においてラーニングコミュニティを整備している様子は印象的であった。具体的な実践例としては海外他大学訪問調査でみることができたGSIによる少人数セッションのディベートや少人数グループにおける課題本の要約など国際的にも多様な実践方法をみることができた。

自身のクラスにおいてもこの要素を意識して、毎回15~30分程度のグループワークを導入し、実際に手を動かすことで学習する内容について手で感じられるような授業づくりを目指し、マイクロティーチングと模擬授業においてはそのブラッシュアップの機会も得られた。一方パークレーでは授業自体がパジャマなものでも大変能動的に質問をしている生徒が多いことは私にとって印象深いことであった。そこで、必ずしも授業に対する能動的な学生の参加は授業のスタイルに相関しないのではないかと考え、先述コンサルテーションにおいて

Todd 先生に相談した。

これらの背景には初等教育から継続した能動的な授業経験があるという私の仮説についてある程度賛同していただき、そのうえでやはり能動的な授業スタイルが大事であるとアドバイスをいただいた。さらに具体的な授業スタイルとして主にグループワークのHowto部分についてアドバイスをいただいた。Todd先生のアドバイスの主眼は教員の目標をどうやって正確に参加者に共有するかということで、具体的にはワーク前に目的をしっかりと説明すること、グループ内の役割分担やグループの作り方をできるだけクリアに決めること等が必要であるということだった。今まで50人を超えるクラスでは役割分担決め等のファシリテーションを短い時間で行うことが難しいのではないかと思いついてきたが、今後TAにも協力してもらうことで具体的な方策をイメージすることができた。

一方見村先生の常微分方程式の授業見学の際にいただいたコメントとして印象的だったのが、高校の行列と大卒における線形代数とのつながりについてである。高校において行列は、それが“使える”レベルまで教えることが難しいので単純な四則演算の訓練に止らざるを得なかったこと、大学受験においてウェイトが低いため多くの高校でそこまで扱わないことが難しいこと、一次変換について指導要領によっては複素平面で同等のことを扱うことが多いことから、中には必要ないのではないかという議論があった。ところが見村先生の意見は「大学できわめて新しい概念である線形代数を突然学ぶのはハードルが高いため、高校で計算方法だけでも履修することによってより自然に理解してもらおうメリットがある」というものであった。私は「高校での学習は、学生がなぜそれを学んでいるかを理解し、さらにはそれがどう世の中にならなっているかを理解することが目的になっているわけではない」という強い信念があった。これは「高校での理科と現実の科学をつなげる」という私の問題意識にも強く関係している。そのため、単純な計算技法に特化した授業にも意義があるという見村先生の意見は私の中に全くないもので大きく驚いた。この背景には高校で学ぶ多くの単元は大学以降により深く履修するとは限らないが、行列に限って言えば、ほぼ対象となる学生は大学で自動的線形代数を学ぶ(数Ⅰ履修者のほとんどが理工系)と考えられているという背景もあると思う。このように授業や分野やその後の学生のキャリア像によって教育目的は多様にわたり、その中で1つ1つの授業がもたらす必要がある役割も千差万別であるということ理解できた。

3. 理科にとっての可視化

できるだけ理解しやすい授業を行う上で、特に理科では学生がその内容に対して身近なものとして紐付けてイメージをつかむことができることが大事だと考えている。本プログラムを通してこの“イメージ”に相当する概念を様々な先生から伺うことができた。例えば、呂本先生による「授業づくり：準備と運営」のセミナーでは、認知心理学の観点から“メンタルモデルの構築”という言葉で説明いただいたのがこれに相当するものであると見えらる。また先述コンサルテーションにおいて澤谷先生が「力学が得意な学生は多いが電磁気のような目に見えないものについては苦手な学生が工学部でも多い」と指摘されていたのも同様のことを指すと考えることができ。物理教育でよく問題になることが、物理教員がしばしば「現象をイメージすればわかる、イメージしなさい」と学習者に方法論として「イメージ」を直接的に要求することである。これは今までサイエンスに興味を持っていたり、現象のイメージになじみのある一部の中高生にとってはそれほど難しく感じないことなのに対して、多くの学生にとってはイメージをするのに必要な素養がない。これが理科において得意な生徒と苦手意識を持つ生徒に大きく2分されてしまっている原因なのではないかと私は考えていた。

また、学習者がある分野においてイメージを可視化できるようにすることも重要な教育だと考えている。例え

ば、試験問題等をもとにイラストをかかせたり、それをもとにイラストの伝言ゲームを行うことで、メンタルモデル構築に慣れない学習者に対しても「視覚化」という技術を通して自ら理解できるように考えている。この観点から今年度後期から、サイエンスインフォグラフィックスのゼミや「可視化の時代」という全学授業にかかわらせていただくことになった。各分野において現象をどのように可視化しているかを紹介したり、インフォグラフィックスという観点からどのように現象を可視化するかについて実際に取り組むゼミ活動を行っている。2017年3月にはデザイナーやインフォグラフィックスの専門家を招聘し、数人の学生とサイクロ施設の研究の流れを可視化するというワークショップを開催した。このような取り組みから得られる手応えは大きく、来年度につながるような教育的な知見を深める機会を得ることができた。

教員個人の立場から、自大学の教育はどうであるべきか

本プログラムにおいて感じたことの1つは個々の授業や教育活動を行う上で、大学全体の教育システムの在り方が重要だということである。大学教員は教育から研究まで幅広い重心をもつ多様な構成であるため、大学全体として目的意識をもった教育を行うためには、明確な理念の提示と共有が必要になってくる。具体的に高大連携、TAの活用、全学教育について本プログラムを通して感じた大学全体として必要な意識を考えてきた。

1. 高大連携

私は「理科嫌い」という現象に問題意識をもち、中等教育の経験からその背景に中学の理科から高校の理科へ移行し変わるときの学びの転換時にトリガーがあると考えている。その原因は高校以前までは身近な自然現象に対して現象ベースのQ&A方式のような学びであるのに対して、高校以降はその背景にある法則や理論に着眼が置かれるため、その法則の意義や現実の世界とのつながりが感じられなくなり、目的意識をもてないことだと考えている。そこで高校と様々な社会との連携を持つことで、閉じられた高校の環境ではできない教育機会をつくることのできるのではないかと考え、高大連携に関心を持って活動している。

東北大学は特に高大連携に積極的に取り組んでおり、この1年を通して「科学者の卵」という高生校生の研究室での研究を体験してもらったプログラム等学内の活動を見聞きすることができた。一方、本テーマについて先達教員コンサルテーションにおいて澤谷先生から工学部における活動状況について伺うことができた。澤谷先生も何度かオムニバス形式の出張講義を行った経験があったが、例えば「エネルギー問題について」といったような非常に広いテーマのみを設定しているため、各々の先生がそのテーマ内で自分の興味関心に話がとどまり、そこから高校での学習とのつながりまでアプローチした例はほとんどないということだった。これはサイクロで行っている基礎ゼミにおいても同様の現象があり、物理・薬学・医学のそれぞれの分野の先生に「放射線」というテーマで各3時間ずつ話してもらっているが、各々がそれぞれ独立した研究の内容についてのみ紹介する。そのため、結局サイクロにおいてそれぞれの分野がどのように組み合わさっているかを伝えるという本来の目的ができていない。このように大学の教員は自分の研究内容について何どもブラッシュアップした講演内容もついているため、よほど具体的な広義の目的を設定しない限り、自ら講義全体のテーマを意識するということが難しいということが考えられる。以上から高大連携プログラムを構築する上で、目的をクリアにして各教員にどれだけそれを具体的に共有するかが大事であるということを再認識した。

例えば澤谷先生の専門は電波になるが、高校で学ぶ複素数は電磁波を考えるうえで重要な基礎的な単元だが、高校でその意義を学ぶ機会がないことに問題意識をもっており、複素数から専門的な電磁波までのつながりをクリアに結びリレー授業があるという面白くないか話されていた。このように高大連携を考える上で、各プログラムの目的を明確にすることとそれを共有することが重要だと考えられる。

これらの経験をもとに、今年からQuarkNetという国際的な教育フレームワークを用いたワークショップを国内の高校生を対象として行うことを計画している。本プログラムを用いて宇宙線検出器や素粒子実験解析の枠組みをつくり、高校生がより身近に素粒子物理に触れることができる機会を国内で提供したいと考えている。特に、これらの経験からたまた素粒子物理の面白さを単方向的に伝えるのではなく、できるだけ高校でのまなびと連結できるようなプログラムを作るよう意識的にすすめている。

2.TA・全学教育

本プログラムおよび、東北大学の全学教育にかかわることでのこの大学に対して感じた問題点の1つがTAの有効活用である。東北大学はTAの目的として「東北大学大学院に在学する優秀な学生等に対し、全学教育科目の教育補助業務を行わせ、大学教育の充実及び指導者としてのトレーニングの機会を提供することを目的とする。」とあり、授業終了後に担当教員やTAからの相当量のアンケートを実施してフィードバック機構を備えている。だが大学の授業はそれぞれ多様であり、それを行う担当者もまた多様な価値観をもつため、現状有効活用されていないケースも数多くあるように思われる。この点について海外他大学訪問調査においてGSIの活動と比較して考える機会は私にとって貴重な体験だった。

パークレーではGSIによる授業を2つ見学した。それぞれ課題となっていた読み物についてグループでキーワードを拾ったりしながらまとめて発表するものと、ディベート形式で授業に関連する内容について意見を交えるものであった。いずれの授業もGSIのアシリテーション能力の高さが授業の質を裏打ちしているように感じた。GSIプログラムは大学院生が授業を行うという東北大学教育にとっての原理的な難しさだけではなく、教員や大学院生のモチベーションやスキルの差も大きいと感じた。パークレーではGSIが経済的な動機もさることながら、アカデミックキャリアに進む上で十分価値のある教育経験であると捉えられている事が印象的だった。日本において仮に同様なプログラムを設置した場合、教育キャリアに対する重要性への認識やそのプログラム自体への信頼感などを担保するためには相当な時間を要するはずであり、このような地道な努力がGSIに学生が価値を見出すバックグラウンドにあると感じられた。このように東北大においても有効なTA活用を考える場合、教員と大学院生いずれにおいてもその目的の共有し、価値を見出すことができるように時間をかけて浸透させていく必要があると考えられる。例えば東北大学教育においてもTAに授業内の一部で講義をする機会を作ったり、具体的に受講者がコンサルテーションでできるような機会を作る等GSIプログラムをうまく昇華できる方法はあると感じられ、学内でこのようなロールモデルを少しずつ作成していくことで、少しずつTAに対する有効活用のモデルが形作ることができるとはいえないかと考えた。

この点は全学教育全体としても同様のことはいえる。GSIプログラムの一つの大きな特徴はそれぞれのGSI大学院生およびスタッフの密なコミュニケーションと連携であると感じられた。各々のGSIはそれぞれの実践例についてよく見聞しており、これらの知見が大きく影響しているように思われた。本学においてもNFPプログラムは学内の数々の授業見学機会を提供しており、ある意味ではこのような学内の授業実践に対する共有システムを担っている部分があると感じている。このような仕組みは学内の目的共有及び個々の授業の質向上に対して重要であり、私自身にとっても本プログラムで得た知見をもとに授業内実践およびその発信を積極的に行うことは、長期的に意味のある事であると感じることができた。

最終課題

自分の授業や学生指導を質の良いものにするためには何が課題だと思いますか。また、教員個人の立場から、自大学の教育はどうあるべきだと思いますか。

ローツ・マイア
2017/03/17 提出

まず、自分の授業や学生指導を質の良いものにするために何が課題であるか、及び、その対策としてどのような工夫をしているか、しようとしているかについて述べ、その次に、教員個人の立場から、東北大学の教育がどうあるべきかについて述べることにしたい。

1. 自分の授業や学生指導を質の良いものにするためには何が課題だと思いますか。

ア) 授業のデザインと実施の際の理念と工夫

授業の設計の段階から、検討をはじめたい。まず、当たり前のように毎年作っている、あるいは修正を加えているシラバスについてだが、授業の質を上げるために、既にシラバスの作成の段階で、意識し、注意しなければならぬことが多いと思う。各回の授業のおまかな内容や成績評価方法を記述するだけではなく、シラバスも学習のツールの一つになるように、様々な工夫が必要である。具体的には、各回の授業のテーマに関連する参考文献や基本的教科書のチャプターを明記することなどが考えられる。また、例えば、レポートの提出が求められる場合には、レポートの提出期限や具体的な課題等の、あらかじめシラバスにおいて明記することにより、学生によるより効果的な時間の管理とプランニングを促す効果もあり得る。

次に、授業の成績評価方法と授業の目標を関連付けるとともに、適切な成績評価方法を設定するのが、重要である。様々な考え方があり得るが、私の場合は、できる限り、試験のみ、あるいはレポートのみによる評価方法を選んでいる。それは、それぞれの学生の学習プロセスとメカニズムが多様であるからである。したがって、学生が授業で得た知識や能力(習った情報を分析する能力、自分の経験と関連付ける能力等)を、多面的に把握・評価するために、一つの授業で複数の評価方法を使っている。また、それらの方法が、割合的にも授業の「目標」に合っているかを再三確認する必要がある。

さらに、授業を設計・実施する際に、文部科学省の「学士力に関する主な内容」²や大学の diploma policy を確認し、できるだけそれに沿った授業を設計・提供するよう、心掛けている。自分の学問が大好きなため、学生に伝えたい情報が多いが、「知識」の提供のみを重視した授業にならないよう、気を付けていかねなければならぬと感じる。日本の高等教育

育(学部段階の教育)においては、「専門教育」とともに「教養教育」が重視されている³。つまり、「様々な角度から物事を見ることができると能力や、自主的・総合的に考え、的確に判断する能力」を養うことが、求められている⁴。また、東北大学の diploma policy⁵では、「グローバル社会において、指導的・中核的役割を果たす自覚と展望を持ち、基礎能力を備えている」卒業生像が描かれている。それらの能力を養うような授業の進め方を、授業の設計の段階から意識し、「知識」中心の授業運営、すなわち、教員による情報の提供と、学生がその情報を暗記したかどうかの確認で終わる試験による成績評価を避けていきたい。

先述の「教養」にも関連するが、近年高等教育における「アクティブ・ラーニング」をめぐる議論が盛り上がりつつある。学生の分析力等を養うためにも、学生に授業において「聞く以外の行為」をさせることは、確かに望ましい。(ただし、時にバッシングを受ける典型的な「講義」(教員が90分ほぼずつと話すような授業)も、やり方によっては、学生がその授業から多く得られる。教員が板書、スライド、絵、図、ビデオ等、多様な「道具」を利用することで、授業の質が上がり、学生の興味や学習意欲が向上し、より効果的な学習が行われることが十分あり得る。)

学生による積極的参加を促す方法・手段はいくつかあるが、その一つとして、いわゆる授業ペーパー(ミニッツ・ペーパー等とも言う)がある。全員が発言できそでない大人数の授業でも利用できる、また、人の前で話すのが得意ではない学生にも、自身の意見や疑問を述べる手段となる。授業ペーパーの作り方にも、様々な工夫があり得るが、授業で「気づいたこと」、「疑問に思ったこと」や「もっと知りたいこと」を、授業時間内に書き添えることにより、学生にその場で授業を振り返り、授業内容に関する理解を深める機会を与えることとなると感じ、今後の自分の授業で必ず取り入れたい。さらに、授業で「分からなかった」ことを書き添えることにより、教員が自分の授業の改善すべきところを発見することができ、今後の授業の改善にもつながるだろう。最後に、授業ペーパーに「穴埋め」や、学生が自由にノートをとれるスペースを空けておくことで、学生の「書く」という行為を促すことができ、学生に「ノートをとると」という労働の喜びを味わせることもできる

次に、授業の実施において、ピア・ラーニングが効果的な学習方法の一つであると思われる。学生がお互いに学び合えることは、実に多いはずであり、また、同じことを教員が言うのと、自分と同じ立場にある学生が言うのと、インパクトと吸収度がかなり違うと思われる。ピア・ラーニングにも、様々な形があるが、中にもピア・ワークを、今後の自身の授業でもっと利用したい。ただし、学生による授業での発言やピア・ワークをどのように評価するかが、一つの大きな課題であると思う。

イ) 学生指導について—ライティング指導の重要性

³ http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/attach/1309749.htm (last accessed 2017/03/16).

⁴ Ibid.

⁵ <http://www.tohoku.ac.jp/japanese/disclosure/disclosure/09/education/0901/policy06.pdf> (last accessed 2017/03/16).

学部生を指導する際にも、大学院生を指導する際にも、ライティング指導が一つの重点であると感じる。学部生にとっては、卒業論文を書く際に役立つだけでなく、社会人になってからも必要となる、情報を収集し分析する力や、自分の意見を論理的に述べる力等を身に付ける練習となる。しかし、日本の大学において、ライティング指導が十分に行われているとは言えない。私自身は、担当している学部授業において、学生にレポート等を書かせる際に、引用の仕方や論文の構成のみならず、参考文献の選出方法や、レポートや論文が完成するまでのスケジュール作り等についても、細やかに指導してきた。また、締め切りの直前に作業を始める学生が多いため（その結果、提出されたレポート/paperの質が低い）、提出締め切りの数週間前までに、research topic, research question 及び参考にしたいような文献をいくつかメールにて提出してもらい、それに対し第一フィードバックをする。さらに、これまでは、学生が希望すれば、締め切りの1週間前までに、first draft を読み、第2フィードバックをしてきた。しかし、ここでも、私からのフィードバックのみならず、ピア・ラーニングを導入するのが、効果的ではないかと考えている⁶。具体的に、学生にお互いにそのfirst draft を読ませ、フィードバックをさせるやり方が、フィードバックを受ける側にも、する側にも、勉強になると思う。同じようなことを、大学院生を対象に実施することも、大学院生のライティングスキルを向上させると思われる。

2. 教員個人の立場から、自大学の教育はどうあるべきだと思いますか。

ア) 教員に教育すべき

東北大学での教育（特に授業）の質を向上させるために、教員全員に、定期的に、継続的に研修を受けさせる体制が必要であると思う。日本の大学教員は、教えるための免許をとる義務がないようだが、大学の教員になった全員がいい授業ができる（及びその他の大学教員に求められる業務を執行できる）とは限らない⁷。海外では、大学の教員が定期的に講演やスキル・アップ研修を受けることが義務付けられている国/大学もあるようだ。日本でも、授業の質を確保するために、そのような制度が必要なのではないか。研修を受けることで、教育に関する最新の傾向、情報、研究成果を知るとともに、ワークショップなどにより、自身のこれまでの授業を振り返り、改善する機会も得られるであろう。

イ) TAに、レジュメのコピー以外も任せべき

東北大学のTAは、教員の授業用レジュメのコピーなどしか任せられない。しかし、より実質的な手伝い、時には（部分的にでも）授業そのものを、TAにさせることが、TAにとっても、その授業を受ける学部生にとっても、そして大学にとっても、メリットが多いは

ずである。将来的に大学教員を目指すTAにとっては、就職する前から、授業運営にかかわり、授業をする経験を身に付けることができるメリットがある（そのような経験があることが、就職活動をする場面でもプラスになり、又、実際に就職してからも、最初からより高いレベルの授業ができる可能性を高める）。学部生からみて、教員より年齢的にも距離が近いTAと信頼関係を築きやすく、近づきやすい。さらに、教員と大学にとつてのメリットであるが、TAが授業の一部を担当すれば、教員の負担が軽減され、研究活動により多くの時間を与えられる（私立大学と比べて、東北大学では、一人の教員が担当する授業のコマ数がまだ少ないようだが）。ここでは、例えばバークレー大学のGSI(graduate student instructor)制度が、参考になるだろう。

ウ) 大学の教育支援関連サービス提供の拡大

学生の授業での学びを支えるために、様々なサービスと支援があり得る。東北大学には、学生による学生に対する学習支援としてSLA(student learning adviser)の制度がある。そして、付属図書館のスタッフによる、レポートの作成のためのスキルを教える講座なども、例として挙げられる。大学での教育の質と学生の学習意欲を高め、大学を卒業してからも役立つ様々なスキルを身に付けるために、それらの試みが、非常に有意義である。が、現時点まで十分でないところもあり、そのようなサービスや支援の拡大が望ましい。特に、アカデミック・ライティング支援が、まだ不十分であると思う。今現在、SLAがライティング支援も行っているが、その周知度がまだまだ低いようである。私自身が授業で見ている学生レポートのレベルから言えば、ライティング支援・指導が行われていることをより周知させ、また、その規模を拡大させる（独立のライティング・センターの設立等）のが、急務であろう。

⁶ ここでは、バークレー大学の Graduate Student Instructor Teaching and Learning Center の Sabrina Soracco の大学院生向けライティング・セミナーが参考にされた。

⁷ 本プログラムのオリエンテーションの際に、羽田先生が、大学教員の「専門性」は「研究分野の専門性」だけではない、「教育と学習のプロセスの理解」なども、その専門性の不可欠な一部分であるとおっしゃった。しかし、このような意識が乏しい教員も大勢いる気がする。教員の意識の変化をもたらすためにも、定期的研修が必要なのではないか。

みて、そこに「学生に直接問う」というプロセスがあまり含まれていなかったことに気付いた。何か問題が生じた際、きつこということが起こっているのだろう、きつことこの学生はこういう得手不得手があるのだろう、と自分なりに想像し、それに合わせて対応を考えてきた。そのことにより、目立った問題は起こっていきなかつたように思われるものの、その見立てがどの程度学生自身に当てはまっていたのか、疑問が残る。また、問題が起こっていきなかつたかどうかということ自体、学生の立場からの評価はわからない。すべてのことを直接問うということはあまり現実的ではなく、またその必要もないかもしれない。しかし、自分の軸や価値基準で判断せずに、直接問いかけることを忘れないという姿勢は、今後常に意識していることが必要だと感じた。これはおそらく個別指導だけでなく、集団を相手にした授業にも当てはまることだろう。

そして最後に、他者の評価を受けることを回避しないということである。これが、自分自身にとつては最も大きな課題であると考えている。これは教員ということに限ったことではないのだが、他者の評価を受けること、他者の前で失敗すること、人と比べてうまくできないことに対して、以前からとても強い抵抗と嫌悪感がある。何をしても負け戦さはせず、特に自信がないときには極力他者からの評価を受けずに済むよう、回避するということを繰り返してきた。しかし、教員 1 年目の今年、同じ研究分野に所属する教員が合同で実施するゼミ等の場で、定期的にこの「他者の評価を受け、さらに比較される」という状況にさらされてきた。授業後に学生が教員同士を比較し、評価している様子を目にするのはかなり侵襲的でもあり、極力評価を耳にすることは避けるようにして過ごしてきた。そのような NFP でも、マイクロティーチングや模擬授業、パークレーでのディスカッション等、比較し評価を受けるという環境に何度も身を置くこととなった。NFP を通じて積んだこれらの経験は、授業場面とは対照的に、自分にとってむしろ肯定的な体験になっていた。その理由のひとつとして、自分自身に対する評価を、横目にはなくきちんと正面から受け取る環境があったということがあったように思う。フィードバックに際して安全な環境が整えられていたということもあるとは思わず、不意に評価を受けるのではなく、その評価と向き合う準備をして臨んだことで、今までは異なる受け止め方ができたように感じている。同時に、これまで比較対象であった相手とは、同じあるいはかなり近い軸で比較、評価されていたのに対し、今回評価の場を共有した同期が、一直線上の勝ち負けという概念を超えた、全く異なる背景や判断の基準を持っていったということも、重要だったように思う。そうした同期との比較を通して、一義的な良し悪しではない、個性という観点から、自分や他人を見る視点を、身につけることができたように思う。NFP では明らかに背景の異なる同期が集まったことでその視点が見出しやすくなっていったが、今後身を置く、同じ分野の中での比較であっても、おそらく同じことが言えるだろう。それは決して「これが自分のやり方だ」と開き直るということではなく、自分自身の得手不得手を理解し、それらをふまえた課題を明確にするという役割を担っていた。加えて、自分の実践を改善していくためには、内省だけでは不十分であるということの気付きにもつながった。内省の大切さはリフレクティブジャーナルを通して痛感するところではあったが、これはどちらかというと元来自分自身で得意とすることだった。しかし、内省だけでは結局、自分の視点からしか評価し振り返ることができない。上述の視点の違いにも通じることはあるが、他者の評価と自己評価がどれほど異なるか、ということを感じ、自分以外の視点での評価を受けることで、新

1. 自分の授業や学生指導を質の良いものにするための課題

教員 1 年目がようやく終わりにさしかかった現段階では、経験や知識が不足している部分も多く、具体的な課題をあげれば際限がない。そこでここでは多様な場面に共通する、自分自身の姿勢に関わる課題について、3 つの観点から述べる。

まず 1 点目は、集団としての学生を前にした際に学生の動機付けや学びを促す姿勢を怠らないということである。今年 1 年業務に当たってきて、顔の見える関係性の中で行っていく指導においては、敢えて強く意識せずとも学生の動機付けや学びを促すということを重視し、そこに注力していることに気付いた。これは、かつて非常勤講師として、100 名以上の学生を相手に講義をしていたときとは、異なる感覚だった。学生とよりアールな関係性の中で接すると、個々の学生の状況や反応に合わせて対応することは自分自身にとって必然であり、また、対応しがいも感じられていた。一方、顔と名前が一致しないような大人数の講義の場面では、同じようにそこに注力することが容易ではなかった記憶がある。学生側も必修だからという理由で受講しており、授業を聞いている学生は半分にも満たない状況だったが、「しよがない」と、自分の中でどこか最初から諦めていた部分があったように思う。東北大やパークレーでの授業参観は、こうした過去の自分の姿勢と照らし合わせ、非常に新鮮で驚きを生む経験だった。100 名近い受講生のいる講義であっても、先生方は学生の関心を高めたり、理解を深めたり、授業にコミットさせたりすることに對して、全く手を抜かれていなかった。加えて、講義の規模に関わらず、学生の反応や属性に、柔軟に授業の組み立てを変えていかれているということが、何よりも印象的だった。そして学生の側も、そのことによく反応しているように思えた。これは、大規模な講義に対する自分自身の考え方を大きく変えるものだった。大人数であっても少人数であっても、授業であることに違いはないのだが、どこか大人数の講義に對して、労力を節約するような価値観があったことを反省した。今後全学の講義を担当することになる際には、先生方のように学生ときちんと向き合う授業づくりをしていきたいと思った。

2 点目として、個々の学生に接する際に、学生の見ているものや感じていることを、学生側の視点から理解しようと努めるということがあげられる。今年度は初年度で担当する学生も少なく、比較的余裕があったため、個々の学生について自分なりに丁寧なアセスメントしながら関わってきたつもりだった。しかし、NFP のプログラムを受けながら、感想や気付きを同期とシェアし合う中で、同じ場で同じことを体験しても、人によって気付くことや感じること、見ているものが予想以上に異なるということを折に触れて感じてきた。似たような立場の同期同士、かつ参加者という同じ側に立っている場合であってもそうしたことが生じるのであれば、学生と教員という全く異なる立場で、教育する側とされる側という裏表の関係にある場合、その違いはさらに大きくなるだろう。教員と学生のギャップは、パークレーのフィールドワークにおいて教員と学生双方から話を聞く機会を得た際にも目当たりにした。教員との関係性がたえ良くても、遠慮や利害関係から、学生が教員に言えないことは少なくなく、それが、両者の認識のギャップを生じさせていた。この 1 年の自分の指導を振り返って

しい発想や解決策を見出すことができる可能性が広がることを感じることができた。おそらく今後、人前に立つことや、評価を受けることが得意になることはないだろう。しかし、NFPでの経験を通し、その重要性を再認識することができたことは、今までよりも、逃げずに踏みとどまる姿勢につながっているのではないかと感じている。

2. 教員個人の立場から、自大学の教育はどうあるべきか

レポート課題の1点目で述べたことを含め、NFPを通し、自分の中では目が覚めるような体験を何度もし、多くの新しいことを自分なりに発見したように思い、とても印象的に感じていた。しかし、プログラムが終盤に差し掛かり、ISTUの動画を見直した際、その、あたかも自力で発見したかのよう感じていた気付きの多くが、説明会等ですでに先生方やOBから話されていたことに驚きを禁じ得なかった。当時も、そのときの自分なりに、内容を理解し、納得し、話を聞いていたはずだった。それでもなお、自分自身で経験し、自分なりに見つけなおすことで、これほどまでに新鮮で、印象深い学びが得られるということが、NFP全体を通して得た一番大きな収穫だった。そしてこのことが、自分が目指したい教育の根幹を成すものなのではないかと感じている。

東北大学は、研究第一を理念として掲げる研究大学である。そのため就職前、東北大学の教員になるところは、研究者を育成することを使命として担うということだと考えていた。この時点で研究者の育成とは、研究そのもののスキルを高める、質の高い研究指導環境を整えるといったことを想定していた。しかし、実際に就職してみると、研究職を目指して博士に進学する学生は修士学生の2割にも満たなかった。この環境の前に、研究大学の教員としての役割を考え直さざるを得なかった。

その答えが見つからない中で、NFPを通して得たのが上述の気付きだった。この経験を経て、研究者の育成ということも、少し般化して捉えるようになったように思う。研究スキルのもっとも基礎的な部分を成すのは、自分で考える力、自分で見つける力だと考える。授業やゼミ活動、個別の指導等を通し、様々な、自分で考える、自分で見つけるという体験を重ねることができれば、今回NFPの中で自分自身が感じたような肯定的な感覚を学生に提供することができれば、多様な進路を選択する学生にも対応しながら、一部の学生にとって研究の面白さを見出すことにもつながるだろう。自力で気付かせるということは、一見放任のように見えて、実際には直接言葉で教えることよりもはるかに難しい。それはこのNFPを通して痛感したことだった。受講中には意識していなかったが、後から振り返ると、丁寧に作り込まれたプログラムによって、気付きを得られるように導かれていたことがわかる。学生に何を考えさせ、何を体験させるのか、そしてそれをやる目的は何かということも含めて、教員側が十分に考えることで初めて、学生が学生自身で学ぶ、気付く、そのための場を整え、サポートすることが可能になるのだろう。そして、そうした教育を受けるといって経験を学生に提供することは、広い意味での研究者育成、教育をも担える大学教員を育成するという、この大学の役割にもつながるのではないだろうか。それが現時点で、この大学の教員として、自分が目指したい教育だと感じている。

2016年度先達教員アンケート結果

2016年度先達教員アンケートでは、以下に示す5つのカテゴリからなる質問項目を設け、6名の先達教員からの回答を得た。

- I. 先達教員としての活動全般について
- II. 授業公開（授業を見る聞く学ぶ）とディスカッションについて
- III. 模擬授業におけるコメントのフィードバックについて
- IV. 先達コンサルテーションについて
- V. 2016年度PFPP/NFPについて

I. 先達教員としての活動全般について

	全く思わない	あまり思わない	ある程度思う	とても思う
1. 前年度と比較して、より参加者のプロフィールや状況について情報提供がなされたと感じるか？	0	0	3	2

2. 先達教員としての活動で困ったこと

- 特にありません
- とくにありません
- 困ったことはない
- 活動で困ったことは特にありません。日程が合うことが少なく、貢献できなかつたことを申し訳なく思います
- 前年度のことを知らないもので、前年度比較評価はできません。困ったことなどは、特にありません
- I think the demands on the teachers' time has decreased over the years, so I didn't have any problems with the way the program was run this year.

3. 先達教員としての活動のために、どのような支援があると良いか

- とくにありません
- 現在と同様で問題ありません
- 現状の経済的な支援だけで十分
- NFPで実際に授業を担当している教員には担当授業を実際に参観する企画を取り入れてもよいかと思います
- スタッフの皆さんとのコミュニケーションの機会（受講生の皆さんの経時的な様子や変化を報告してもらえる場など）→時々メールで頂いていたと思いますが、なんとなくメールだと実感が持てないので…
- I can't think of any additional support that I would need as a faculty mentor for the

participants. Everything was well-organized and well planned out. I have been doing this for a few years, so a new faculty member might have a different opinion.

4. 次年度のプログラムにおいて、先達教員の活動としてとりやめた方がいい、または、新たに取入れられると思うこと

- 特に無し
- インフオーマルな対話の場（スタッフの皆さん&先達&受講生）
- すでにかなり充実している企画と思います
- 今年の活動が最適のように思います
- I think all of the activities in 2016 were important for mentor faculty to be involved in. I wish I could have been more involved, actually, but due to other commitments, I could not participate in the orientation and the final ceremony. I can't think of other areas where the mentor faculty input would be needed though.

II. 授業公開（授業を見る聞く学ぶ）とディスカッションについて

1. 授業公開とディスカッションについて、改善すべき点、要望、提案等
 - 本年度は授業公開をする機会がありませんでした
 - 授業公開していませんので、コメントなし
 - 現状で問題はないと感じています
 - ディスカッションすべきテーマや項目が（ゆるくでもいいので）事前にあるとやりやすかつたかなと感じました
 - 授業の進捗や学生の状況等によっては、公開にしない方がいい場合もあるので、どの授業を公開にするか、実際にその授業が始まってから決められるとありがたいです
 - I believe classroom observation is a fantastic way for students to understand the classroom environment and the issues that need to be dealt on the spot. It might be helpful to have a short meeting before classroom observations so that the teacher can explain to the observers why they have organized the class the way they have.

III. 模擬授業におけるコメントのフィードバックについて

1. 模擬授業におけるコメントのフィードバックについて、改善すべき点、要望、提案等
 - 特にありません
 - 模擬授業は現状で17分でやや短いので、20分～25分程度にした方がよいと思う
 - 評価の項目が（緩いものでいいので）ある程度示されているとやりやすかつたかなと感じました。自由記述だけでなく、例えば、声の大きさ、話すスピード、資料・スライドの見やすさ、話の流れ、テーマのおもしろさ、アクティブ・ラーニングへの工夫等々について、5点ないし7点尺度でマルをつけるなど
 - コメントが手書きのため、それをもたらった参加者が読めない可能性があると思います。ノートPCなどを用意しておいて、コメントを入力するような方法も考えられると思います
 - The feedback system in place seems appropriate. Giving the speaker a chance to self-identify their own weakness is a good way to lead into the general comments.

IV. 先達コンサルテーションについて

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
1. 先達コンサルテーション時に配布した参加者のプロフィールを掲載した「カルテ」は役立ったか	0	0	3	1

2. 先達コンサルテーションについて、改善すべき点、要望、提案等についてお教えください。

- とくに思いありません。
- 特に無し。
- 参加できていないのでコメントありませぬ。
- 特にありません。なお、今年度は研究テーマと授業担当内容との兼ね合い、あるいは参加者のアカデミックマーケットへの就職懸念の話があり、各個人の状況に沿ったコンサルが必要とも感じました。
- I can't think of any. I think by expanding the time to 30 minutes but explaining that finishing early was fine was a good way to deal with the request from some participants for more time.

V. 2016 年度 PFFPNFP について

1. PFFPNFP のプログラム内容等について、良かった点、今後も継続すべき点をお教えください
- 基本的に充実した内容であったと思いますので、継続を希望します。
 - おおむね今年度の内容でよいのではないかと感じました。
 - プログラム内容のすべてを把握しているわけではないので適切にコメントできませんが、授業参観、模擬授業やコンサルテーション、リフレクティブジャーナルなどは、とても良いと思います。
 - 年々改善が行われており、大変充実したプログラムになっていると思います。授業参観で他大学の授業が見学できたのは、多様な大学・授業を見るという点で非常に良かったと思うので、今後も継続すべきだと思います。
 - 2010 年度の開始以来、このプログラムは改善・発展してきているが、さらに改善・発展が進むと PFFPNFP を実施する人達の手間も増加することが懸念される。
 - I think it is all good and useful and that it should be continued. There is a lot of value in giving the participants various perspectives of teaching and allowing them to try what they have learned through micro teaching. I am not sure if the participants are made aware of other workshops or seminars that aren't part of the NFP/PFFFP curriculum that they might be interested in attending. If not, that might be a good idea. However, I imagine the participants have time limits, too.

2. PFFPNFP のプログラム内容等について、改善すべき点、要望、提案等をお教えください。

- とくに思いありません。
- 「先達」の立場からは、実はもう少し色々関わりたいかっただけです。こちらのスケジュールが合わなかった部分もありますが、何かイベントがある当日だけの関わりだけでいいので、本当は準備段階や途中経過においても、もっとスタッフの皆さんと、苦労や課題なども共有できれば、もっと「一緒にやり終えた」感が持てたかもしれません。とはいえ、実際問題、(私個人ではなく先達教員の先生方全体として) どれくらいこのプログラムのための時間が割けるのは難しいところだとも思います。
- 特にありませんが、上述のとおり、NFP 参加者の担当授業参観もよいのではないかと思います。
- 講義 (特に全学対象のもの) を想定したプログラムが多いのですが、実際に自分が授業するときには演習の方なので、いわゆる「ゼミ」をどのように作っていくかや、卒論指導を想定したプログラムがあるとおよしいかと思えます。学問分野によって異なりすぎて難しい側面もあるかと思えますが、文系/理系で分けてほかの受講生と意見交換するなどでも役立つ側面はあるかと思えます。
- ショートコースの設置が理由なのかも知れないが、フルコースへの参加者が減少傾向にあると思う。プログラムの充実と受講生の負担は Trade off の関係にあると思うので、多くの人に参加してもらえぬ妥協点を探る必要があるかも。(名案はありません)
- I don't think I can answer this well since most of the contents are in Japanese and my Japanese is limited, at best.

3. PFFPNFP のプログラム内容等について、上記以外にご意見、ご感想等があればご自由にお書きください。

- 特にありません。
- 「先達」をさせていただきましたが、その中でもベテランの先生方から、私のように若輩者までいるので、なんとなく「先達」という肩書が重かったです(苦笑)。若輩者である私としては、受講生の皆さんとそれほど立場が変わらなくもあり。受講生の皆さんも先達教員も一緒に、「大学の授業とはどうあるべきか」、「どんな授業の可能性があるのか」などについて、コーヒードミナながらワイワイ楽しくブレーストできるようなワークショップがあってもいいかなと思います。
- 今年度は、フルコースの参加者を十分に把握できた気がします。個性的だったこともありましたが、人数がちょうどよかったのかもしれない。ショートコースは、人数も多かったこともあり、やはり参加者を覚えきれませんでした。たくさんの方に、何らかの形で参加してもらったことが大事だと思えますので、それはそれでよいのかもしれない。
- 大学全体の教員数を考えると理系の方が多いのですが、受講生は文系に比べて理系が少ないのが気になる。理系の部局への宣伝が必要かも。
- I think the mentor consultations are an important aspect for the students, which can be seen from their request to expand the time for these interviews. If some of the faculty don't see the value maybe other faculty could join in their place.

2016 年度 JFP ショートコースアンケート結果

2016 年度 JFP ショートコースアンケートでは、以下に示す5つのカテゴリからなる質問項目を設け、参加者からの回答を得た。回答者は 21 名であった。

- I. 各種セミナーについて
- II. リフレクティブジャーナルについて
- III. 動画配信の利用について
- IV. プログラム参加における情報提供について
- V. ショートコースを選択した理由について
- VI. プログラムの運営について
- VII. プログラム受講の効果について

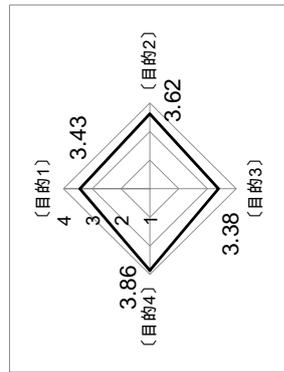
I. 各種セミナーについて

1. 以下に示す達成目標に対して、それぞれのセミナーはどの程度有益であったかについて 4 件法 (1. 全く有益ではなかった～4. とても有益だった) で評価を求めた。

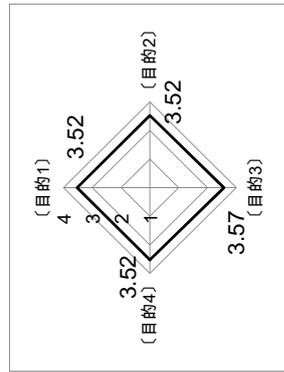
<p>【JFP の達成目標】</p> <p>【目的 1】生涯にわたり専門性を高めるために、効果的な省察ができるようになる</p> <p>【目的 2】大学教員の役割、仕事を理解し、展望を持ってキャリアを設計できる</p> <p>【目的 3】教育活動に関する基礎的知識を身につけ、自分なりの言葉で教育観を語るようになる</p> <p>【目的 4】異分野の研究や教育文化を知る</p>

以下に各種セミナーに対する参加者からの評価結果を示す。図中の数値は全体の平均値である。

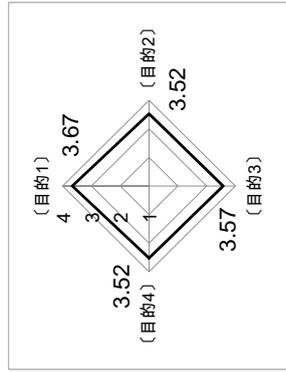
(A) オリエンテーション
「大学教員の役割…」 「比較の目を育てる」



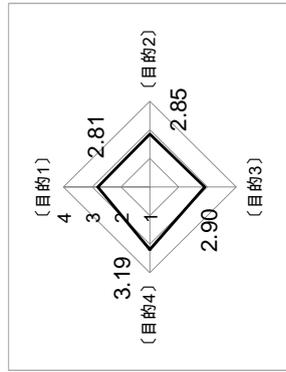
(B) 「授業デザインとシラバス作成」



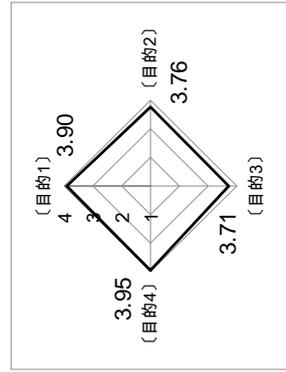
C) 「授業づくり：準備と運営」



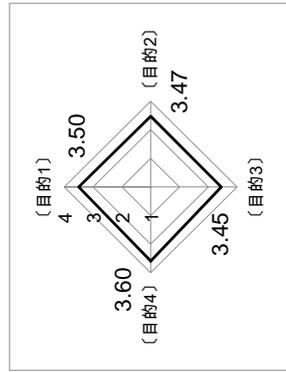
D) 「『本当のかしこさ』とは何か」



E) 「授業を見る聞く学ぶ」 授業参観



F) 全平均



2. 各セッションへの意見、要望、提案は以下の通りである。

- ショートコースにおいても、先達教員との個別面談の時間が設けられると良かった。
- 「理解」のプロセスやシラバスの書き方など自分が知らなかったことが多く大変なめになりました。また自分とは異なる専門の先生方の授業を拝聴できたのは大変良い機会になりました。
- 色んな分野先生方のお話を聞いたり、他の先生方のお話する機会が普段あまりないので、今回のプログラムは非常に自分自身にとって良い機会だった。この機会をいかに自分の現状や今後につなげていくかは、自分次第であるとも改めて思った。
- 他分野の教育・指導の実情が学べたことはとても貴重な体験でした。また、各セミナーも講師と参加者との間で意見交換や質疑等が積極的に進行することができている環境であったことも大変有意義でした。授業参観の内容や質ともに非常に充実しており、授業評価が高いこともあり、どの先生も分かりやすく大変工夫した授業であったことが印象的でした。セミナーについて、内容のベースが文系であったこともあり専門用語や授業の構成などで一部ついていけないことがあった。セミナー前に内容の把握ができるような資料や当日でも良いので専門用語リストなどがあると授業の際にありがたいと感じた。また、セミナーが固定であったので上記のように難しい内容もあり、可能であれば選択制であると自分に特に必要な内容が受講出来て良いように思う。
- 2016 年 12 月 9 日の「コーチング技能を活用した院生指導」で講師の方との相性が悪いせいか、

2. プログラム全体を通して、自分のリフレクションが深まるきっかけになった出来事について。
 - ▶ リフレクションを書くごとに、振り返るといふ行為に慣れてきたような気がします。また、こんな振り返りでいいのだろうか・・・と、リフレクションに対して少し不安もあったのですが、コメントをいただくことで、安心できモチベーションも上がってきたように思います。
 - ▶ リフレクションについてビデオ講習を観てその重要性を分かった。その後の講演なども意識しながら参加できた。
 - ▶ 授業見学をさせてもらったあと、これまでの経験と照らし合わせてリフレクティブジャーナルを書いたことで、これまで自分が選択してきた方法とは違う取り組みの良さに気がついたこと、機会があれば取り入れてみたい、と思ったこと。これがきっかけで、これまで以上にその時のプログラムで考えた事と、これまでの振り返りを関連付けて考えるようになった。
 - ▶ 初回以外はリフレクションを書くことを前提としてセミナーを受けたため、授業内容についてどのようにとまどめるかを現在進行形で受講しながら検討できたことは思考を深める良いきっかけになった。また、その時に分からなかった点や解決方法など新たな視点に気づくことができた。再考すると当日気が付かなかった点や解決方法など新たな視点に気づくことができた。
 - ▶ セミナーの中で教育心理学に関する参考図書を紹介があり、興味を持ったのであとで図書館で本を借りて読みました。セミナーの内容の理解が深まったことはもちろん、もっと詳しく知りたいという学習意欲が高まりました。先達の先生方が若手の頃に読んで参考になった図書や資料など、差し支えない範囲でぜひ教えていただきたいと思いました。
 - ▶ リフレクティブジャーナルの課題があることによって、セミナーや授業参観以外にも、教育に関する諸問題に関心を持ち、関連付けて考える習慣がついたと思います。
 - ▶ 学生のグループ・ディスカッションに参加させていただいたことが最も印象に残っています。学生のモチベーションと学習の効果を感じ、ネガティブな方向で垣間見ることができました。
- ▶ まず、初めのリフレクティブ・ジャーナルガイドやISTUの動画を通じてのリフレクションに関する講義が、自分がどうすればよいかを導く重要な役割を果たしてくれたと思う。動画の一方通行の講義でも、興味をもって聞くことができ、学ぶことができた。さらに、毎回、ジャーナルを提出すると、担当の先生方がコメントを返してくださった。自信がない文章や否定的な文章についても、価値つけて返信して下さることで、そういう見方もあるのかと思うことができた。
- ▶ これまで考えもしなかった考え方に接したときには深まったと思います。また、講師の先生が紹介したものとに対して、敢えて批判的に考察することも考えを深めることにつながったかもかもしれません。
- ▶ 異分野授業参観で改めて講義のデザイン、授業の手法について考えさせることができました。

3. リフレクティブジャーナルについての意見、要望、提案は以下の通りである。
 - ▶ コメントをする方の苦勞を思うと泣けてくる。
 - ▶ 毎回、コメントを頂いたことは大変有難かった。欲を言えば、リフレクションの実践を個別のものとしてだけで終えるのではなく、他の受講生やスタッフの方々ともさらに共有し、深

- 質疑応答の際の対応が不快に思った。気を付けてほしい。
- ▶ 教育に関する制度や理論など、学生の中には知ることができなかつた知識が得られて有益でした。また、授業参観では、自分が学生であった時との変化（IT機器の普及など）への対応とそれらの活用などを見せただけは、よい授業には、専門外の学生も非常に熱心に取り組んでいるのを目の当たりにし、そのようにできる工夫など、考えさせられました。
 - ▶ ショートコースではありましたが、どのセミナーも大変参考になりました。特に授業参観と、担当の先生に直接お話を伺う機会が得られたことは、その後の授業の設計に大きく影響し、以前より少しは効果的に内容を伝えることができたのではないかと思います。
 - ▶ 各種セミナーは、「本当のかしこさとは何か」以外、参考になるものばかりだった。逆に、「本当のかしこさとは何か」も反面教師という意味では参考になったとも言える。また、ショートプログラムにおいては、必修でないセミナーも案内していただいたのはありがたかったが、必修でないというだけでも敬遠しがちになるので、11月、12月にも1回ずつくらい、必修セミナーを入れてもらいたいと思った。
 - ▶ 今回のコースに参加させていただき、非常に良い勉強になりました。改めてコース運営の皆様へ感謝の意を申し上げます。
 - ▶ 一度だけ、ちんぷんかんぷんな講習がありました。しかし、有益とは思えない講習が一度しかなかったというのは、このプログラムの質の高さを示していると思います。今後、同僚等に勧めます。ありがとうございます。

II. リフレクティブ・ジャーナルについて

1. リフレクティブジャーナルの執筆についての感想について4件法（1. 全くそう思わない〜4. とてもそう思う）で評価を求めた。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1) ジャーナルの執筆方法について十分な説明・支援を受けた	0	1	10	10
(2) ジャーナルの執筆が学習内容の整理・記録に役立った	0	0	4	17
(3) ジャーナルの執筆は自身の思考を深めるのに役立った	0	1	4	16
(4) ジャーナルの執筆により新たな気づきを得られた	0	1	8	12
(5) ジャーナルの執筆は達成目標への到達に対して有益だった	0	0	8	13
(6) ジャーナルに何を書いたらよいかのかわからないことがあった	3	13	4	1
(7) ジャーナルの提出締め切りは適切だった	0	1	11	9
(8) ジャーナルの執筆に取り組むことでリフレクションのやり方が身についた	0	1	12	8
(9) ジャーナルの執筆はこのプログラムに必要なと思った	0	0	5	16

められると良かった。

- ▶ 一回目の講義の時からリフレクションに関するビデオを観ておきたかった。観ていたらもっと違った姿勢で臨めたと思う。
- ▶ ただ参加するだけでは忘れてしまうことも多くありそうだが、リフレクティブジャーナルを書くことで、これまでの自分の経験と関連付けて考えることができたと思う。どんなことを考え、どうしようと思ったのかについてもいい記録になったと思う。毎回コメントを頂いていたので、しっかり書かないと！と思っていた。
- ▶ 期日について、もう少し締め切りまでの日時が長いと大変助かる。3日は少し短く感じた。また、リフレクション・ジャーナルを書かなくても、気になる内容や未解決の問題などは熟考すると思うので、解決方法や新たな視点などはジャーナル作成で気づかされたこともあるが、そこまで劇的に思考が深まる方法でもないように思う。
- ▶ ジャーナルを提出すると担当の方が毎回丁寧なコメントをくださるのが、単に事務的に受け取るのではなくあくあたたかみがあって、とても嬉しかった。ありがとうございました。
- ▶ 最初に冊子やISTUを通じて、目的や書き方をわかりやすく説明していただき、助けになりました。
- ▶ 場合によってはあまり書くことが思いつかない時もありましたが、無理にでもアウトプットすることによって身に付くこともあるので効果があるのではないかと思います。他の方がどう受け取られたのかを知る機会があるとより効果があるように思います。
- ▶ 後半の「授業を見る聞く学ぶ」のジャーナルは、私は締切を守ることができなかった。見たこと聞いたことという事実と、自分が感じたこと、学んだことをどう整理すればよいかが分からなかったからではないかと思う。しかし、3営業日内に提出という期限は、適切だと思う。
- ▶ 日常生活の中であることをきっかけにして「あの先生がおっしゃったことに関して、こうやってこうやってこうやればもっと良くなるんじゃないのかなあ。」などということをもふと思いつくことがあると思います。そういうときには何らかの形でそれを記録しておくとか後々役に立つように思います。
- ▶ 三日以内でリフレクションを書くことが良いと思います。

III. 動画配信の利用について

動画配信の利用について評価を求め、参加者から以下の回答を得た。

1. プログラム期間中を通して、ISTUを利用したか

1. 利用した	19
2. 利用しなかった	2

2. 動画配信について評価を求め、参加者から以下の回答を得た。

	未使用	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1) ISTUの利用方法について十分な説明・支援を受けた	0	0	1	12	8
(2) ISTUによる動画配信は学習の役に立った	1	0	2	10	8

3. ISTUの利用についての意見、要望、提案は以下の通りである。

- ▶ 実際には使いませんが、ある種の保険として、安心できます。
- ▶ 参加できなかった講演を観た。その際に、講演者がパワーポイント観ながら話している様子の時にレーザーポインターを使用していたが、ビデオではそれが分からなかったため、文字情報が多いスライドの時にどの部分を読んでいるのかを理解するのが大変だった
- ▶ 初回の事前説明の動画を見た。どうしても研修に参加できないときなどに役にたつと思う。
- ▶ ISTUのシステムは大変便利であり、特に10-20分間隔で区切られて見れるので集中でき、かつ時間があるときに途中まで見ることができ大変助かった。その一方で、PPTのスライドと内容が連動していない箇所もいくつかあったので、そのあたりを改善するとより理解しやすいと思う。
- ▶ 録音なので仕方がないとは思いますが、音声が聴き取りにくい場面が所々ありました。
- ▶ まとまった時間が取れない場合には集中して取り組むことが難しいと思いましたが、わからないところは何度も繰り返し視聴することができると役に立ちました。実際にセミナーに参加してもその時にはよくわからない点があって、あとからもう一度確認したいところがあった際にも、ISTUを利用することで理解が深まりました。
- ▶ あまり見る機会がなく、折角の仕組みなのにもったいなかった。担当の先生方にはご面倒をおかけすることになるが、セミナーの数は限られているので、動画がアップされる度にアナウンスをしていただければ、もう少し視聴したかもしれない。
- ▶ 今後でも利用したいと思います。

IV. プログラム参加における情報提供について

1. オリエンテーション時に配布した「先輩の知恵」について評価を求め、参加者から以下の回答を得た。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1) 「先輩の知恵」を読んだ	0	4	15	2
(2) 「先輩の知恵」の内容が研修の参加に役立った	0	4	14	3

2. 「先輩の知恵」についての意見、要望、提案は以下の通りである。

- ▶ リフレクションの際に、大変役立った。
- ▶ 先行研究例として参照することができ、役に立った。
- ▶ これまで受講されてきた方の意見を早い段階で知ることができたので、プログラム内容に期待して参加することができた。
- ▶ 「先輩の知恵」によって、どのような心構えでPFPP全体を受ければよいかを知ることができた。また、「先輩の知恵」は、先輩の「後悔」？でもあるので、それをあらかじめ知ることができたのはよかった。もつと言うと、初回に渡されるのではなく、初回が始まるよりも前に読ませてもらえたとよかったかもしれない。
- ▶ 改めて読み返してみても「？？」となった箇所がいくつかありました。「授業を見る聞く学ぶ」に関する回答の中に「参加の前日までに授業に関する資料やシラバスをメールで参加者にお送りしています。」という記述がありましたが、実際にはシラバスをいただいたのは授業の直前。事実と異なることが書いてあるのはいただけませんね。私の場合には、自主的に大学のWebサイトでシラバスを参照してから授業参観に臨んでいたので可能であればシラバス参考図書を読んだりその日の授業は何をやるのかということも事前に知ったりすることができました。もういい大人である以上はそういうことは言われずともやるのが当たり前かもしれませんが、事実と異なることが記載されていることは良くないことだと思います。

V. ショートコースを選択した理由について

1. ショートコースを選択した理由について、参加者から以下の回答を得た。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1) フルコースだと負担が大きかったから	1	2	11	7
(2) フルコースに参加する時間がとれないと思ったから	0	3	4	14
(3) まずショートコースで内容を試してみたかったから	2	4	10	5
(4) ショートコースの方が気軽に参加できるから	0	1	9	11
(5) 指導教員、所属長からの推薦状を取得するのが難しかったから	5	5	10	1
(6) 書類選考や面接による審査を避けたかったから	4	5	10	1
(7) 自分にはショートコースの内容で十分だと思ったから	4	8	8	1
(8) フルコースに参加するには日常の業務が忙しすぎるから	3	12	6	0
(9) (ショートコースを受けてみて) 今からでもフルコースに参加してみたい	2	6	10	1
(10) (ショートコースを受けてみて) ショートコースの内容で十分だと思う	1	7	12	1

2. ショートコースを選択した上記以外の理由

- ▶ 着任1年から2年目の教員こそ特にフルコースが必要に思うが、新天地での研究や授業の準備が大変であり、さらに新任のためそこに時間を使うことや部局との兼ね合いなどから中々受講しづらい現状である。また、任期付きの立場であるが、周囲から「受講しても採用には意味がない。研究した方がよい」との意見も言われ（私は全くそうは思わないが）、少なくとも私の週は堂々と受講することをよしとする環境では無かった。
- ▶ NFP・PFPPについて知ってから応募までの期間が短かったため、フルコースの内容や実現可能性を十分に検討する時間がなかったためショートコースを選択した。また、フルコースは海外での学びがあるが、その期間の業務ができないことが、フルコースを選びにくい大きな要因であると思う。
- ▶ 私は要領の良い人間ではないので、初めて体験することは内容をうまくこなせなかったり理解できなかったりします。ですから、このプログラムはこういうことをやるんだということやショートコースを体験することによってある程度知った上で、フルコースを受講するのであれば受講するというようなやり方が自分には合っているのだろうと思ったわけです。また、英語がまったくダメなので海外研修を行うことはかなり難しいと思ったことも理由のひとつです。

VI. プログラムの運営について

1. プログラムの運営について評価を求め、参加者から以下の回答を得た。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1) JFPの広報、募集の時期は適切だった	0	0	12	9
(2) JFPにおけるセミナーの回数は適切だった	0	1	15	5

2. プログラム提供期間について評価を求め、参加者から以下の回答を得た。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1)JFPの提供期間は適切だった	0	1	12	8

- 該当者ではないが、個人的な都合（出張等）では7, 8, 9, 10月あたりに集中して講演等のセミナーがある都合がつきやすいです。
- ちょうど授業参観の参加期間が推薦入試や一般入試の準備期間と重なり、日程の調整がとて難しかったため。希望調査をもう少し早めに行うか、もし可能であれば希望調査を行った結果、決定した参観可能な授業を参加者全体にもう一度お知らせしていただけると、急な変更があった際に再度予定を組み易いのではないかと感じました。
- 前半の自由記述欄にも書いたが、ショートコースにおいても、11月、12月とセミナーを設けてほしかった。例えば、いくつかの授業見学をした後での、理想の大学教員像の明確化とそのための自身の自身の行動計画の立案など、まとめの機会があるとよいと思った。

3. プログラムの広報方法についての意見、要望、提案について自由記述で回答を求めた。
 - 所属部局からの転送メールで知った。直接知っていたとしても参加したかどうかは怪しい。所属部局からのメールであったことと、知り合いに説明会に参加してもらったことなどが参加するきっかけになった。修了生が口コミで広げていくのもありだと思う。
 - 特になし。
 - 東北大学の学生向けとしては、入学式のオリエンテーションでプログラムの紹介があってもいいかもしれない。

4. プログラム全体についての意見、要望、提案について自由記述で回答を求めた。
 - 教授の方々にもぜひ参加してほしいプログラムであった。
 - 特定の分野で納まらず、さまざまな内容が提供されていたので毎回興味深く参加しました。リフレクティブジャーナルを書くことも大変役に立ったと思います。授業について考えつつ、学生(受講生)の気分を思い出すのにも良い機会だったと思います。今後も機会があれば参加したいな、と思います。
 - セミナーや授業参観については、先に書きましたが、何よりも、今野先生、岡田先生をはじめ、プログラムのスタッフの方々が、運営に熱心に取り組んでおられることがよく伝わり、仕事に対する情熱の大切さを学ぶことができました。このような機会を与えていただきましたこと、お礼申し上げます。お世話になりました。
 - 他の参加者の方と交流できる機会があまり取れなかったのが残念ではありますが、個人の事情に依るところが大きいので、プログラム全体はよく構成されていると感じます。
 - 「先輩の知恵」に、「PPFP」の各セミナーが単発のものではなく、大きな目的のためのつながったプログラムであることを意識するように」とあった。このことをなるべく意識するようににはし

たが、ショートコースで例えば、12月（もしくは1月）のセミナーとして、PPFPショートコース全体を振り返り振り返り集めてはどうかと思う。「授業を見る聞く学ぶ」でバラバラに活動した受講者が最後に集って、半年の学びを振り返るのはどうだろうか。後半が尻すぼみになってしまう感が非常に勿体ない感じがする。

- 中等教育の教職課程を学部の人に履修した経験から言えることは、中等教育と高等教育とでは教員が行う必要があること、知っている必要があること、ゆえに、大学教員だけを対象にすることはおそらくは初等教育でも同じことが言えるはず。ゆえに、大学教員だけを対象にすることは少々もったいないと思います。現職の教員の方であればある程度心得ているのかもしれない。何らかの指針があると分かります。障害を持ったかたもありません。数回のセミナーを受講してみても、評価の行い方や学生の引き付け方、障害を持った学生への対応のしかた等の視点で授業を見ることが、質問をすることができるといいなっていました。

VII. プログラムの運営について

1. プログラムの受講の効果について、参加者から以下の回答を得た。
 - 本プログラムを受講することで、自分の教育実践を振り返る視点を増やせたと思う。特に、授業見学が私にとって大きな収穫だった。他の教員の授業をみることで、いろんな選択肢を増やせたと思う。
 - 数回のプログラムだけでは、リフレクションを日常を通して行う姿勢などまだまだ習慣化できていないこともあるが、多角的な視点を持つことへの理解や教授法など、多くの気づきがあった。大学教員としての在り方は、置かれた場所により多様であり、その多様性から得られた視点を自身の立場にうまく取り入れていくことを学んだ。他分野の受講生や経歴豊かな先輩教員の皆さんと触れ合うことで、これまでの教育観や価値観に柔軟性を加えることができたと振り返る。
 - 1 単位に相当する学修に必要な時間というものを全く理解していなかったため、毎回の講義内容をどの程度濃度にするかを考えたことがなく、その理解をしたのちは、自分が漠然と考えていた内容では足りないと思った。評価する方法を考えながらシラバスを設計する必要性などもはつきりと意識して考えたことがなかった。これまで教養科目の講義経験がなかったため深く考えてこなかった点であるがこれらについても考える必要があるとわかった。理解のプロセスについても今回初めて話を聞くことができ、私が講義を行なう場合には活かしていきたいと思う。
 - これまで自分が取り組んできたことを客観的に振り返って考える機会になった。また、他分野のお話を聞くことで、自分の視野が狭くなっていくことに気がついた。業務の関係もあってか、こしばしば教育に意識が強く向いていたが、研究することについてもじっくり考えねばと思う機会が多くなった。
 - 授業参観が特に参考になった。各先生とも授業内容やスタイルに併せた独自の創意工夫をしており、自身の授業と照らし合わせてフィードバックできる良い機会となった。また、セミナーに関してはシラバス作成が特に効果的であったと感じ、私自身本プログラムを通して座

学的なセミナーよりも実学的なものがより身についたと思う。そう言う意味でも、受講生のタイプや分野、目的に合わせたセミナーを開講してくれるとありがたい。私自身が実学派、理系なので実習や問題作成・回答形式のセミナーがもっと多いとありがたい。また、理系教員に向けてのプログラムもあると個人的にはありがたい。

➤ 授業の単位認定に値する「可」の考え方について、当初はシラバスの水準をクリアできた場合80点と位置づけていましたが、最低限の基準(60点)をクリアできるようなシラバスを設定するべきだと心境に変化がありました。また、3つの専門性の異なる授業を受けさせて頂いて、いい授業とは一方的に講義することなく、いかに学生を巻き込むか・参加させるかというところが重要であり、その準備には膨大な時間が必要であることがそれぞれの授業から学べ、これまで漠然ととらえていた講義というものの裏側が垣間見えてよかったです。

➤ 先達の先生方の授業を参観できる機会には本当に貴重な経験であり、今後の自分の教育活動にとって間違いなく財産になると感じます。諸先輩方の教材研究・授業運営の手法や学生を想う熱意に触れ、今まで手探りであいまいままやってきたことがいかに学生にとって不利益であったかを反省させられる思いでした。教育活動初期の教育者を育成・教育する仕組みをもっと充実させ、またそのような機会を教多く経験することができるようになれば、さらに質の高い教育活動を行うことができると感じました。先達の先生方のお話や授業を拜見して特に感じたことは、教員自身が熱意をもって授業を計画し運営することで、必ず学生にもその熱意は伝わるといことです。学生が集中して授業に取り組む環境をいかに工夫して整えてあげられるか次第で、その後の姿勢も大きく変化することが実感でき、教員自身の評価やフィードバックの不足などの問題点も改めて自覚できました。すでにリアクションシート等を導入して学生からの授業評価や改善要望を集めています。今後このようなプログラムに参加する機会があればぜひまた参加したいと思っています。

➤ これまで、TA以外には教育にかかわる機会がなかったので、改めて教育の精勤の重さを考えさせられました。他分野、とりわけ理科系の方々との対話を通じて、人文・社会科学の役割を考えさせられるとともに、授業参観では、専門外の学生への教養教育の重要性、関心を引き出すための工夫の必要などを考えさせられました。また、受講を通じて、大学や教育をめぐる諸問題に関して、これまで以上に関心を持ち、考えるようになったと思います。

➤ 以前よりは自分の授業を客観的に見られるようになったと感じます。

➤ 自己満足の授業にならないよう、たとえ経験年数を重ねて自信がついてきても、謙虚な姿勢で他から学ぶ、良い教育実践から学び続けることが大事であると、改めて認識させていただきました。プログラム実施を支えていただいた皆様、貴重な機会をありがとうございました。

➤ 等身大の大学教員の姿 永吉久子先生は、ご自身の授業を見る聞く学ぶ」のために公開してください、ディスカッションで、試行錯誤しての苦労をお話しくださった。また、12月の授業見学では、永吉先生は、すでに大学教員をされているにもかかわらず、2コマも授業見学に参加されていた。自分の教育の質を高めようと努力されている姿を見せていただいた。私自身は、大学生の時、教育実習に行き、あまりの指導のできなさ、理想の教師と現実の自分のギャップに失望した。今から思えば、大学2年生がいきなり理想の教師のように授業ができるわけなどなかったのだが、当時はそんなこともわからず、自分は教員に

は向いていないと教員になることをやめた。研究も完璧にこなせるスーパーマンだけれど、大学教員になるわけではないのだ。努力するからこそ、目指す大学教員の姿に近づいていくのである。永吉先生の等身大の大学教員としての姿は、私に希望を与えた。・大学教員の役割 それでは私にとっての理想の大学教員の姿とはどのようなものか。東北大学の堀龍也先生の講義は、講義の内容そのものが興味深いことはもちろんであるが、大生対象であっても、線を引きながら資料を読む、メモを取りながら映像を見るなど学習の仕方を教え、良い意味でパターン化された授業の進め方で学生に自動化を促し、どんな発言も拾ってくれることで発言したくなる雰囲気を作られている。今回、邑本俊亮先生の授業を、PFFPのセミナーと実際の学生を相手にした授業との2回も味わうことができた。邑本先生は、クイズのように事例を織り込むことで、そうなんだと学生を感心させながら理論的なことを教えてくださる。パターン化されたワークシートで、授業の全体像を示し、ワークシートの中で毎回のリアクションを実現する。張りのある声で、でも決して押しつけがましくない雰囲気がある。このように講義内容が学生にとって有用であり、学び方も教え、学生に力が付き、意欲的に取り組んでくれる、(漠然としている表現しかできないが、)これが私の理想の大学の授業であり、それを表現できることが理想の大学教員である。このことをもって行動レベルに落とし込んで表現できるように目標立てていかなくてはならないのである。アンケートに書くのはこまめである。PFFP2016に参加したことで、自分には無理だと思っていた大学教員という仕事が、少し近くにやってくるような気がしている。参加させてもらったことを心から感謝しています。ありがとうございました。

➤ プログラムに参加するまでは、授業の内容が『理詰め』だったが、分かりやすい授業を心がけるようになった。自分は、ただの『研究者』でなく『教員』であるということを意識するようになった。

➤ 以前は小学校から高等学校の教員と大学の教員とを比較すると異なることが多いのだろうなと考えていましたが、それは違っていました。共通点が驚くほど多い。このことがこのプログラムを受講して最も深く感じたことでした。だから、大学教員たる者、大学だけではなく小学校、中学校、高等学校の現状も知っておく必要があるのだろうと感じました。ひとつ考えられることは、大学の授業だけではなく、小学校、中学校、高等学校の授業も見なければもっと考えが広がるのではないかと。

➤ 本プログラムを受講して、大学教員の役割や仕事をより深く理解することができました。また1)シラバスの設計2)講義時間の配分3)講義の進め方について大変良い勉強になりました。今後の講義に取り入れて応用したいと思います。

2016 年度 JFP フルコースアスケート結果

2016 年度 JFP フルコースアスケートでは、以下に示す 8 つのカテゴリからなる質問項目を設け、参加者からの回答を得た。回答者は 6 名であった。

- I. 各種セミナーについて
- II. リフレクティブジャーナルについて
- III. 先進教員について
- IV. 動画配信の利用について
- V. プログラム参加における情報提供について
- VI. 国内他大学訪問調査について
- VII. 海外他大学訪問調査について
- VIII. プログラムの運用について

I. 各種セミナーについて

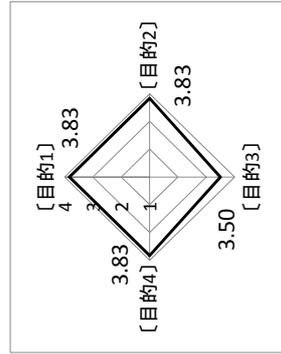
1. 以下に示す達成目標に対して、それぞれのセミナーはどの程度有益であったかについて 4 件法 (1. 全く有益ではなかった～4. とても有益だった) で評価を求めた。

【NPP の達成目標】

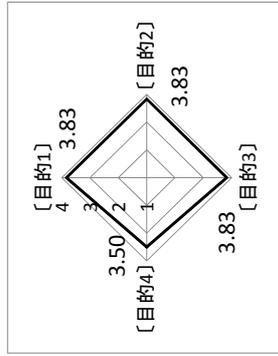
- 【目的 1】 生涯にわたり専門性を高めるために、効果的な省察ができるようになる
- 【目的 2】 大学教員の役割、仕事を理解し、展望を持ってキャリアを設計できる
- 【目的 3】 教育活動に関する基礎的知識を身に付け、自分なりの言葉で教育観を語るようになる
- 【目的 4】 異分野の研究や教育文化を知る

以下に各種セミナーに対する参加者からの評価結果を示す。図中の数値は全体の平均値である。

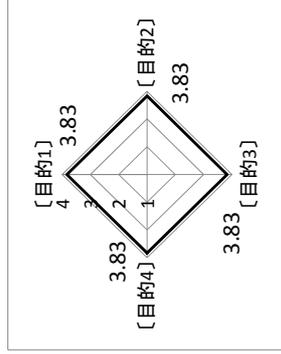
(A) オリエンテーション
「大学教員の役割...」「比較の目を育てる」



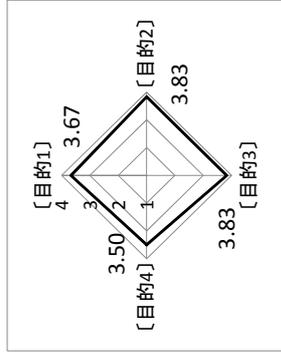
(B) 「授業デザインとシラバス作成」



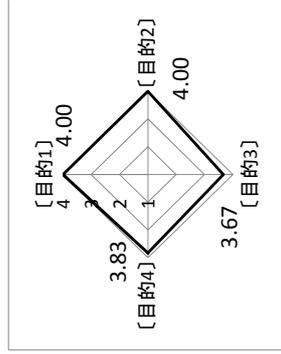
C) 「授業づくり：準備と運営」



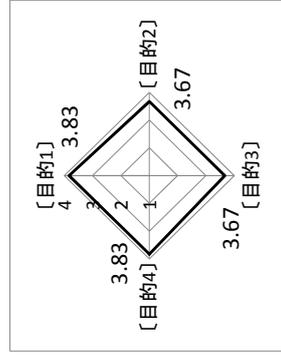
D) 「本当のかしこさ」とは何か」



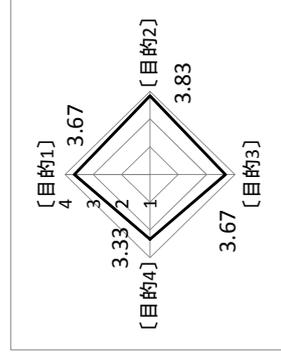
E) 「授業を見る聞く学ぶ」授業参観



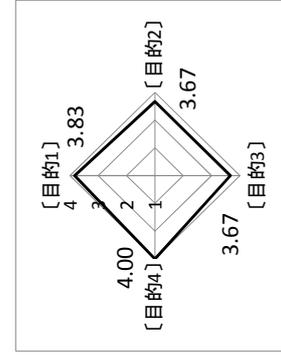
F) 「自分の授業をみつめる」マイクロティーチング



G) 「コーチング技能を活用した院生指導」



H) 「自分の授業をみつめる」模擬授業



II. リフレクティブジャーナルについて

プログラム全体を通してのリフレクティブジャーナルの執筆について参加者からの評価を求めた。

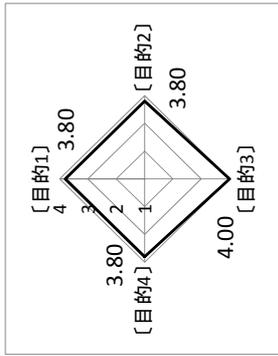
1. リフレクティブ・ジャーナル（以下ジャーナル）の作成についての評価を求めたところ、参加者から以下の回答を得た。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1) ジャーナルの執筆方法について十分な説明・支援を受けた	0	0	0	6
(2) ジャーナルの執筆が学習内容の整理・記録に役立った	0	0	1	5
(3) ジャーナルの執筆は自身の思考を深めるのに役立った	0	0	1	5
(4) ジャーナルの執筆により新たな気づきを得られた	0	0	1	4
(5) ジャーナルの執筆は達成目標への到達に対して有益だった	0	0	0	6
(6) ジャーナルの執筆は最終課題レポートの執筆に役立った	0	0	1	5
(7) ジャーナルに何を書いたらよいかわからないことがあった	3	2	0	1
(8) ジャーナルの提出締め切りは適切だった	0	0	2	4
(9) ジャーナルの執筆に取り組むことでリフレクシオンのやり方が身についた	0	0	3	3
(10) ジャーナルの執筆はこのプログラムに必要なと思った	0	0	0	6

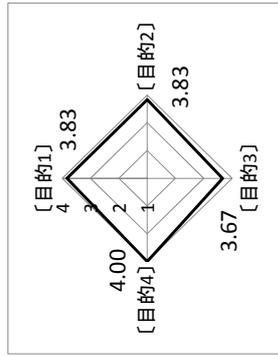
【自由記述より】

- プログラム全体を通して、自分のリフレクションが深まるきっかけになった出来事について
 - 自分のためのメモではなく、人に伝えるということを意識して言語化するということが役に立っていたように思います。ジャーナルを書くこともそうですが、セミナー後に他のメンバーと感想をシェアすることで、自分が感じたり深まったりしていたように感じました。また、ジャーナルでもディスカッションでも、伝えただけに、その内容に対してのフィードバックや他の人の感想が得られたことで、自分がうまく言語化できていなかった部分を明確にしてみたら、人と比べて自分のものの見方の個性を知ることができ、良かったと思います。加えて、プログラムが進行し、自分なりの考えがある程度深まってきた段階で、それ以前のセミナーあるいは以前に書いたジャーナルに立ち返ることで、新しい気づきを得られたり、見方が変わったりました。他人との比較だけではなく、以前の自分と現在の自分を比較すること、見えてくるものも多かったように思います。
 - 自分のリフレクションについて、スタッフからのレスポンスが充実しているため、自分の考えていることがどういった風に第三者に受け止められるのかという点について発見できる付加価値が大きかった。

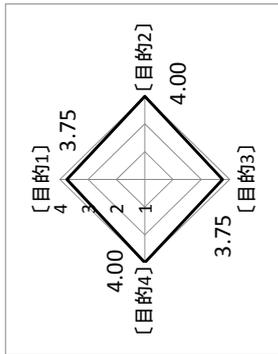
J) 「国内外大学訪問調査事前研修」



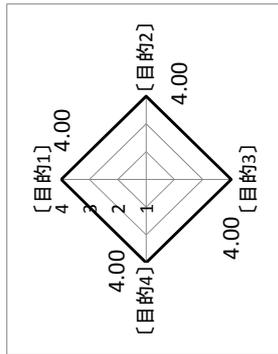
L) 「先達から学ぶ」先達コンサルテーション



I) 「国内他大学訪問調査」



K) 「国内外大学訪問調査」



2. 各種セミナーに関するその他の意見、要望、提案は以下の通りである。
 - 講師の先生方のご都合があまりむずかしいとは思いますが、授業期間に開催されるセミナーの曜日が偏ると、欠席が続いてしまったりするため、できれば曜日が分散しているとありがたいです。最初の面接時に、授業担当曜日をお願いしていた気がしますが、後期のスケジュールを正確に把握しておらず間違っただけのような記憶もあります。もし融通がきくようであれば、受講生が固定で参加できない曜日時間を、オリエンテーション時等に文書で提出させるなどしていただくと良いようにも思います。ただ、コーチング以外ではISTUでフォローかなりしつかりとできたので大変ありがたかったです。
 - 非常に多角的なプログラムで、広く知見を深めたいという私の目的に合致していた。特に授業参観や国内外研修は自力では難しい機会を得られるいい機会だった。
 - どのセミナーも大変有意義でした。今後はOBとして貢献できればと考えております。

- セミナーを振り返ることで、記憶が定着すると感じた。また、最後の最終報告のレポートは、今までの研修の資料を振り返ることができ、そのときに、新たな視点で研修資料を見ることができ、成長を感じることができた。

- ジャーナルの執筆、リフレクションの実践についての意見、要望、提案
 - ジャーナル提出の受領メールで、いろいろとコメントをいただけたのが、本当にありがたかったです。報告会で先生のコメントを伺って、先生方にとってはご負担...ということもよくわかりました。毎回自分のジャーナルと合わせていただいたメールを印刷してフィードバックしていただいていたが、今度整理するのはとても嬉しい機会となった。自由フォーマットのた
 - セミナー等というわけはなしになりがちなので、リフレクションを通して自分の関連領域にどう
 - 今後もぜひ、継続してほしいと思います

III. 先達教員について

- 1. プログラムにおける先達教員との交流についての評価を求め、参加者から以下の回答を得た。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1) 先達教員の存在によりプログラムの内容がより深く理解できた	0	0	2	4
(2) 先達教員との交流によりセミナーでの学習内容を現場の実態や教員の経験と結びつけて考えることができた	0	0	2	4
(3) 先達教員の存在は達成目標への到達に対して有益だった	0	0	2	4
(4) 先達教員の存在は自身の教育に対する考え方に影響を与えた	0	0	2	4

- 2. ジャーナルに対する先達教員からのコメントについての評価を求め、参加者から以下の回答を得た。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1) 先達教員からのコメントは自身の思考を深めるのに役立った	0	0	3	3
(2) 先達教員からのコメントにより新たな気づきを得られた	0	0	2	4
(3) 先達教員からのコメントは最終課題の執筆に役立った	0	0	2	4
(4) 先達教員からのコメントのフィードバックのタイミングは適切だった	0	0	2	4

- 3. 先達教員との交流、コメントについてのその他の意見、要望、提案は以下の通りである。

- オリエンテーションの際の昼食時、メンバー同士も初対面だったこともあり、メンバー間の会話は終始してしまいがちでしたが、そのことの貴重さを十分に理解できていなかったようにも思います。たぶんアナウンスしていただいていたと思うのですが、メンバー同士はいつでも話せるので今後はぜひ先達教員と交流を、と強く促していただけるとありがたいかもしれないです。授業参観、コンサートについては、かなりじっくりとお話を伺うことができ、大変満足でしたので、特に要望等はありません。
- 短い時間を有効活用するために事前に各先生の授業経験などを調べたうえで臨んだが、話をしてみるとそういう事前調べの中ではみえてこなかった高次連携への活動の経験が浮き彫りになり話がありあがり等、予測不能な難しさや面白さがあった。私個人は教育のあらゆるフィールドに関心があるので、むしろ各々の先生がもつとも問題意識をもっているトピックを定めてそれについて議論するのもいいかなと思った。実際事前に用意した質問がその先生とマッチしなかったり、どういったトピックに対して深い知見があるかを深める時間がどうしてもかかってしまったところがあり、最初からテーマが決まっていた方がより深い議論にはやく到達できたと思う。
- 先達教員との個人面談は非常に有用でした。ぜひ、来年度も以降も継続してほしいと思います。できれば、面談時間は本年度同様20分程度あると良いと思います。

IV. 動画配信の利用について

- 動画配信の利用について評価を求め、参加者から以下の回答を得た。

- 1. プログラム期間中を通して、ISTUを利用しましたか。

1. 利用した	6
2. 利用しなかった	0

- 2. 動画配信について評価を求め、参加者から以下の回答を得た。

	未使用	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1) ISTUの利用方法について十分な説明・支援を受けた	0	0	0	2	4
(2) ISTUによる動画配信は学習の役に立った	0	0	1	2	3

- 3. ISTUの利用についての意見、要望、提案は以下の通りである。
 - ISTUには本場にお世話になりました。欠席時のフォローという意味だけではなく、当日受

講したものの振り返りとしても大変役立ちました。ジャーナル執筆時だけでなく、数ヶ月後など時間を空けての復習という意味でもとても活用できました。復習としての使い方については先輩の知恵を参考にしたのですが、口頭で伝えていただけるといいかもしれません。(す)

➤ ISTU は欠席したときの代替手段というイメージが強く、あまり活用しませんでした。(すべての研修に参加したので) 自身がリプレクシオンを行う際にISTUをもっと利用すればよかったと思います。

V. プログラム参加における情報提供について

1. オリエンテーション時に配布した「先輩の知恵」について評価を求め、参加者から以下の回答を得た。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1) 「先輩の知恵」を読んだ	0	0	4	2
(2) 「先輩の知恵」の内容が研修の参加に役立った	0	0	4	2

2. 「先輩の知恵」についての意見、要望、提案は以下の通りである。

- どの内容も、本当にそのとおりで、読んでおいてよかったと思います。
- 様々なイベントに対して「よく準備しておけb」という旨の記述があったため、それぞれに対して備える気持ちをもつことができました。

3. パークレー研修前にメールマガジンのかたちで送ったメール「パークレー研修に向けて」について、参加者から以下の回答を得た。

	全く読まなかった	ほとんど読まなかった	ある程度読んだ	かなり読んだ
(1) 「パークレー研修に向けて」を読んだ	1	0	1	4
(2) 「パークレー研修に向けて」の内容が研修の参加に役立った	0	0	1	4

4. 「パークレー研修に向けて」についての意見、要望、提案は以下の通りである。

- 最後の方に送っていたいただいた動画は、リスニングの練習にもパークレーの理解にもとても良かったです。教えていただいた YouTube からあれこれとってみた結果、パークレーの公式アカウントから実際の授業動画もたくさん公開されていることを知り、出発前数週間は仕事中はほぼずっと BGM として流していました。自分の専門の授業などは用語もわからず聞きやすいので、おすすめしたいなと思います。事前研修を受けると授業 ID から誰向けの講義か、までわかってさらに面白かったです。GSI セクションの動画もいくつかあって、なるほどこういうものなのかと、目で見ても初めて理解できたので、そういうものも事前に見せてよかったです。
- 事前に GSI プログラムについて事前研修はそこまでフォーカスしないため、ガイダンス動画やシラバスをみることで、その背景を理解して参加したのは大きかったです。
- 海外では日本と文化が異なることも考えられるので、しっかりと事前準備する必要があると思います。本年度は、事前研修があり、心構えなども勉強でき、よかったです。
- 「パークレー研修に向けて」を最初に読まなかったのが、個人的にも残念でした。時間がなかったということもあったが、「パークレー研修に向けて」についても、リフレクティブジャーナルを提出しないといけないという決まりがあったら、きつともっとはじめに取り組んでいたと思います(提出しなきゃ、というプレッシャーを感じただけではなく、与えられていた情報が、自分にとってどのような意味を持つか、パークレー研修で具体的にどのようなことをやりたいか・できるかについて、前もってもって考えられる機会にもなったのかもかもしれません)。

VI. 国内他大学調査訪問について

1. 国内他大学調査訪問について評価を求め、参加者から以下の回答を得た。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1) 研修前に十分な情報・支援を受けることができた	0	0	0	4
(2) 引率教員と十分なコミュニケーションがとれた	0	0	0	4
(3) プログラムの内容は充実していた	0	0	0	4
(4) プログラムの内容・分量に対して負担を感じた	1	2	1	0
(5) プログラムに参加することで大学間の比較の視点を養うことができた	0	0	0	4

2. フィールドワークで実施した活動について、参加者の回答は以下の通りである。

- 関西の中でも同志社や立命館といった普段なじみのない大規模私立大学に触れることができたのが貴重な体験だった。この機会を通してほとんど知らなかったラーニングコンテンツについて俯瞰的に考えることができるようになった。

- 他大学との比較は非常に大事だと思えます。なかなか他大学の授業を参観できることは難しいので、ぜひ、来年度も継続してほしいと思います。
- 大変勉強になった。今回阪大の授業参観と施設見学もできて、とてもよかったです。

VII. 海外他大学調査訪問について

1. 海外他大学調査訪問について評価を求め、参加者から以下の回答を得た。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1) 研修前に十分な情報・支援を受けることができた	0	0	0	5
(2) 引率教員と十分なコミュニケーションがとれた	0	0	0	5
(3) プログラムの内容は充実していた	0	0	0	5
(4) プログラムの内容・分量に対して負担を感じた	2	1	1	1
(5) プログラムに参加することで大学間の比較の視点を養うことができた	0	0	0	5

2. 海外他大学調査訪問におけるフィールドワークについて評価を求め、参加者から以下の回答を得た。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1) 希望する研究者を訪問することができた	0	0	1	4
(2) フィールドワークの時間を有効に使うことができた	0	0	1	4
(3) フィールドワークの実施に対して負担を感じた	3	1	1	0
4(4) フィールドワークでの実践結果に満足した	0	0	1	4

3. フィールドワークで実施した活動

- 臨床心理学の Ph.D コースの責任者である教授、および Ph.D.コースの学内実習機関としての附属クリニックの責任者を訪問しました。前者には Ph.D.コースの学生に対する研究指導体制や、そこでの問題点、ラボとしての研究組織のつくり方や、それを通して学部生から院生までが学生同士で教える体制や環境の育て方などについて教えていただきました。同時に日本の研究指導の問題点について伝え、アメリカとの共通点について教えていただいた上で、解決策についてのディスカッションをしました。後者の方では、臨床実習の体制を詳しく教えていただいた上で、研究指導とのバランスの取り方についても教えていただきました。事前にアポイントを取っていたのは上記2名ですが、現地で Ph.D.の学生さんを紹介してい

ただき、学生の視点から見ただけで、限界点について話を聞かせてもらいました。加えて、その学生さんが担当している GSI セクションについて、資料や運営方法に関する話も伺うことができました。実際の GSI セクションの見学も提案されたのですが、空き時間がなかったものでそれは叶いませんでした。またクリニックの施設見学も、学生さんに案内してもらいました。

- ・ 自分に関連する研究を行っている研究所および研究室の訪問、装置の見学・LBNLにおける高次連携プログラムに関するディスカッション
- 引率教員のフォロー・サポートで大変有意義な海外研修となった。海外での授業を参観することは、比較の目を育てるのに必要なことだと思います。
- まず、私の専門分野の授業を2つ参観しました。そのうち1つの授業の担当の先生は、授業やご自身の teaching methods について話す時間もとってくださり、大変勉強になりました。また、問題関心の近い研究者(1名)との打ち合わせもし、研究の話もできました。大変充実したフィールド・ワークになったと思います。

VIII. プログラムの運営について

1. プログラムの運営について評価を求め、参加者から以下の回答を得た。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1) NFP の広報、募集の時期は適切だった	0	0	2	4
(2) NFP におけるセミナーの回数は適切だった	0	0	3	3

2. プログラム提供期間について評価を求め、参加者から以下の回答を得た。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1) プログラム提供期間 (7月~3月提供) は適切だった	0	0	4	2

(「全くそう思わない」「あまりそう思わない」を選択した回答者からの要望)

- ・ どうしよもない部分が大きいとは思いますが、2~3月の負担が(普段の業務も増える分)大きかった。おそらくマイクロローチングを授業参観後にやりたいということだと思いが、マイクロローチング、授業参観を少し早めることができれば負担は多少違うと感じた。

く取り入れたいと思うようになりました。来年度、ゼミ運営に関連していくつか試してみたいと考えています。1 点目はゼミ生と相談の上、来年度からゼミのオープン化をはかることにしました。今年度クロージングで開催していたゼミの集まりを、来年度他ゼミの院生に対して開放することにししました。発足したことで D 生がいないという大きな限界点があったのですが、他ゼミの D 生が参加を希望してくれたことで、学生同士が学び合う教え合うという体制が促されるのとともに、他ゼミの文化を背景とした指觸が開けるようになればと考えています。加えて、こちらも当初ゼミ行事として予定していた論文執筆合宿を、学内外職種専門年齢等を問わず公開（知人の範囲で）することにしました。論文を書くという共通項をもった上で、そこでの悩みや工夫などを、途中のワークショップや懇親会で異分野交流できればと思っています。できれば NFP 同期とのつながりが、そうした場で活かされればとも考えています。

- もともと教育に関心があったが、所属している部署が教育 duty がいないところのため、自分の教育活動を行うのに非常にエネルギーが必要な状況だった。その中で定期的に参加者やスタッフからの刺激を受けることで 1 年間教育へのモチベーションを保ち続けることができたのが一番の収穫だった（おそらく関連分野でこれだけアウトリーチに気持ちを持っている人はいないんじゃないかというぐらい熱心に取り組むことができた）。またそれまで中等教育に比べて高等教育をそこまで意識していなかったが、結局この二つは連結されており、大学教員にとって高等教育も重要なミッションであると考えているようになった。
- 受講する前は、「大学教員の仕事とは何か」かなり漠然としていましたが、受講することによって、少しずつ自分が目指すべき大学教員像が明確になってきました。

3. プログラムの広報方法についての意見、要望、提案について自由記述で回答を求めた。

- 各研究科等の教授会でアナウンスしてもらったのが、効果的なのではないかという印象があります。ポストにパンフレットを投函されたみたいなのも教員はあまりと聞いていないように思います。プログラマがあるということさえ知れば、指導学生に教員志望の学生がいたら紹介しようという気になるように思いますし、新任教員側も、公式に認められている雰囲気になり参加を申し出やすいような気がします。
 - 現状のような新任教員研修でのリーフレット配布、事前説明会等の体制は本来に関心のある参加者にちよほど届くいい広報手段に感じている。
4. プログラム全体についての意見、要望、提案について自由記述で回答を求めた。
- すべての内容が自分のやっていることに直結していたので、参加してよかったですから思います。回数に限られている中で、プログラム全体がどちらかというと学部教育、授業というところに重点が置かれていて、多くの PFP/NFP 対象者が一番困る部分にフォーカスされていて有益だと思えました。そのような制限の中でも、コアリングのセッションが含まれるなど、大学院教育と個別指導が業務の 9 割型をしめるやや特殊な自分自身の現職にとって、一番知りたい部分もカバーされていてありがたかったです。パークレーでのフィールドワークや先達コンサルなど、プログラム全体とはややずれる自分個人の関心や問題について解決できる時間が確保されているのもありがたかったです。敢えてあげるとすると、パークレーで最終日に受けた倫理の WS で、自分を含め NFP メンバーの関心が高くなり高く、昼休みもそのまま盛り上がりつつあり、4.5 時間もデイスカッションできそうだったので、そのあたりの内容があれば面白いと個人的には思いました。実際、SNS の扱いや、夜遅い時間に異性の学生が研究室を訪ねてきたらどうするか、など身近な教員の中でも意見が割れることも多く、対応に悩む初年度だったので。ただ、当日の反応をみると PFPF メンバーとの間にわりとテンションのギャップがあったので、PFP/NFP のテーマではないのかも感じました。
 - 大変充実したプログラムだった。各大学でかなりプログラムの質も違うことが分かり、その個性も重要なポイントだと思うので、今後も独自のプログラム開発を期待している。

5. 本プログラムを受講して、ご自身のこれまでの教育観や価値観、行動について変化、明確化が図られた点について自由記述で回答を求めた。

- 教育観を育てるという大きな目的の手前で、「明日から使える」知識スキルを得ることも多かったのですが、担当している授業の講義の仕方、グループワークの仕方は、授業参観やマイクログ、模擬授業を経てリアルタイムで更新していくことができました。また、教育観価値観という意味で授業面が変化があったのは、大規模を相手とした講義で試す前に諦めていたことを、まずは試してみようと思ったことだったと思います。様々な工夫をこらした大規模授業を参観できたことは、学生だったときのことを含めても初めての経験で、非常に新鮮でハッとさせられました。プログラム全体を通して比較と他者との交流の重要性を毎回必ず感じており、それを自分の実践にも広

2016年度JFPフルコース海外他大調査訪問（パークレー研修）アンケート結果

2016年度パークレー研修アンケートでは、参加者6名からの回答を得た。

I. パークレー研修の各セッションについて

1. 以下に示すそれぞれのセッションがどの程度有益であったかについて4件法で評価を求めた。

- 0. 不参加
- 1. 全く有益ではなかった
- 2. あまり有益ではなかった
- 3. 有益だった
- 4. とても有益だった

	不参加	そうでもない	あまりでもない	まあまあ	とても面白い
【1日目】					
(1) Welcome and Introduction to the Program	0	0	0	2	4
(2) Teaching and Learning at Berkeley (Linda)	0	0	0	1	5
(3) The Basics of Teaching (Linda)	0	0	0	2	4
(4) Campus Tour	0	0	1	1	4
【2日目】					
(1) Observation: The Politics of Educational Inequality (Lecture)	1	0	0	1	4
(2) Workshop: Fostering Student Participation (Michel)	1	0	0	1	4
(3) Student Learning Center	1	0	0	2	3
(4) Observation: Brain, Mind, and Behavior (Lecture)	0	0	1	2	3
【3日目】					
(1) Observation: The Politics of Educational Inequality (GSI section)	0	0	0	0	6
(2) Observations of Sections: Biological Anthropology	0	0	1	2	4
【4日目】					
(1) Overview of the Day's Program: Debriefing of Day 3 (Linda)	0	0	0	0	6
(2) Lunch with GSI	2	0	0	2	2
【5日目】					
(1) Overview of the Day's Program (Linda)	0	0	0	1	5
(2) Professional Standards and Ethics (Linda)	0	0	0	1	5
(3) Presentations	0	0	1	1	4
(4) Closing Reception	0	0	0	2	4
【期間中】					
(1) Field work	0	0	0	0	6

2. 各セッションへの意見、要望、提案は以下の通りである。

- 授業にもっと出たい。
- それぞれの Workshop が大変有益だったと感じた。事例をもとにグループ等でディスカッションし、後教師からも指摘・助言をいただけるところがとて勉強になった。特に professional ethics のワークショップが、今まで全く受けたことがなかったの、大変勉強になった。毎日の debriefing も、振り返ってみれば、とても有益であった。前の日に気づいたこと、疑問に思ったことが、まだ頭に残っていた時点で、それを Linda に投げかけたりすることができて、頭の中も整理もでき、学んだこと・経験したことをすぐ忘れずにも済んだ。大変よかつた。
- 普段教育に焦点をあてて海外の大学に訪問できる機会を得られることはないの、その点1週間海外の教育現場を観るということに注ぐことができたのは有意義だった。特に Berkeley にとって特徴的な GSI の学生と FREE HOUSE 等で奇譚なく議論ができたのは刺激的で、本プログラムならではのものを得ることができたと感じている。これは、GSI center や引率教員の負担と大学のスケジュールにも依存するところではあるが、個人としてはプログラムがもうひと回り密でも十分それぞれのプログラムから吸収することができたかと感じている。また、ガチガチの理科系の授業や GSI session をせわかくなのでみたかったと感じており、このあたりは事前に field work として私がアレンジできればよかつたと反省している。
- 【プログラムについて】全体としては、どのプログラムもとても満足度が高く、充実していて、眠くなることもほとんどありませんでした。プログラムの量としても、ちょうどよかつたように思います。参観もワークショップも、デブリリーフィングも、全部「もっと時間がほしい」という気持ちは残りましたが、あれ以上増やしていたら今度は体力的にきつかつたかなと思います。体力が落ちると英語がきつくなると、多少余裕が残るぐらいの、今の量はとても適度という印象をもちました。あえて延ばすとしたら、個人的にはデブリリーフィングの時間をもう30分ずつでも延ばしてもらえればありがたかつたようにも思いますが、それは夕食会や最後のレセプション等の他の場でも補えるので。1つの講義に対して2つのGSIセッションがありましたが、本音をいえればどちらも見てもよかったです。ただこれは受け入れのキャパがあるので、むしろ、2つのセッションを終えて、お互いに報告しあう時間を正式に設けてもいいかなと思います。またまた夕食会の際に話を伺うことができ、とても勉強になりましたが、かなり面白い発見が多かつたので、全員がそれを知るチャンスを得られるとよかつただろうなと思います。また授業参観について、初日のレクチャーで少人数の講義も多いと同だったので、大規模の授業と少人数の授業を1つずつ見ることができれば、その切り口での比較もできておもしろかつたかなと思います。ただ、これも受け入れ側のご都合があると思うので、参考までに、程度の要望です。【ワークショップ等の席配置について】全体的に席の配置が結構重要なように感じました。特にペアワークをするワークショップと、長時間のフリートークになる夕食会（昼食会は参加していないのでわからず）では、特に大切のように感じました。ワークショップはコーディネーターがいるのでまだ良いのですが、夕食会は、たとえよく話せるかつ話したい人がどんどんしゃべってしまうと、英語が苦手な人がなかなか自分の聞きたいことを聞けなくなる、といったことが起こりうるのかなと感じました。今回は自然発生的に、お互い

にフオーワーしあえるような配置になっていたもので、比較的うまくまわっていたようにも思ったのですが、場合によってはつらい思いをする人が出てくるかもしれないと感じました。なので、初日から様子を見ながら、ある程度席指定のようなかんじにするのもありかなとも思いましたが、そのあたりは自己責任という気もするるので、そこまでプログラムとして手をかける必要はないかもしれません。あえて言うなら、程度の意見として受け取っていただければと思います。【ワールドワークについて】現地で追加になるかもしれないのである程度余裕をもって、というアドバイスは大変ありがたかったです。また、今回事業のためにと余分なお土産を用意している時間があり、調整がしやすかったです。実際現地で追加になった際、複数提示していただけですが、それが結果的に役立ったので、そういう可能性もあると、事前に教えていただけると助かる人がいるかもしれません。最初にも書きましたが、全体として本当に充実した研修でした。プログラムの中身についてはもちろんですが、学びについてだけでなく、生活や体調、気持ちの面にまで、いつも先生方が気を配ってくださって、とても安心感がありました。ありがとうございました。

- 海外研修の前に海外の大学制度について学んで、海外研修に臨めたのは非常に良かったです。事前研修がなければ、海外との比較が難しかったと思います。キャンパスツアーでは、様々な施設を回ることでできて、良かったです。欲を言えば、GSI が使っている図書館の中を見たいなと思います。可能であれば、授業を受けている学生の話も聞けるセッションがあれば良いなと思いました。授業を受ける側の意見も聞いてみたいと思います。

2010年度 派遣先実地調査 + 試験的派遣

PFFPの試験的実施としてメルボルン大学（オーストラリア）およびUCバークレー（アメリカ）に院生13名を派遣
バークレー研修は現地のTAオリエンテーションに参加するがたて1日間、メルボルンは現地の新任教員研修をカスタマイズして10日間を実施

【引率者】バークレー：佐藤万知，芳賀満，メルボルン：佐藤万知，関根勉，北原良夫，甲本剛（すべて東北大学 高等教育開発推進センター教員[当時]）

2011年度 NFPを試験的に開始，国内実施セミナーを開発

PFFP15名，NFP3名。若手教員からの要望に基づきNFP（海外研修の派遣先はメルボルン）を開始
PFFPの海外研修の行先はメルボルンとバークレーの2グループ，国内で実施できるセミナーを開発し5件実施
参加者に助言をフィードバックする先輩教員をリクルートし「メンター制度」を導入（5名）

【引率者】バークレー：佐藤万知，芳賀満，メルボルン：今野文子，Todd Enslin（すべて東北大学 高等教育開発推進センター教員[当時]）

2012年度 派遣先の切り分け，国内実施セミナーの拡充

PFFP6名，NFP6名。PFFPの海外研修はバークレー，NFPはメルボルンに切り分け，差別化，授業参観の試験的導入（学内3件）
「メンター」に替え，先輩教員を「先達」（8名）と位置づけて個人コンサルテーション（NFP対象）を実施
京大・名大と共催で研究会「大学教員を育てる：入職前と入職後の能力開発」を開催

【引率者】バークレー：Todd Enslin，メルボルン：今野文子，芳賀満（すべて東北大学 高等教育開発推進センター教員[当時]）

2013年度 NFP：蔵王合宿に切替，授業参観の拡充

PFFP9名，NFP2名。NFPのメルボルン研修を廃止，メルボルンからの講師招聘による蔵王合宿に（2泊3日）
授業参観の拡充（学内10件），模擬授業を全参加者対象へ，先達コンサルをPFFPにも導入
広大・京大・立命館・一橋・北大と共催で研究会「大学教員を目指す大学院生の全国交流会」を開催

【引率者】バークレー：今野文子，Todd Enslin，蔵王合宿：今野文子，川井一枝（2011年度修了生），佐俣紀仁（NFP2012修了生）

2014年度 教材（ガイド・冊子・動画）の拡充，OB/OG通信の配信開始

PFFP5名，NFP3名，先達教員を9名に拡充，パンフレット配布，CM作成など広報に力
修了生の積極的参画を推進，バークレー研修前のメールマガジンによる情報提供を開始
「先輩の知恵」推薦図書集「リアプレクシヨンの理論と実践（動画）」などの教材を拡充

【引率者】バークレー：今野文子，杉本知弘，蔵王合宿：今野文子，川井一枝（2011年度修了生），野地智法（2013年度修了生）

2015年度 ショートコース設立，海外研修をオプション化

フルコースPFFP4名，NFP6名，ショートコース（*）PFFP4名，NFP6名。7月から開始
授業参観の拡充（学内14件，他大学3件），海外・国内他大学調査訪問をオプションとして設置
院生指導セミナーの導入，全プログラムの全国公開（'13-'14まではNFP蔵王合宿のみ全国公開）

【引率者】海外他大学訪問調査：今野文子，川井一枝（PFFP2011修了生），国内他大学訪問調査：今野文子，津村耕司（NFP2014修了生）

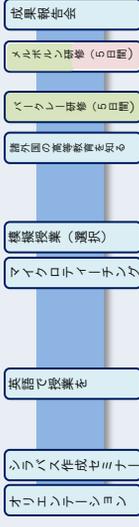
2016年度 ショートコースの拡充，修了生追跡調査の実施

フルコースPFFP3名，NFP3名，ショートコース（*）PFFP4名，NFP18名 = 計28名
授業参観の拡充（学内25件，他大学5件），修了生の授業を参観対象に
ショートコースに院生指導セミナーとリアプレクティブジャーナルの執筆を導入

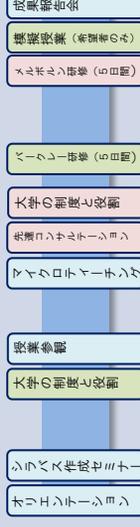
【引率者】海外他大学訪問調査：岡田有司，今野文子，国内他大学訪問調査：岡田有司，今野文子



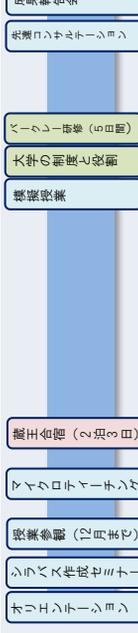
(その他) 最終課題論文



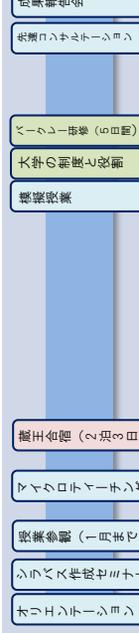
(その他) ポートフォリオの作成 (先達からのコメント/フィードバック)，最終課題論文



(その他) リアルティブジャーナルの作成，最終課題論文



(その他) リアルティブジャーナルの作成，最終課題論文



(その他) リアルティブジャーナルの作成，最終課題論文



(フォローはその他) リアルティブジャーナルの作成，最終課題論文



(フォローはその他) リアルティブジャーナルの作成，最終課題論文

執筆・編集担当者

第1部 第1～2章 今野文子

第1部 第3～4章 岡田有司

第2部（資料編） 岡田有司，今野文子，稲田ゆき乃，朱 嘉琪

教育関係共同利用拠点
「知識基盤社会を担う専門教育指導力育成拠点
—大学教員のキャリア成長を支える日本版 SoTL の開発」

2016年度報告書 東北大学ジュニアファカルティ・プログラム

大学教員準備プログラム / 新任教員プログラム

Tohoku University Junior Faculty Program Annual Report 2016
Preparing Future Faculty Program (PFFP) / New Faculty Program (NFP)

2017年6月15日 発行

編者
発行所 東北大学高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター

Center for Professional Development,
Institute for Excellence in Higher Education,
Tohoku University

〒980-8576 仙台市青葉区川内 41
TEL : (022)-795-4471
E-mail : cpd_office@ihe.tohoku.ac.jp

印刷所 北日本印刷株式会社
〒984-0064 仙台市若林区石垣町 35 番 6

ТОГОЛУ И. ЈУНИОР FACULTY PROGRAM

DEEP